

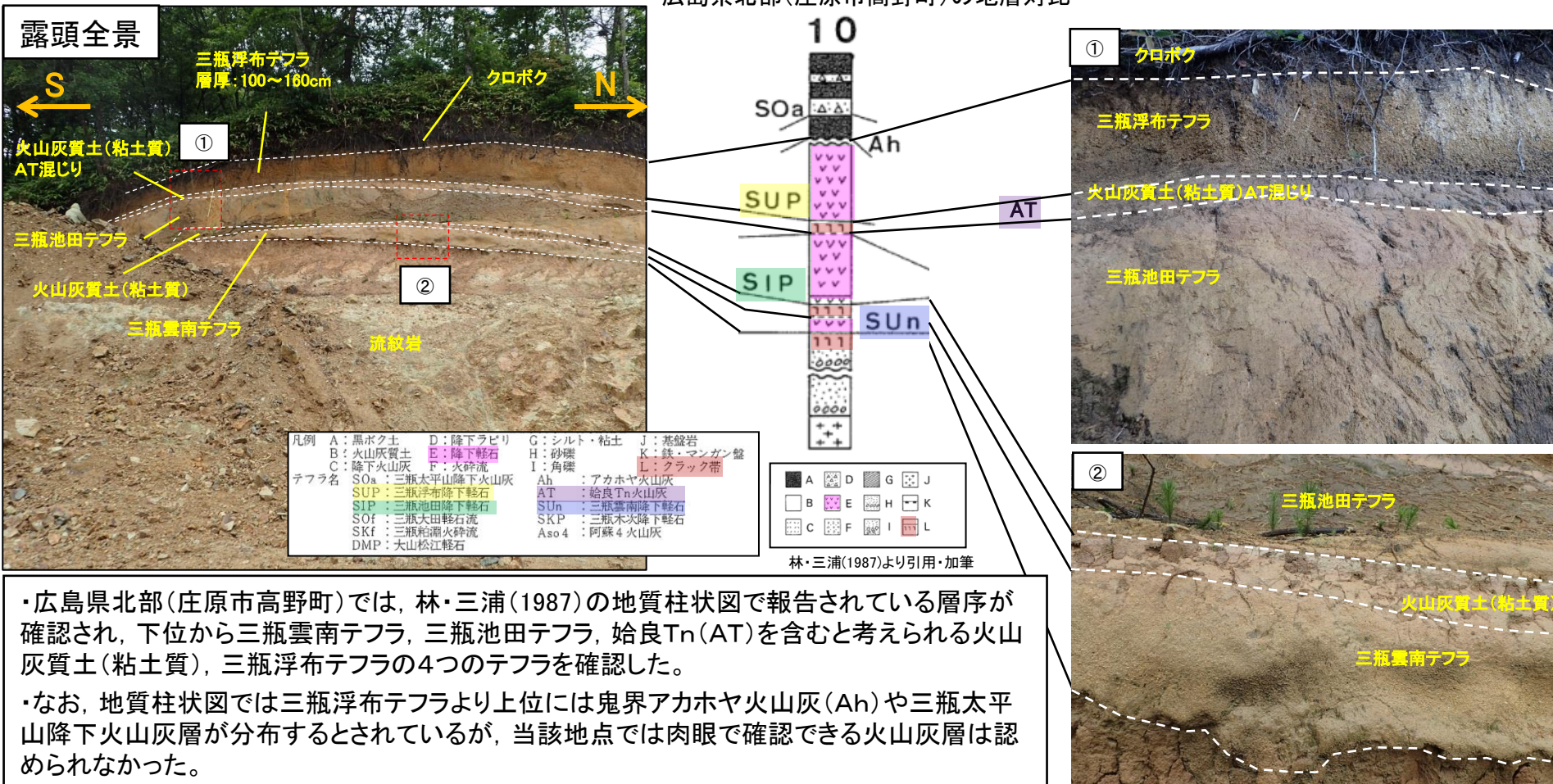
# 地質調查結果

# 地質調査における三瓶浮布テフラの同定について

## 三瓶浮布テフラの同定について

- ・林・三浦(1987)は広島県北部(庄原市高野町)において、三瓶浮布テフラ、始良Tn(AT)、三瓶池田テフラ、三瓶雲南テフラの降灰を報告し、以東では三瓶浮布テフラ、始良Tnの降灰を報告している。一方、野村(1991)では、広島県北東部(道後山周辺)において三瓶浮布テフラ及び始良Tn(AT)の他、三瓶池田テフラ、三瓶雲南テフラの降灰を報告している。
- ・上記の点を踏まえ、林・三浦(1987)の地質柱状図を参考に、当該地域付近(広島県北部(庄原市高野町)、飯南町都加賀、飯南町上来島)の地質調査により地層対比を行い、模式的な地質層序及び層相の特徴を把握した。以下に広島県北部(庄原市高野町)における地層対比を示す。

広島県北部(庄原市高野町)の地層対比



# 地質調査における三瓶浮布テフラの同定について

## 三瓶浮布テフラの同定について

・広島県北部(庄原市高野町)において確認された4種類のテフラについて、三瓶山から敷地に相当する範囲に分布する可能性のあるテフラとして層序及び特徴を整理した上で、三瓶浮布テフラを同定することとした。以下に4種類のテフラの特徴を示す。

テフラ名	噴出場所	年代	色調	含まれる鉱物	特徴
三瓶浮布 (SUK)	三瓶山	約1万5000年前	黄褐色	ho > bi > qt	<ul style="list-style-type: none"> <li>・軽石が主体。</li> <li>・軽石の風化が進み、濃い色調を呈する。</li> <li>・有色鉱物として角閃石が多く含まれる。</li> </ul>
始良Tn (AT)	始良カルデラ	2万8000 ~ 3万年前	灰白色 (酸化色は褐色)	opx > cpx > ho > qt	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三瓶起源のテフラには含まれないバブル型ガラスを多く含む。</li> <li>・新鮮な火山灰は灰白色、酸化したものは褐色を呈する。</li> <li>・風化作用にさらされる所では土壌化が著しい。</li> </ul>
三瓶池田 (SI)	三瓶山	約4万年前	黄灰色	bi > ho > qt	<ul style="list-style-type: none"> <li>・軽石が主体。</li> <li>・軽石は新鮮で断面が白色を呈する。</li> <li>・有色鉱物として黒雲母が多く含まれる。</li> </ul>
三瓶雲南 (SUn)	三瓶山	約7万年前	灰褐色	ho > bi > qt	<ul style="list-style-type: none"> <li>・軽石が主体。</li> <li>・火山ガラスに富む。</li> <li>・無色鉱物(石英・斜長石)に富み、三瓶浮布テフラや三瓶池田テフラに比べて有色鉱物(角閃石や黒雲母)に乏しい。</li> </ul>

ho: 普通角閃石 bi: 黒雲母 qt: 石英 opx: 斜方輝石 cpx: 単斜輝石

町田・新井(2011), 松井・井上(1971), 林・三浦(1987), 三浦・林(1991)<sup>(71)</sup>, 日本地質学会編(2009)を基に作成

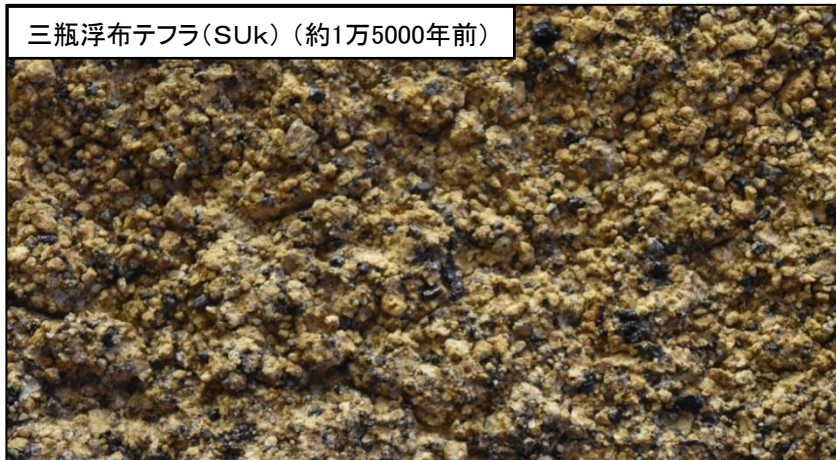
- ・三瓶浮布テフラは有色鉱物として角閃石が主体であるが、三瓶池田テフラは黒雲母が主体である。
- ・三瓶雲南テフラは三瓶浮布テフラ、三瓶池田テフラに比べて有色鉱物(角閃石や黒雲母)に乏しい。
- ・林・三浦(1987)は層序的に三瓶浮布テフラがATの直上にあることから、ATの上部に分布するテフラは三瓶浮布テフラ、下位に分布するテフラは三瓶池田テフラと判別することが可能であり、また、ATは火山ガラスを大量に含むことから識別が容易であると報告している。



## 三瓶浮布テフラの同定について

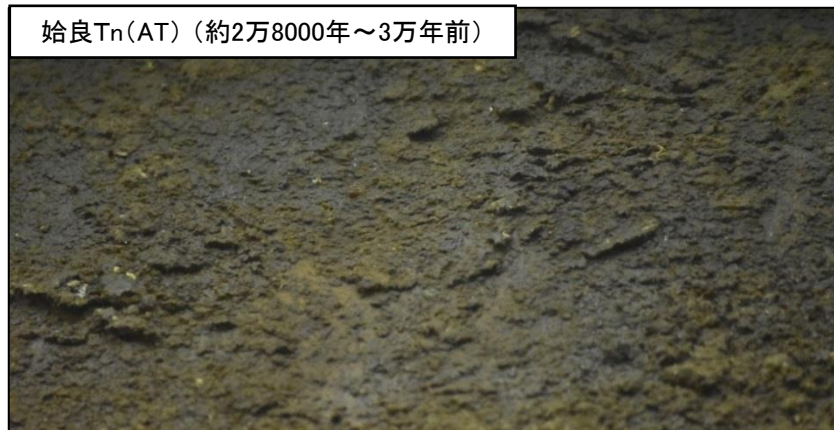
・以下に広島県北部(庄原市高野町)で確認された4種類のテフラの接写写真を示す。

三瓶浮布テフラ(SUk) (約1万5000年前)



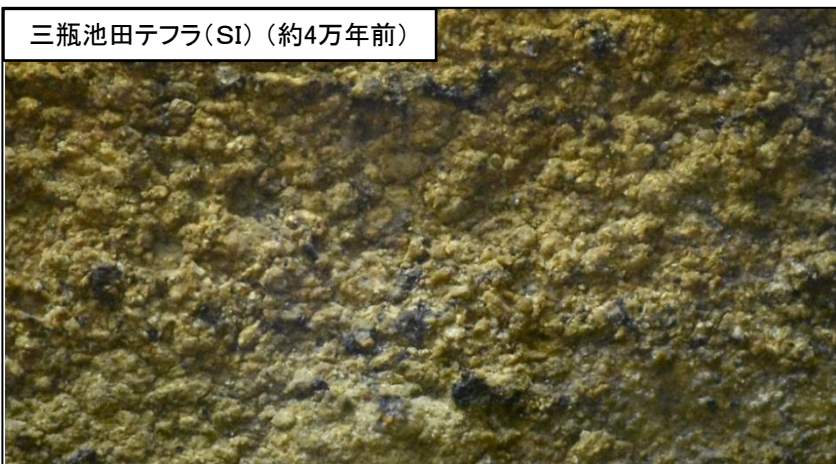
・黄褐色を呈する軽石が主体で角閃石に富む。

始良Tn(AT) (約2万8000年~3万年前)



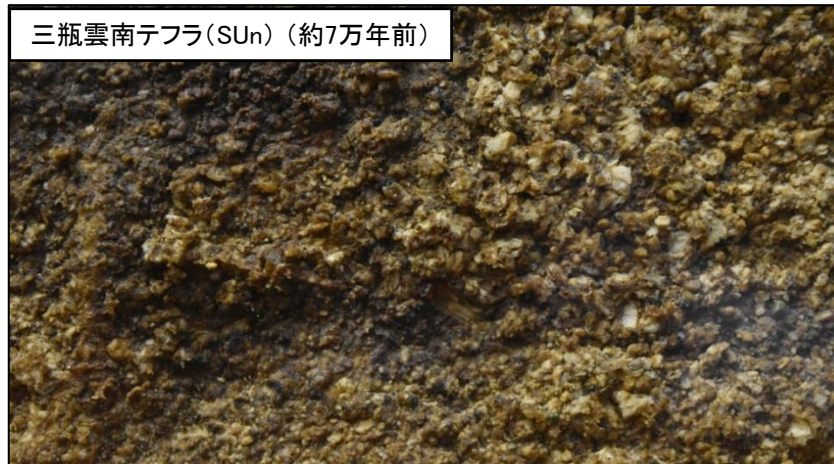
・三瓶起源のテフラには含まれないバブル型ガラスを多く含むテフラである。粘土質な古土壤に挟在する。

三瓶池田テフラ(SI) (約4万年前)



・黄灰色を呈する軽石が主体で黒雲母に富む。

三瓶雲南テフラ(SUn) (約7万年前)



・灰褐色を呈する軽石が主体で無色鉱物に富む。

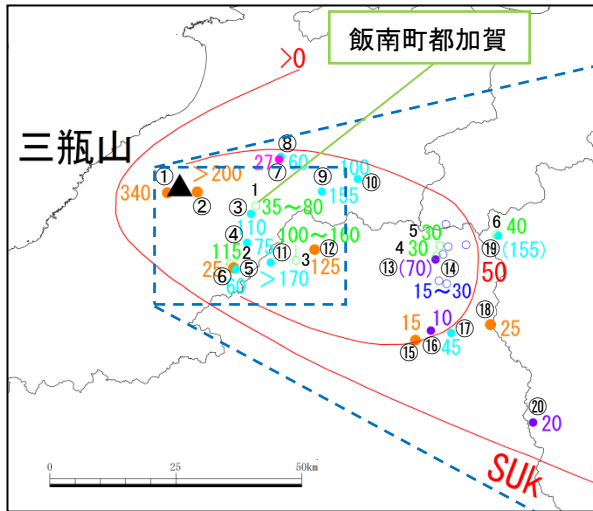
・上述した4種類のテフラの層序及び層相の特徴の他、文献の地質柱状図を参考に地質調査において三瓶浮布テフラを同定する。



# 地点1 飯南町都加賀

## 飯南町都加賀(地質調査)

・三瓶山から三瓶浮布テフラの分布主軸方向約15kmに位置する飯南町都加賀において地質調査を実施し、三瓶浮布テフラを確認した。



### 【凡例】

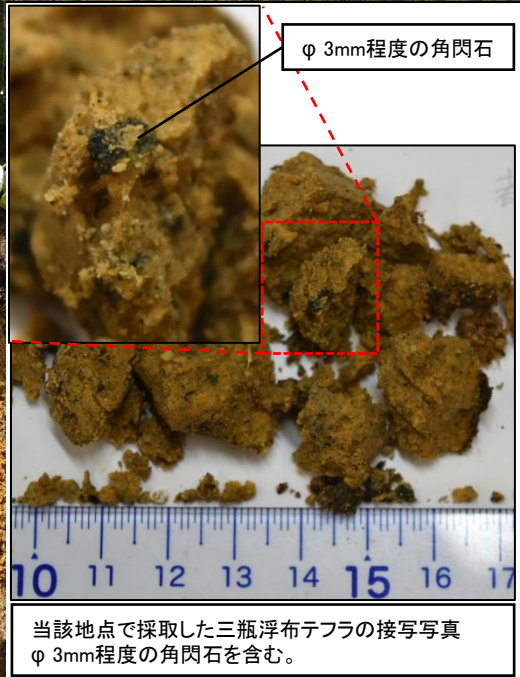
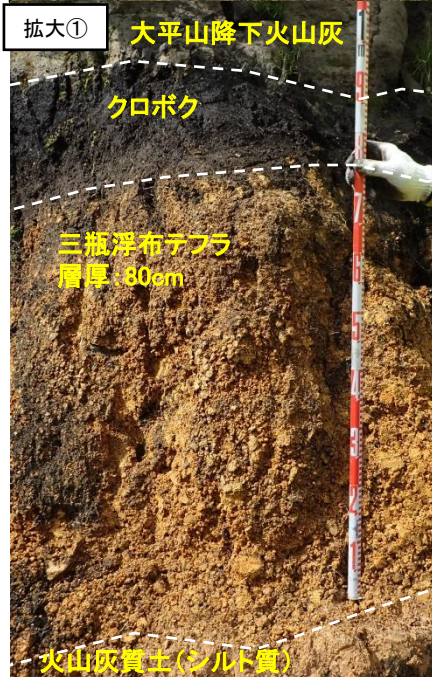
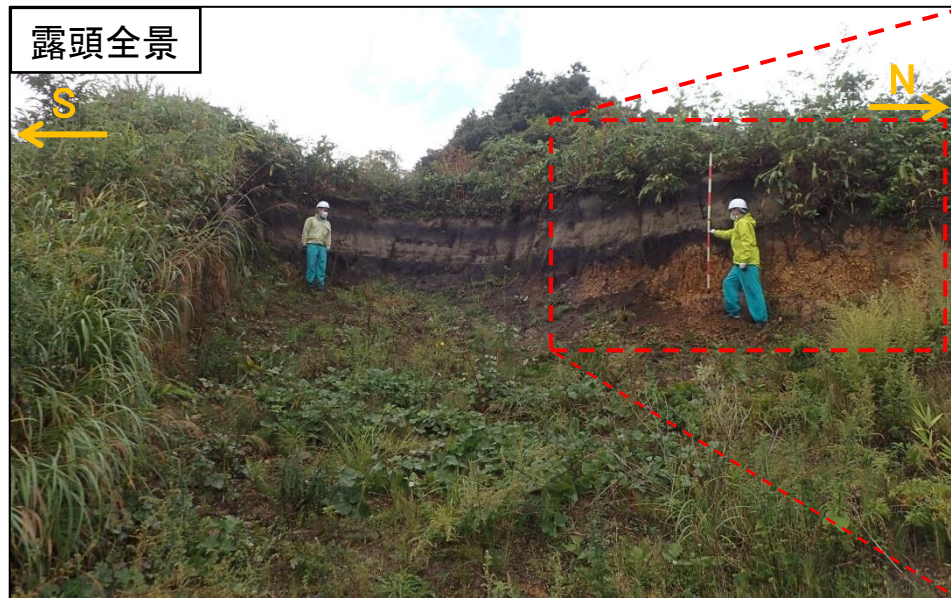
- : 町田・新井(2011)による等層厚線
- : 地質調査地点
- : 松井・井上(1971)による降灰報告地点
- : 林・三浦(1987)による降灰報告地点
- : 野村・田中(1987)による降灰報告地点
- : 野村(1991)による降灰報告地点
- : その他(町田・新井(2011), Maruyama et al.(2020)等の文献による降灰報告地点)
- ( ) : 地質調査結果により参考扱いとする降灰層厚 (数字は降灰厚さ(cm))

※福岡・松井(2002)による降灰報告地点は三瓶山周辺(三瓶山から約7kmの範囲)のため記載を省略

出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆



露頭全景



- ・上位からクロボク(2層の火山灰(火山灰質土(シルト質), 大平山降下火山灰)を挟む), 三瓶浮布テフラ(層厚35~80cm), 火山灰質土(粘土質)を確認した。
- ・最下位層の火山灰質土(粘土質)は火山ガラスを含み, 後述の地点2及び3で確認したAT混じりの火山灰質土(粘土質)と層相が類似していることからAT混じりと考えられ, その層の上位に分布する黄褐色を呈し, 角閃石を含む軽石層を三瓶浮布テフラと同定した。
- ・三瓶浮布テフラは黄褐色を呈し, φ 50mm以下の軽石を含み, φ 3mm程度の角閃石が確認される。下部ほど軽石の粒径が大きく, 級化構造を呈している。

・飯南町都加賀の三瓶浮布テフラの層厚は35~80cmとする。

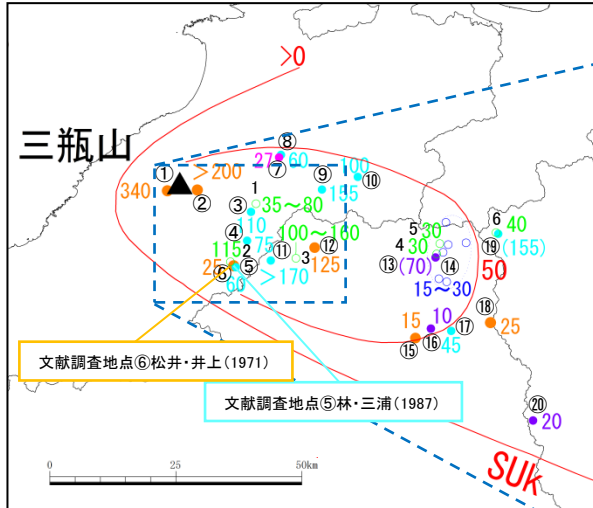
当該地点で採取した三瓶浮布テフラの接写写真  
φ 3mm程度の角閃石を含む。



## 地点2 飯南町上来島

### 飯南町上来島(地質調査)

- ・三瓶山から三瓶浮布テフラの分布主軸方向約17kmに位置する飯南町上来島周辺において、林・三浦(1987)及び松井・井上(1971)は文献調査地点⑤及び⑥で三瓶浮布テフラの降灰を報告している。※
- ・当該地域において地質調査を実施し、右下図の○で示した地点において三瓶浮布テフラを確認した。



#### 【凡例】

- : 町田・新井(2011)による等層厚線
  - : 地質調査地点
  - : 松井・井上(1971)による降灰報告地点
  - : 林・三浦(1987)による降灰報告地点
  - : 野村・田中(1987)による降灰報告地点
  - : 野村(1991)による降灰報告地点
  - : その他(町田・新井(2011), Maruyama et al.(2020)等の文献による降灰報告地点)
  - ( ) : 地質調査結果により参考扱いとする降灰層厚 (数字は降灰厚さ(cm))
- ※福岡・松井(2002)による降灰報告地点は三瓶山周辺(三瓶山から約7kmの範囲)のため記載を省略



出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

※当該地域周辺で松井・井上(1971)及び林・三浦(1987)が報告している露頭の具体的な地点は不明のため、地図上には明記していない。

# 地点2 飯南町上来島

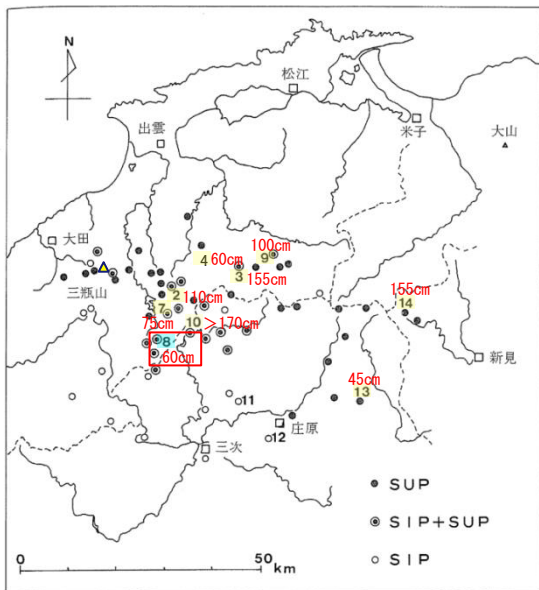


図22 三瓶池田降下軽石 (SIP) と三瓶浮布降下軽石 (SUP) の分布  
図中の数字は図の柱状図の位置

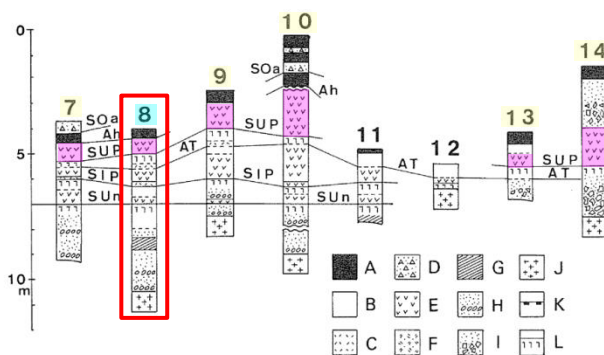


図1 三瓶起源のテフラを中心とする柱状図

地点 1:佐田町下橋波横見 6:横田町稲原横田中学校 11:広島県口和町永田市場  
2:横原町花栗崎トンネル 7:横原町佐見井福原 12:広島県庄原市栗留  
3:仁多町上阿井福原 8:赤来町上来島安江 13:広島県東城町宇山  
4:掛合町奥明 9:仁多町高尾 14:岡山県神郷町三室  
5:仁多町三成 10:広島県高野町高尊指谷

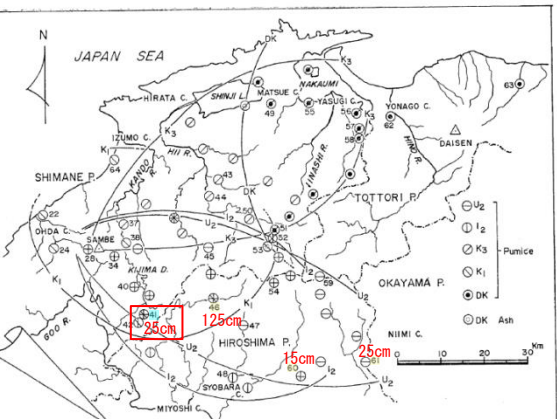
凡例 A:黒ボク土 D:降下ラビリ G:シルト・粘土 J:差盤岩  
B:火山灰質土 E:降下軽石 H:砂礫 K:鉄・マンガング盤  
C:降下火山灰 F:火砕流 I:角礫 L:クラック帯

テフラ名 SOa:三瓶浮布降下火山灰 AT:アカホヤ火山灰  
SUP:三瓶浮布降下軽石 SUn:三瓶雲南降下軽石  
SIP:三瓶池田降下軽石 AT:給良Tn火山灰  
SOF:三瓶大田軽石流 SKP:三瓶木次降下軽石  
SKF:三瓶船瀬火砕流 Aso4:阿蘇4火山灰  
DMP:大山松江軽石

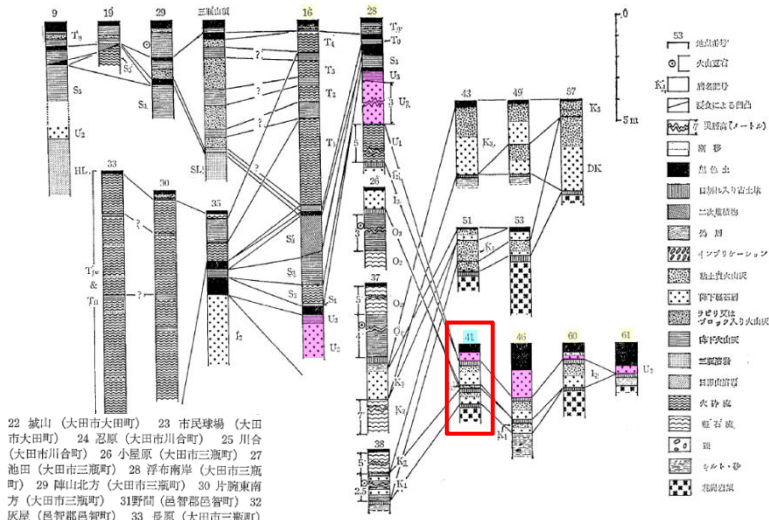
林・三浦(1987)より引用・加筆

・林・三浦(1987)に示される地質柱状図(8)の読取り値によると、飯南町上来島(旧赤来町)では60cmである。

※地質柱状図(8)の地点が文献調査地点⑤に対応する。



第3図 22 隼山 (大田市大田町) 24 忍原 (大田市川合町) 28 浮布南岸 (大田市三瓶町) 34 東上山 (大田市三瓶町) 37 横見 (熊川郡佐田町) 38 同 (飯石郡原原町) 40 光峠 (飯石郡赤来町) 41 安江 (飯石郡赤来町) 42 赤名 (飯石郡赤来町) 43 寺領 (大原郡木次町) 44 引野 (大原郡木次町) 45 字月峠 (仁多郡仁多町) 46 新市 (比婆郡高野町) 47 比和 (比婆郡比和町) 48 湖川 (庄原市) 49 古志原 (松江市) 50 三成 (仁多郡仁多町) 51 川西 (仁多郡旗田町) 52 土橋 (仁多郡旗田町) 53 杭木 (仁多郡旗田町) 54 池の原 (島根・広島県境菅原山) 55 平賀 (八東郡東出雲町) 56 高田 (安来市島田町) 57 大船倉 (熊籠郡佐太町) 58 倉崎 (熊籠郡佐太町) 59 多里峠 (日野郡日南町) 60 中山峠 (比婆郡東城町) 61 二本松 (比婆郡東城町) 62 西塚 (米子市) 63 法万 (倉吉市大栄町) 64 板津 (熊川郡湖陵町)



第6図 三瓶火山噴出物の柱状図

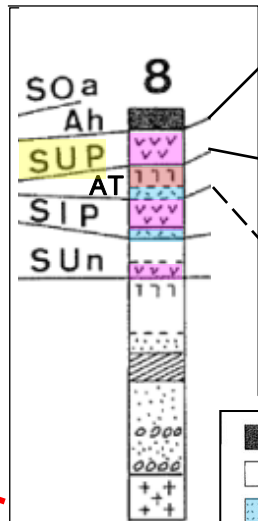
松井・井上(1971)より引用・加筆

・松井・井上(1971)に示される地質柱状図(41)の読取り値によると、飯南町上来島(旧赤来町)では25cmである。

※地質柱状図(41)の地点が文献調査地点⑥に対応する。



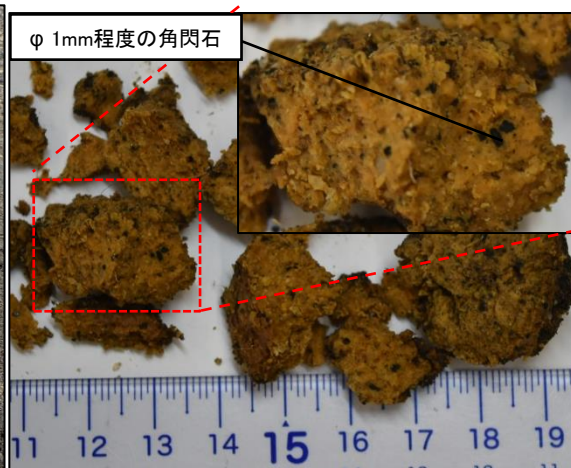
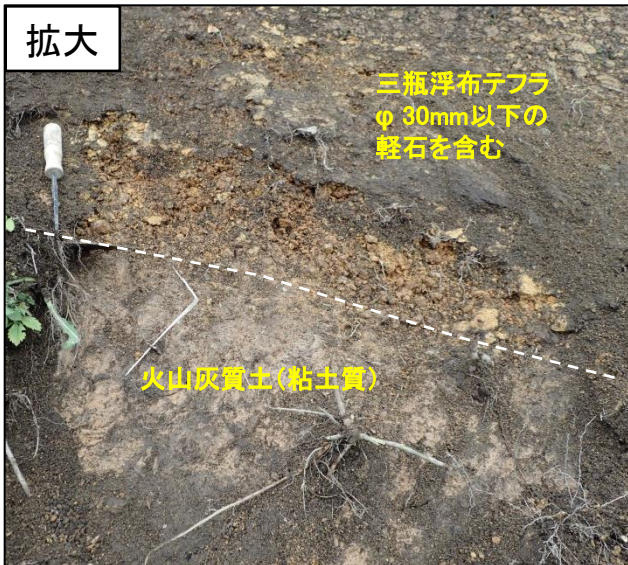
露頭全景



林・三浦(1987)より引用・加筆

凡例	A: 黒ボク土	D: 降下ラビリ	G: シルト・粘土	J: 基盤岩
	B: 火山灰質土	E: 降下軽石	H: 砂礫	K: 鉄・マンガン盤
	C: 降下火山灰	F: 火砕流	I: 角礫	L: クラック帯
テフラ名	SOa: 三瓶太平山降下火山灰	AT: アカホヤ火山灰	SUn: 三瓶雲南降下軽石	
	SUP: 三瓶浮布降下軽石	SKP: 三瓶木次降下軽石		
	SIP: 三瓶池田降下軽石	Aso 4: 阿蘇4火山灰		
	SOf: 三瓶大田軽石流	DMP: 大山松江軽石		
	SKf: 三瓶粕瀨火砕流			

拡大



当該地点で採取した三瓶浮布テフラの接写写真  
φ 1mm程度の角閃石を含む。

- ・上位からクロボク, 三瓶浮布テフラ (層厚115cm), 火山灰質土(粘土質)を確認した。
- ・最下位層の火山灰質土(粘土質)は火山ガラスを含み, 林・三浦(1987)の地質柱状図を踏まえるとAT混じりと考えられ, その層の上位に分布する黄褐色を呈し, 角閃石を含む軽石層を三瓶浮布テフラと同定した。
- ・三瓶浮布テフラは黄褐色を呈し, φ 30mm以下の軽石を含み, φ 1mm程度の角閃石が確認される。

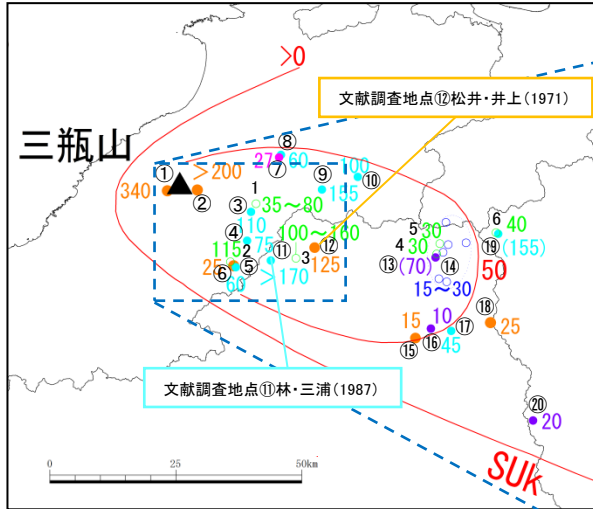
・飯南町上来島の三瓶浮布テフラの層厚は115cmとする。



# 地点3 広島県北部(庄原市高野町)

## 広島県北部(庄原市高野町)(地質調査)

・三瓶山から三瓶浮布テフラの分布主軸方向約26kmに位置する庄原市高野町周辺において、林・三浦(1987)及び松井・井上(1971)は文献調査地点⑪及び⑫で三瓶浮布テフラの降灰を報告している。※  
・当該地域において地質調査を実施し、右下図の○で示した地点において三瓶浮布テフラを確認した。



### 【凡例】

- : 町田・新井(2011)による等層厚線
  - : 地質調査地点
  - : 松井・井上(1971)による降灰報告地点
  - : 林・三浦(1987)による降灰報告地点
  - : 野村・田中(1987)による降灰報告地点
  - : 野村(1991)による降灰報告地点
  - : その他(町田・新井(2011), Maruyama et al.(2020)等の文献による降灰報告地点)
  - ( ) : 地質調査結果により参考扱いとする降灰層厚 (数字は降灰厚さ(cm))
- ※福岡・松井(2002)による降灰報告地点は三瓶山周辺(三瓶山から約7kmの範囲)のため記載を省略

出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

※当該地域周辺で松井・井上(1971)及び林・三浦(1987)が報告している露頭の具体的な地点は不明のため、地図上には明記していない。



# 地点3 広島県北部(庄原市高野町)

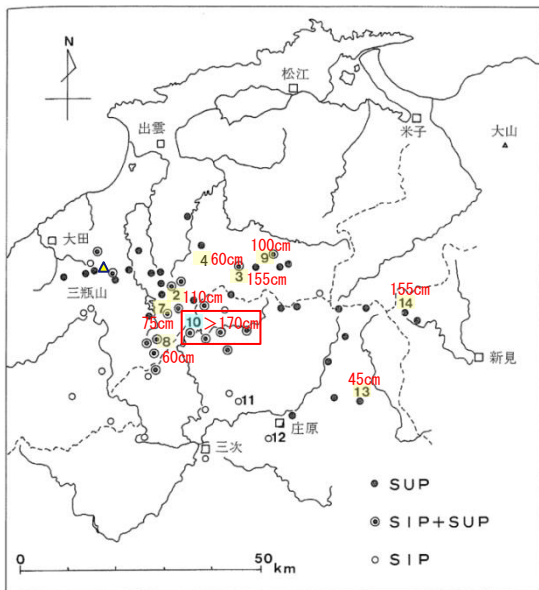


図22 三瓶池田降下軽石 (SIP) と三瓶浮布降下軽石 (SUP) の分布  
図中の数字は図の柱状図の位置

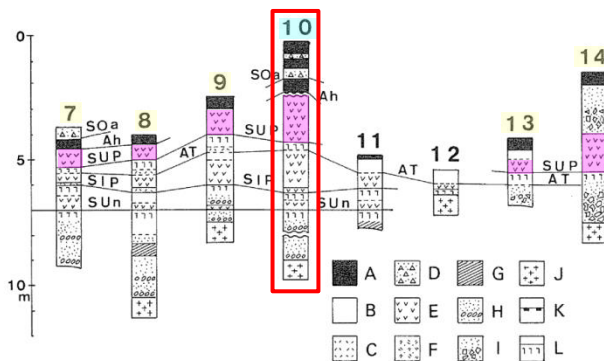


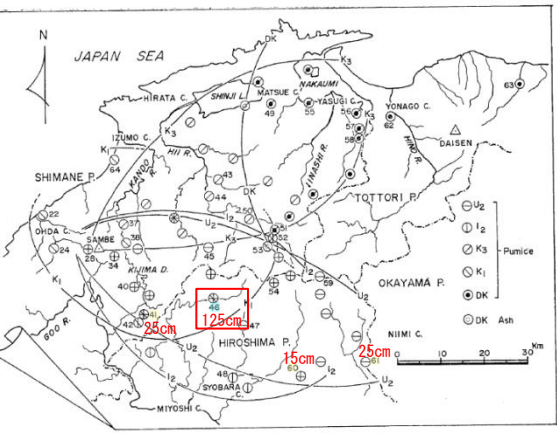
図1 三瓶起源のテフラを中心とする柱状図

- 地点 1:佐田町下橋波横見 6:横田町稲原横田中学校 11:広島県口和町永田市場  
2:頼原町花栗崎トンネル 7:頼原町佐見井福原 12:広島県庄原市妻留  
3:仁多町上阿井福原 8:赤葉町上来高安江 13:広島県東郷町宇山  
4:掛合町奥明 9:仁多町高尾 14:岡山県神脚町三室  
5:仁多町三成 10:広島県高野町高野指谷
- 凡例 A:黒ボク土 D:降下ラビリ G:シルト・粘土 J:差盤岩  
B:火山灰質土 E:降下軽石 H:砂礫 K:鉄・マンガン盤  
C:燼下火山灰 F:火砕流 I:角礫 L:クラック帯
- テフラ名 SOa:三瓶浮布降下火山灰 AO:アカホヤ火山灰  
SUP:三瓶池田降下軽石 AT:給良Tn火山灰  
SIP:三瓶池田降下軽石 SUn:三瓶雲南降下軽石  
SOF:三瓶大田降下軽石 SKP:三瓶木次降下軽石  
SKF:三瓶船瀬火砕流 Aso4:阿蘇4火山灰  
DMP:大山松江軽石

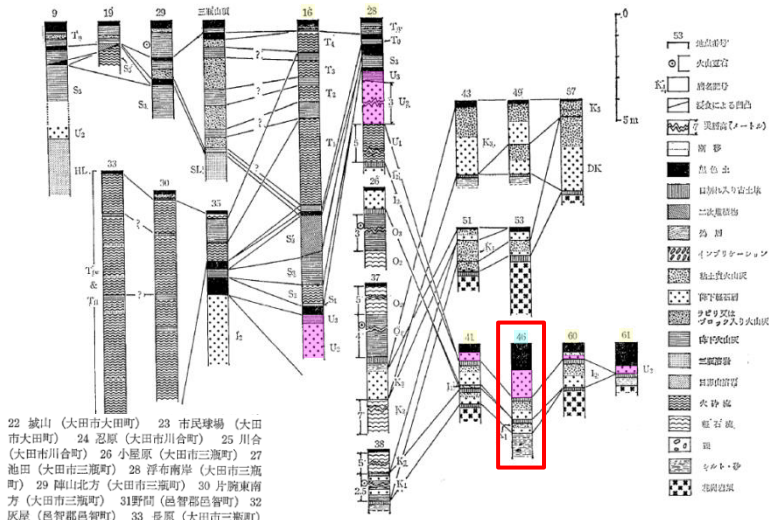
林・三浦(1987)より引用・加筆

・林・三浦(1987)に示される地質柱状図(10)の読取り値によると、庄原市高野町では>170cmである。

※地質柱状図(10)の地点が文献調査地点⑩に対応する。



第3図 22 隼山 (大田市大田町) 24 忍原 (大田市川合町) 28 浮布南岸 (大田市三瓶町) 34 東上山 (大田市三瓶町) 37 横見 (瀬川郡佐田町) 38 同 (坂石郡頼原町) 40 光峠 (坂石郡赤来町) 41 安江 (坂石郡赤来町) 42 赤名 (坂石郡赤来町) 43 寺領 (大原郡木次町) 44 引野 (大原郡木次町) 45 字月峠 (仁多郡仁多町) 46 新市 (比婆郡高野町) 47 比和 (比婆郡比和町) 48 濁川 (庄原市) 49 古志原 (松江市) 50 三成 (仁多郡仁多町) 51 川西 (仁多郡旗田町) 52 土橋 (仁多郡旗田町) 53 杭木 (仁多郡旗田町) 54 池の原 (島根・広島県境菅原山) 55 平賀 (八東郡東出雲町) 56 高田 (安来市高田町) 57 大船谷 (船養郡佐太町) 58 龜崎 (船養郡佐太町) 59 多里峠 (日野郡日南町) 60 中山峠 (比婆郡東城町) 61 二本松 (比婆郡東城町) 62 西塚 (米子市) 63 法万 (倉吉市大栗町) 64 板津 (瀬川郡瀬原町)



22 隼山 (大田市大田町) 23 市民球場 (大田市大田町) 24 忍原 (大田市川合町) 25 川合 (大田市川合町) 26 小屋原 (大田市三瓶町) 27 池田 (大田市三瓶町) 28 浮布南岸 (大田市三瓶町) 29 陣山北方 (大田市三瓶町) 30 片瀬東南方 (大田市三瓶町) 31野間 (邑智郡邑智町) 32 灰屋 (邑智郡邑智町) 33 原 (大田市三瓶町) 34 東上山 (大田市三瓶町) 35 角井西南方 (大田市三瓶町) 36 立石 (大田市三瓶町) 37 飯見 (瀬川郡佐田町) 38 同 (坂石郡頼原町) 39 板根 (邑智郡邑智町)

松井・井上(1971)より引用・加筆

・松井・井上(1971)に示される地質柱状図(46)の読取り値によると、庄原市高野町では125cmである。

※地質柱状図(46)の地点が文献調査地点⑫に対応する。

松井・井上(1971)より引用・加筆

## (参考)庄原市高野町(鷹村(1985))

・鷹村(1985)<sup>(72)</sup>は、庄原市高野町の地質図及び露頭図を作成し、三瓶火山灰層の分布を報告している。



図 28-6 新市付近地質図

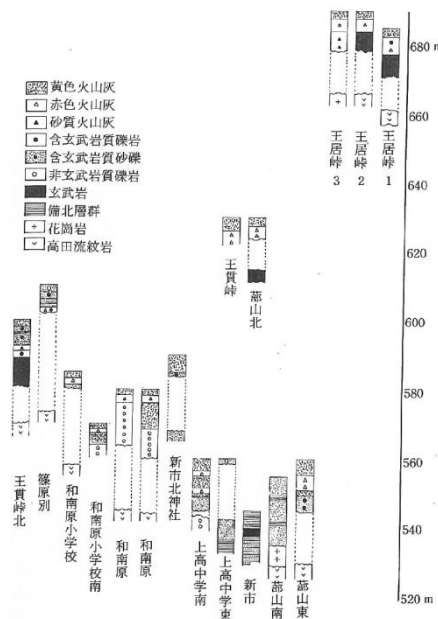


図 28-9 新市周縁地質往状図

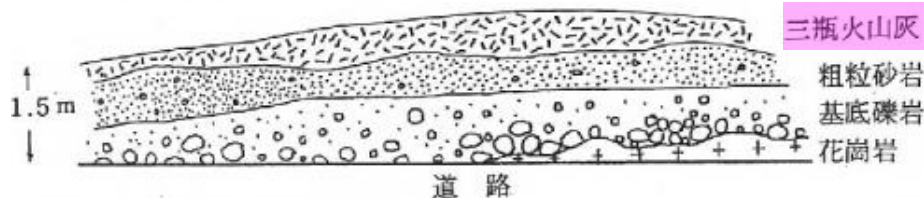
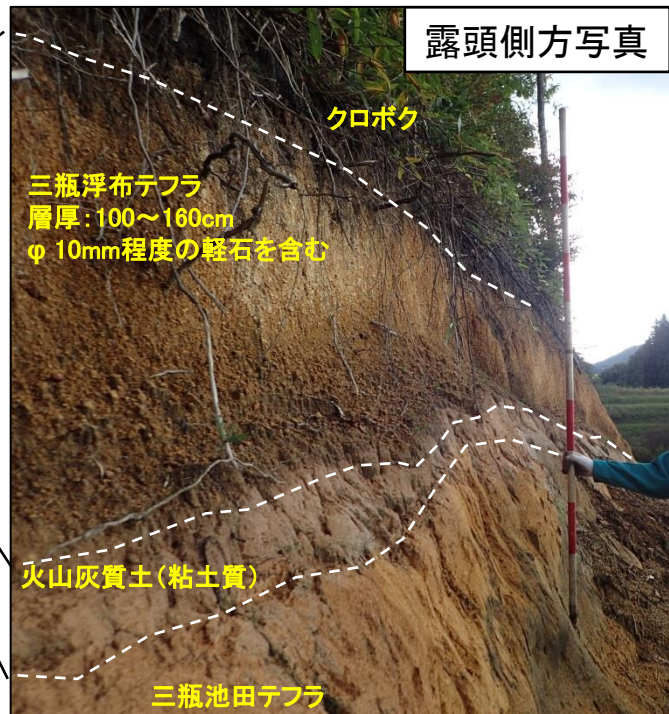
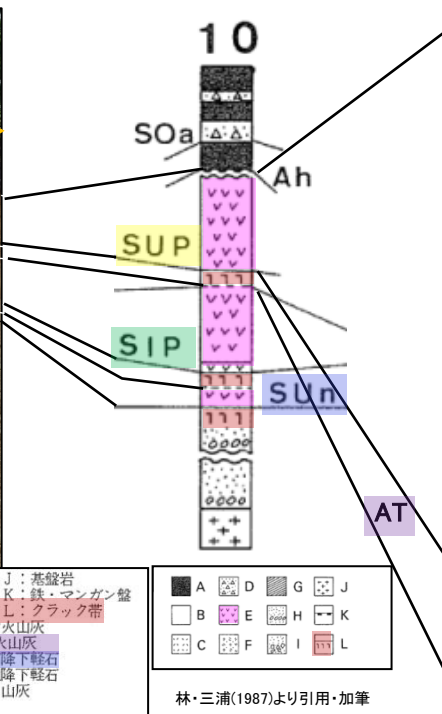
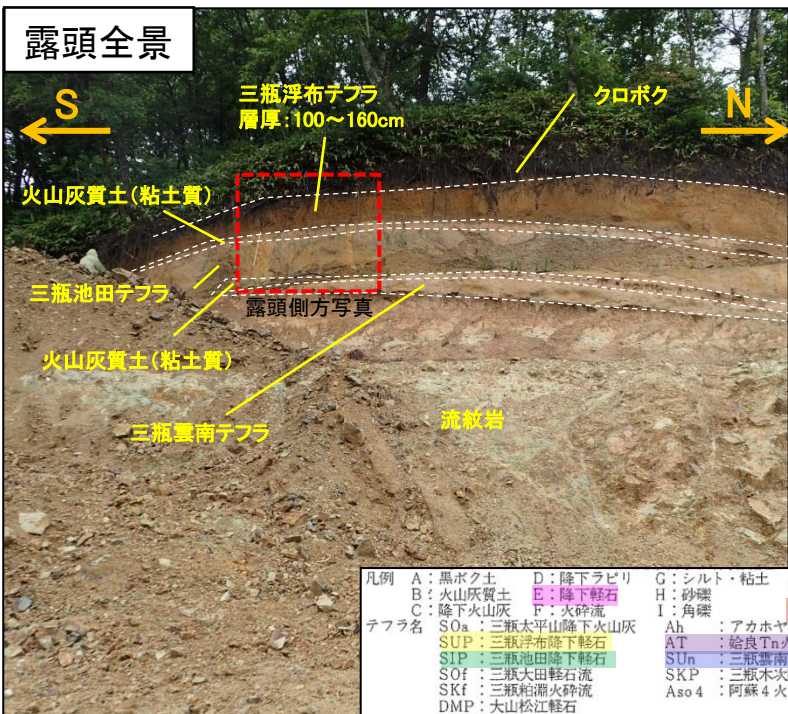


図 28-8 下門田の基底礫岩

鷹村(1985)より引用・加筆

・鷹村(1985)に示される庄原市高野町下門田の露頭図によると、最上位に三瓶火山灰が分布するとされている。

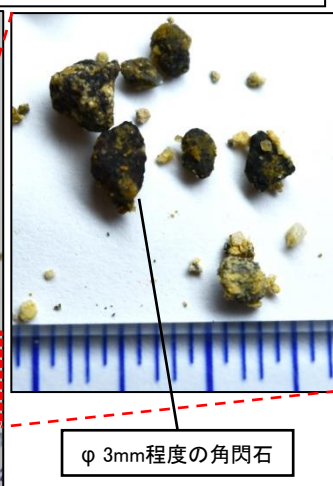




凡例	A: 黒ボク土	D: 降下ラピリ	G: シルト・粘土	J: 基盤岩
	B: 火山灰質土	E: 降下軽石	H: 砂礫	K: 鉄・マンガングレ
	C: 降下火山灰	F: 火砕流	I: 角礫	L: クラック帯
テフラ名	SOa: 三瓶太山降下火山灰	Ah: アカホヤ火山灰	AT: 給良Tn火山灰	
	SUP: 三瓶浮布降下軽石	SUn: 三瓶雲南降下軽石	SKP: 三瓶木次降下軽石	
	SIP: 三瓶池田降下軽石	SKF: 三瓶船浦火砕流	Aso4: 阿蘇4火山灰	
	DMP: 大山松江軽石			

■ A	■ D	■ G	■ J
■ B	■ E	■ H	■ K
■ C	■ F	■ I	■ L

林・三浦(1987)より引用・加筆



当該地点で採取した三瓶浮布テフラの接写写真  
φ 3mm以下の角閃石を含む。

- ・上位からクロボク, 三瓶浮布テフラ(層厚100~160cm), 火山灰質土(粘土質), 三瓶池田テフラ, 火山灰質土(粘土質), 三瓶雲南テフラ, 火山灰質土(粘土質), 流紋岩を確認した。
- ・当該地点では3層の軽石層が確認され, 林・三浦(1987)の地質柱状図を踏まえると最上位の黄褐色を呈し, 角閃石を含む軽石層を三瓶浮布テフラと同定した。なお, 三瓶浮布テフラの下位の火山灰質土(粘土質)は火山ガラスを含むことからATが含まれると考えられる。
- ・三瓶浮布テフラは黄褐色を呈し, φ 10mm程度の軽石を含み, φ 3mm程度の角閃石が確認される。

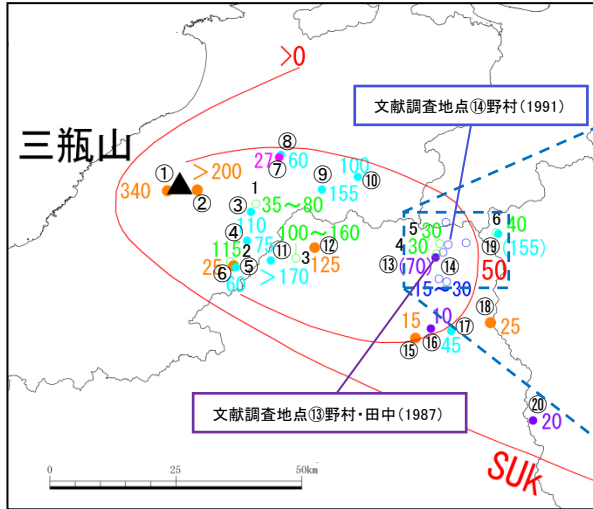
・広島県北部(庄原市高野町)の三瓶浮布テフラの層厚は100~160cmとする。



# 地点4・5 広島県北東部(道後山周辺)

## 広島県北東部(道後山周辺)(地質調査)

- ・三瓶山から三瓶浮布テフラの分布主軸方向約55kmに位置する道後山周辺において、野村・田中(1987)及び野村(1991)は文献調査地点⑬及び⑭で三瓶浮布テフラの降灰を報告している。※
- ・野村・田中(1987)に示される広島県北東部(道後山周辺)の露頭(層厚70cm)の具体的な露頭地点が不明なため、当該地域において地表地質踏査(右下図に主な地表地質踏査ルート(赤線)を示す)を実施した。
- ・地表地質踏査の結果、○で示した2地点(三瓶山からの距離約52~53km)において三瓶浮布テフラを確認した。



### 【凡例】

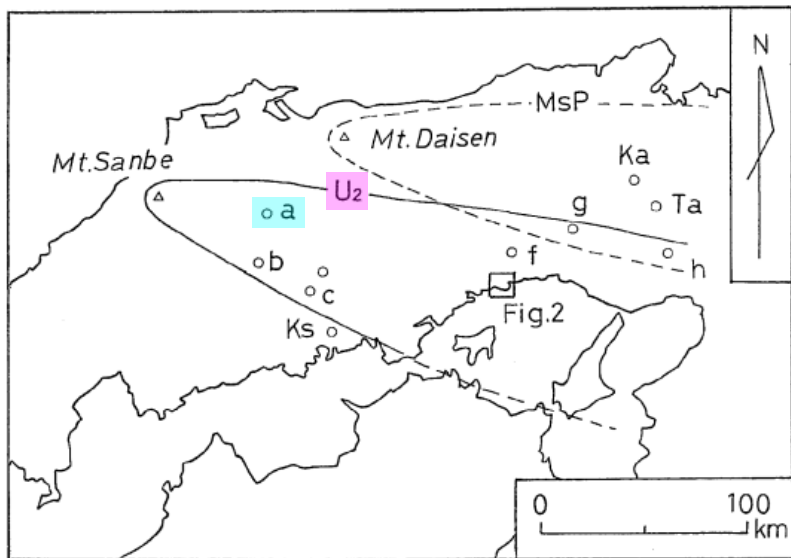
- : 町田・新井(2011)による等層厚線
  - : 地質調査地点
  - : 松井・井上(1971)による降灰報告地点
  - : 林・三浦(1987)による降灰報告地点
  - : 野村・田中(1987)による降灰報告地点
  - : 野村(1991)による降灰報告地点
  - : その他(町田・新井(2011), Maruyama et al.(2020)等の文献による降灰報告地点)
  - ( ): 地質調査結果により参考扱いとする降灰層厚 (数字は降灰厚さ(cm))
- ※福岡・松井(2002)による降灰報告地点は三瓶山周辺(三瓶山から約7kmの範囲)のため記載を省略

出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

※当該地域周辺で野村・田中(1987)(道後山周辺)及び野村(1991)(道後山周辺(三坂北, 猫山, 鷹の巣山, 白滝山))が報告している露頭の具体的な地点は不明のため、地図上には明記していない。

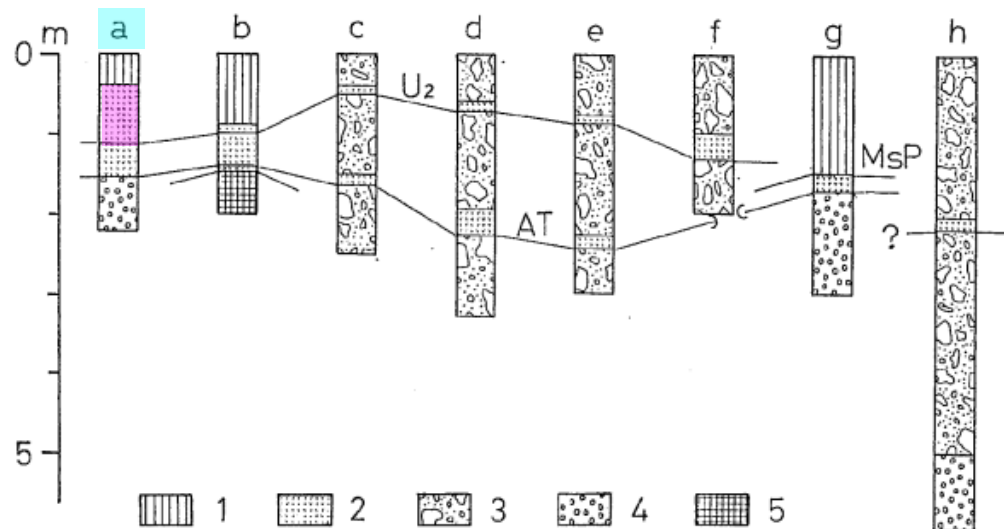


# 地点4・5 広島県北東部(道後山周辺)



第1図 調査地点および火山灰の分布範囲

MsP: 弥山軽石      U<sub>2</sub>: 浮布軽石  
 a: 広島県西城町三坂      b: 広島県東城町帝釈      c: 岡山県芳井町三原  
 f: 兵庫県上郡町国光      g: 兵庫県市川町田中      h: 神戸市道場町飛瀬  
 Ka: 兵庫県春日町朝日      Ks: 笠岡市      Ta: 兵庫県丹南町大山  
 a~hは露頭位置を示す。d, eの位置は第2図に示す。



第4図 柱状図

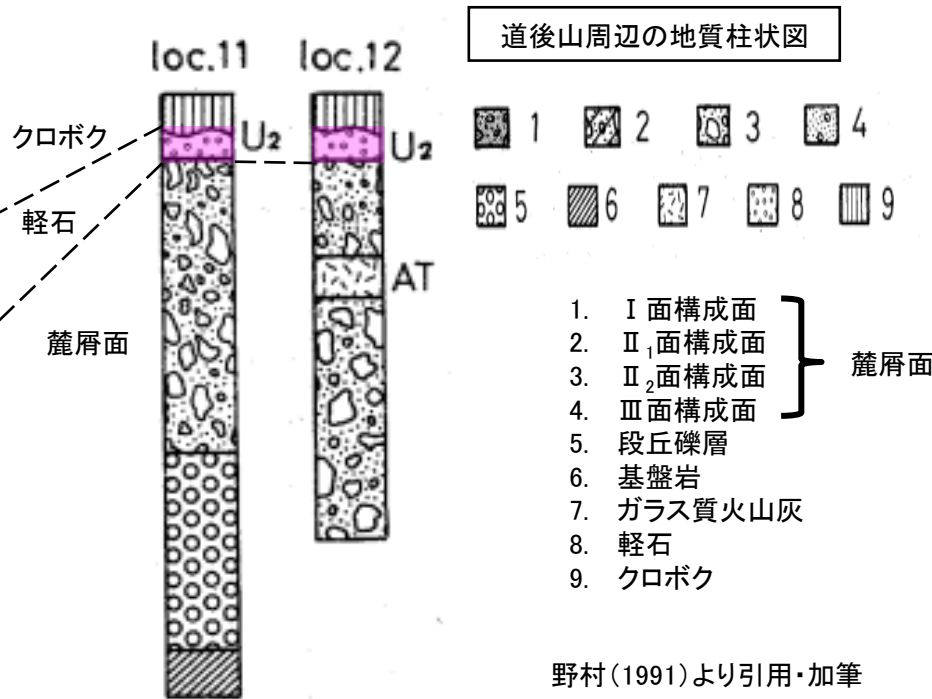
1: プーム層    2: 火山灰・軽石    3: 麓屑面構成層    4: 段丘礫    5: 基盤岩  
 U<sub>2</sub>: 浮布軽石    MsP: 弥山軽石    AT: 始良Tn火山灰

野村・田中(1987)より引用・加筆

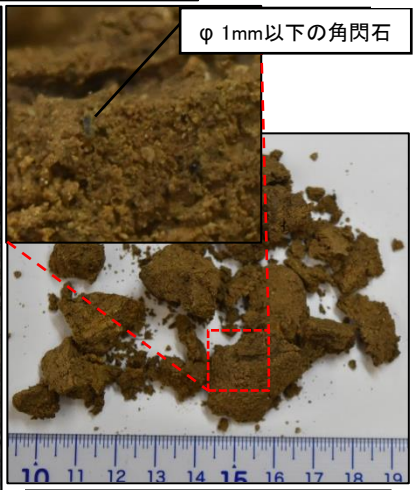
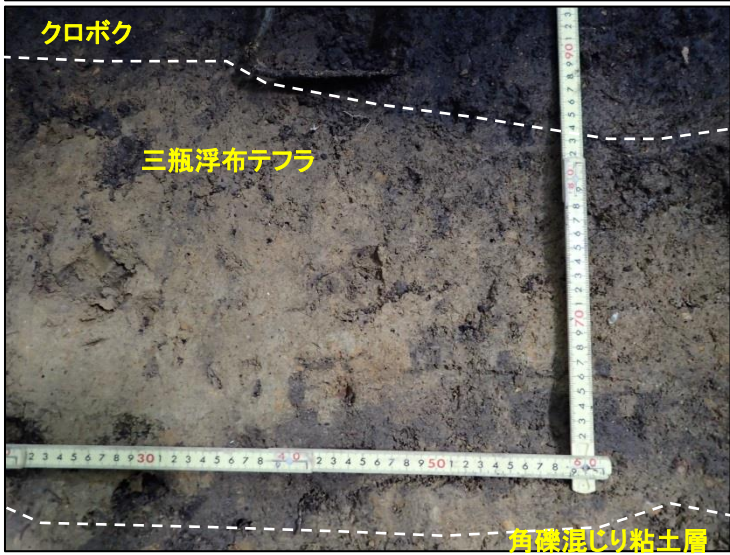
- 野村・田中(1987)は、広島県西城町道後山山麓(地点a)において、地表付近に黄赤色の粗粒のパミス、その下位に風化の進んだガラス質火山灰があるとし、上位はU<sub>2</sub>、下位のガラス質火山灰はATであると報告している。
- 野村・田中(1987)は、上位層(U<sub>2</sub>)の層厚は70cmと報告している。また、本層の上位にクロボク化した部分が40~50cmあると報告している。
- 新しい文献(野村(1991))は、広島県北東部の道後山周辺の緩斜面な山頂付近の凹地に見られる巨岩塊で構成された地形や山麓に形成された麓屑面の地質柱状図を作成しており、調査域のほとんどで三瓶浮布軽石(U<sub>2</sub>)が認められることを報告している。野村(1991)に示される地質柱状図の読み取り値によると、U<sub>2</sub>の層厚は、15~30cm程度である。

※野村・田中(1987)が報告している地質柱状図(a)の地点が文献調査地点⑬に対応する。

※野村(1991)が報告している道後山周辺の各地質柱状図で報告される三瓶浮布火山灰層厚は15~30cmのため(補足資料P65参照)、道後山周辺(層厚15~30cm)として一括整理し、文献調査地点⑭に対応する。



野村(1991)より引用・加筆



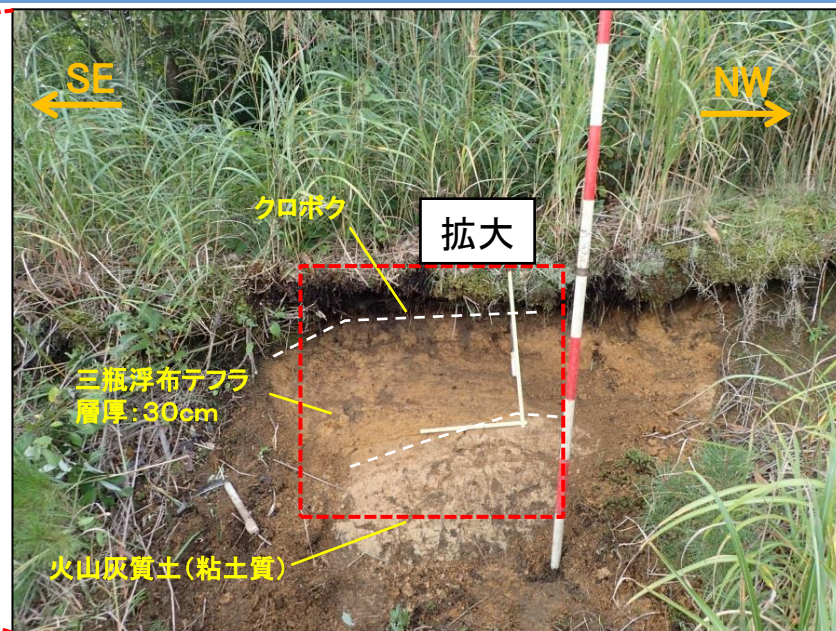
当該地点で採取した三瓶浮布テフラの接写写真  
φ 1mm以下の角閃石を含む。

- ・上位からクロボク, 三瓶浮布テフラ(層厚30cm), 角礫混じり粘土層(φ 5~20cmの角礫)を確認した。
- ・最下位層の角礫混じり粘土層は野村(1991)の地質柱状図を踏まえると麓層面に相当する層と考えられ, 層序が類似することから黄褐色の軽石層を三瓶浮布テフラと同定した。
- ・三瓶浮布テフラは黄褐色を呈し, 極細粒~シルト質である。φ 1mm以下の軽石を含み, φ 1mmの角閃石が確認される。

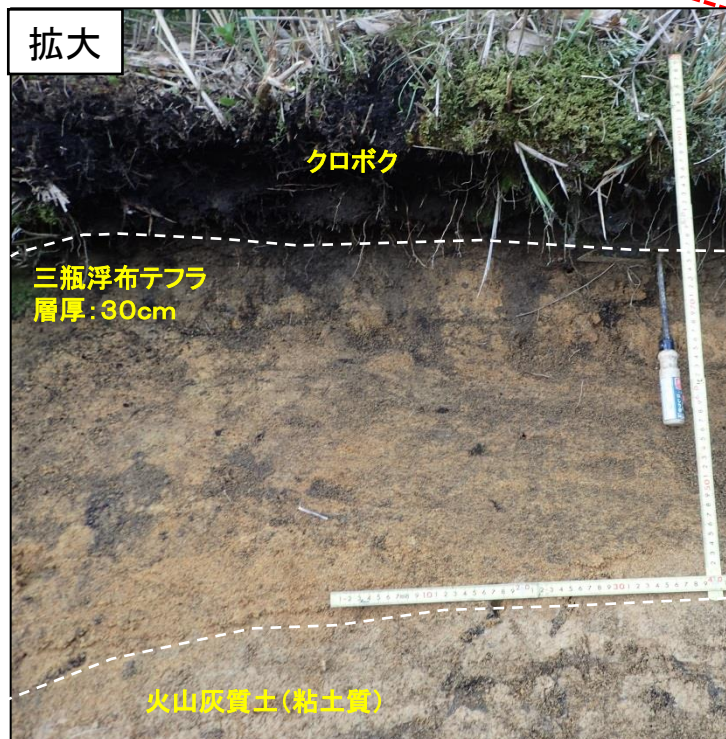
- ・広島県北東部(道後山周辺①)の三瓶浮布テフラの層厚は30cmとする。



露頭全景



拡大



φ 1mm以下の角閃石



当該地点で採取した三瓶浮布テフラの接写写真  
φ 1mm以下の角閃石を含む。

- ・上位からクロボク、三瓶浮布テフラ (層厚30cm)、火山灰質土(粘土質)を確認した。
- ・最下位層の火山灰質土(粘土質)は地点1～3の三瓶浮布テフラの下位層の火山灰質土(粘土質)と層相が類似し、火山ガラスを含むことからAT混じりと考えられ、その層の上位に分布する黄褐色を呈し、角閃石を含む軽石層を三瓶浮布テフラと同定した。
- ・三瓶浮布テフラは黄褐色を呈し、粗粒サイズでφ 1mm程度の軽石を含み、φ 1mm以下の角閃石が確認される。

・広島県北東部(道後山周辺②)の三瓶浮布テフラの層厚は30cmとする。



## 地点4, 5 広島県北東部(道後山周辺)調査結果

- ・野村・田中(1987)に示される広島県北東部(道後山周辺)の詳細な露頭地点(文献調査地点⑬三瓶浮布テフラ層厚:70cm)が不明なため、当該地域において地表地質踏査を実施した。
- ・地質調査の結果、道後山周辺①及び②において、三瓶浮布テフラを確認し、同テフラの層厚が30cmであることを確認した。
- ・新しい文献(野村(1991))では、道後山周辺(文献調査地点⑭(三坂北, 鳶の巣山, 猫山, 白滝山))の地質柱状図の読取り値で三瓶浮布テフラの層厚は15~30cm(再堆積を除く)と報告されており、地質調査で確認した三瓶浮布テフラの層厚と調和的である。
- ・上記を踏まえ、野村(1987)で報告されている三瓶浮布テフラの層厚70cmについては、給源からの距離に対し、周辺の降灰厚さと比較し突出して大きく、当該地点の代表性を示す層厚とは考え難いことから参考扱いとし、当該地域における三瓶浮布テフラの降灰層厚は、地質調査によって確認した層厚30cmを採用して評価する。



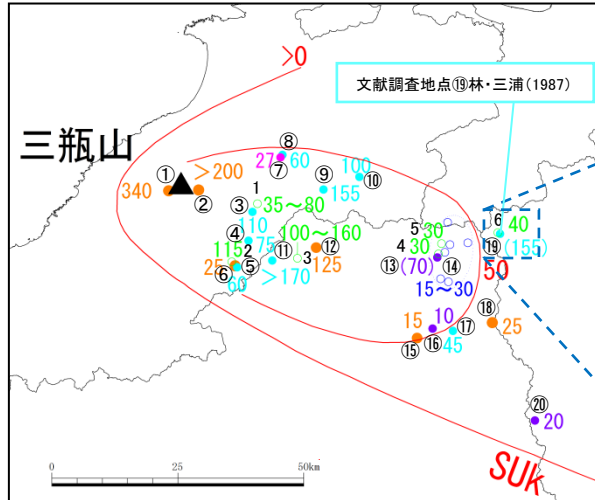
- ・広島県北東部(道後山周辺)の三瓶浮布テフラの層厚は30cmとする。



# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷)

## 岡山県北西部(新見市神郷)(地質調査)

- ・三瓶山から三瓶浮布テフラの分布主軸方向約63kmに位置する新見市神郷において、林・三浦(1987)は文献調査地点⑬で三瓶浮布テフラの降灰(155cm)を報告している。※
- ・町田・新井(2011)は、左下図に示される三瓶浮布テフラの等層厚線図を作成するにあたり、林・三浦(1987)を引用しているが、当該地域は町田・新井(2011)の等層厚線図の50cm以下の範囲に位置する。
- ・服部(1978)の5万分の1図幅「上石見地域の地質」によると、新見市神郷において第四紀火山灰層が2地点で認められるとされている。
- ・林・三浦(1987)に示される新見市神郷の露頭の具体的な地点が不明であること、及び服部(1978)によると新見市神郷において第四紀火山灰層が2地点で認められるとされていることを踏まえ、当該地域において地表地質踏査(右下図に主な地表地質踏査ルート(赤線)を示す)を実施した結果、○で示した地点(三瓶山からの距離約63km)において三瓶浮布テフラを確認した。



### 【凡例】

- : 町田・新井(2011)による等層厚線
  - : 地質調査地点
  - : 松井・井上(1971)による降灰報告地点
  - : 林・三浦(1987)による降灰報告地点
  - : 野村・田中(1987)による降灰報告地点
  - : 野村(1991)による降灰報告地点
  - : その他(町田・新井(2011), Maruyama et al.(2020)等の文献による降灰報告地点)
  - ( ) : 地質調査結果により参考扱いとする降灰層厚 (数字は降灰厚さ(cm))
- ※福岡・松井(2002)による降灰報告地点は三瓶山周辺(三瓶山から約7kmの範囲)のため記載を省略



出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆  
※当該地域周辺で林・三浦(1987)が報告している露頭の具体的な地点は不明のため、地図上には明記していない。

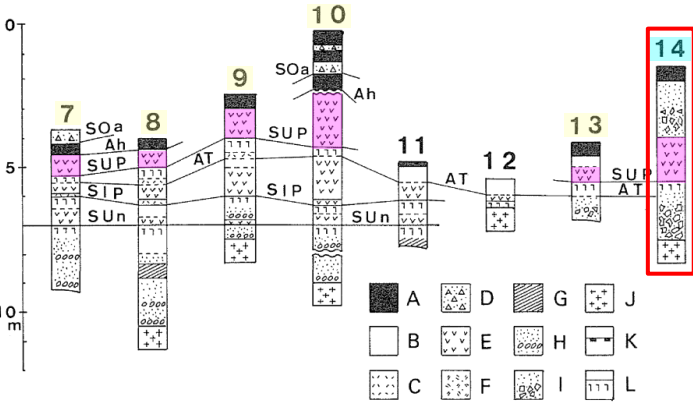
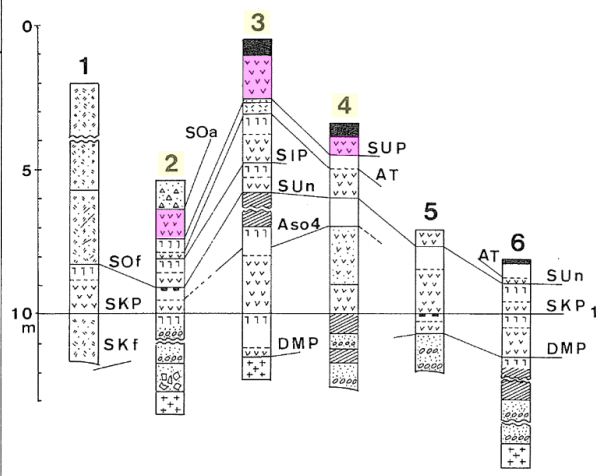
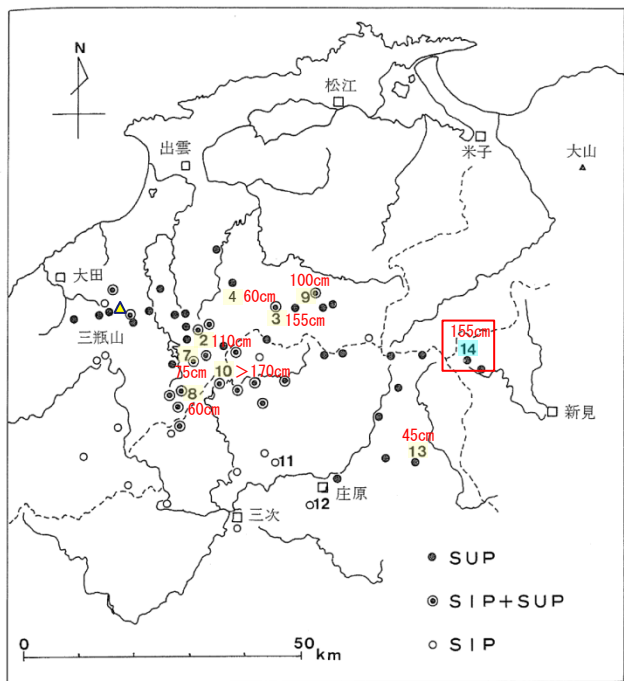


図1 三瓶起源のテフラを中心とする柱状図

地点 1: 佐田町下橋波横見 6: 横田町稲原横田中学校 11: 広島県口和町永田市場  
2: 頼原町花栗晴雲トンネル 7: 頼原町佐見井羅谷 12: 広島県庄原市実留  
3: 仁多町上阿井福原 8: 赤来町上來島安江 13: 広島県東城町宇山  
4: 掛合町奥明 9: 仁多町高尾 14: 岡山県神郷町三室  
5: 仁多町三成 10: 広島県高野町高暮指谷

凡例 A: 黒ボク土 D: 降下ラビリ G: シルト・粘土 J: 基礎岩  
B: 火山灰質土 E: 降下軽石 H: 砂礫 K: 鉄・マンガン盤  
C: 降下火山灰 F: 火砕流 I: 角礫 L: クラック帯

テフラ名 SOa: 三瓶太天山降下火山灰 Ah: アカホヤ火山灰  
SUP: 三瓶浮布降下軽石 AT: 始良Tn火山灰  
SIP: 三瓶池田降下軽石 SUn: 三瓶雲南降下軽石  
Sof: 三瓶大田軽石流 SKP: 三瓶木次降下軽石  
SKf: 三瓶粕瀬火砕流 Aso4: 阿蘇4火山灰  
DMP: 大山松江軽石

林・三浦(1987)より引用・加筆

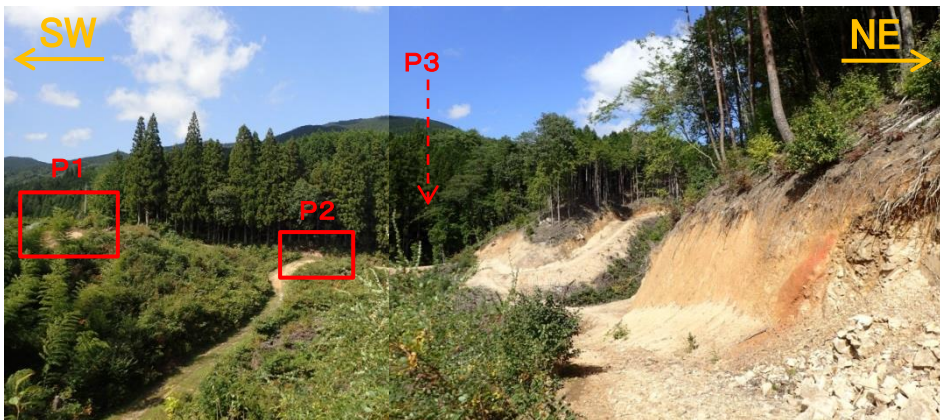
・林・三浦(1987)に示される地質柱状図(14)の読取り値によると、岡山県北西部(新見市神郷)(旧神郷町)では155cmである。

※地質柱状図(14)の地点が文献調査地点⑭に対応する。

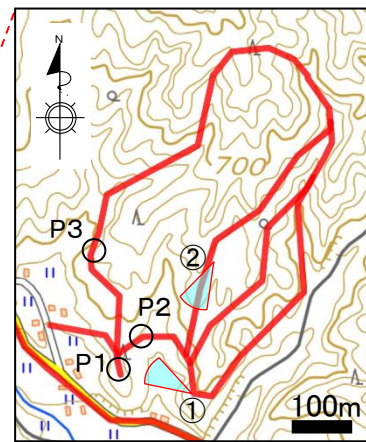


# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷)

① 三瓶浮布テフラが確認された新見市神郷の露頭状況



・当該地域の林道沿いの全面露頭には普遍的に風化花崗岩(一部角礫化)が確認されたが、三瓶浮布テフラはP1、P2及びP3で確認され、当該地域の同火山灰の分布は局所的であると考えられる。



② 林道沿いの全面露頭状況



・林・三浦(1987)で三瓶浮布テフラの降灰が報告されている新見市神郷は、900~1000m級の山々の山間部に位置しており、三室川が南東方向に向かって流れている。  
 ・当該地域は、林業等の作業道(林道)が多くあり、林道沿いはほぼ全面露頭をなしている。  
 ・主な地表地質踏査ルートを示す。





# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷(P1))

P1 露頭全景



拡大①

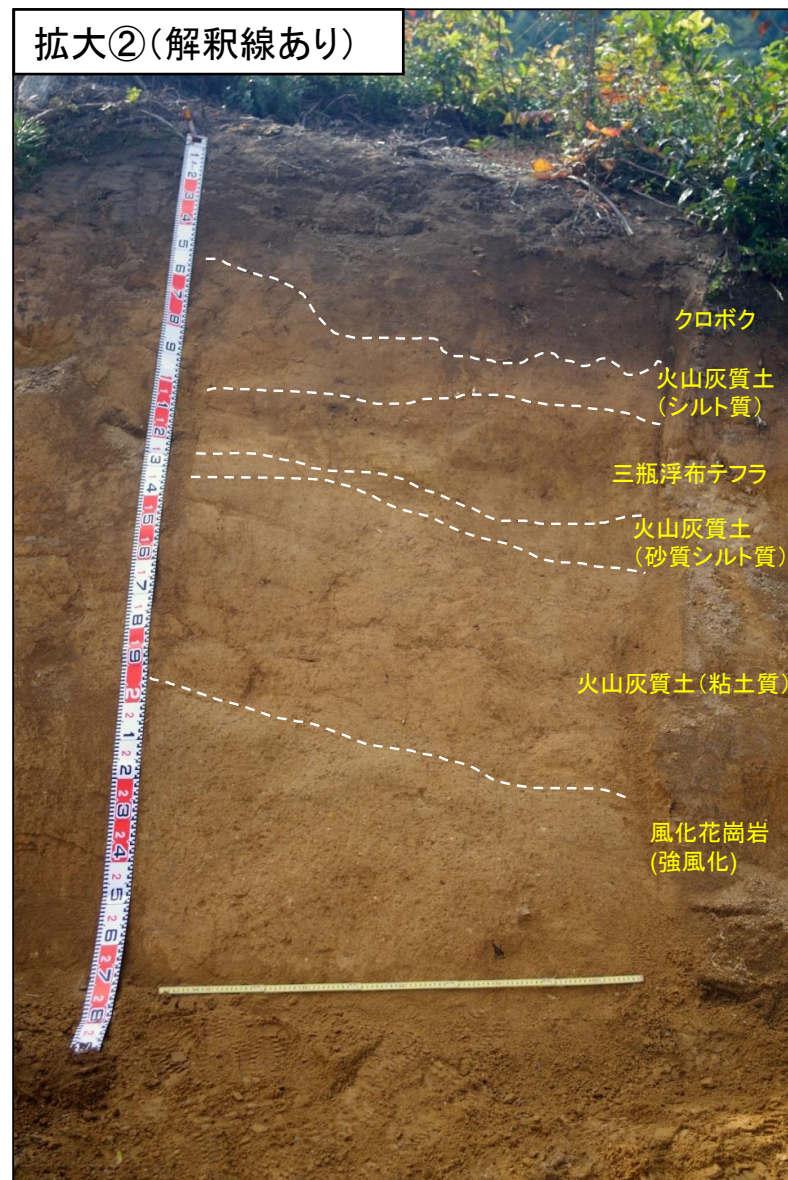
拡大①

拡大②



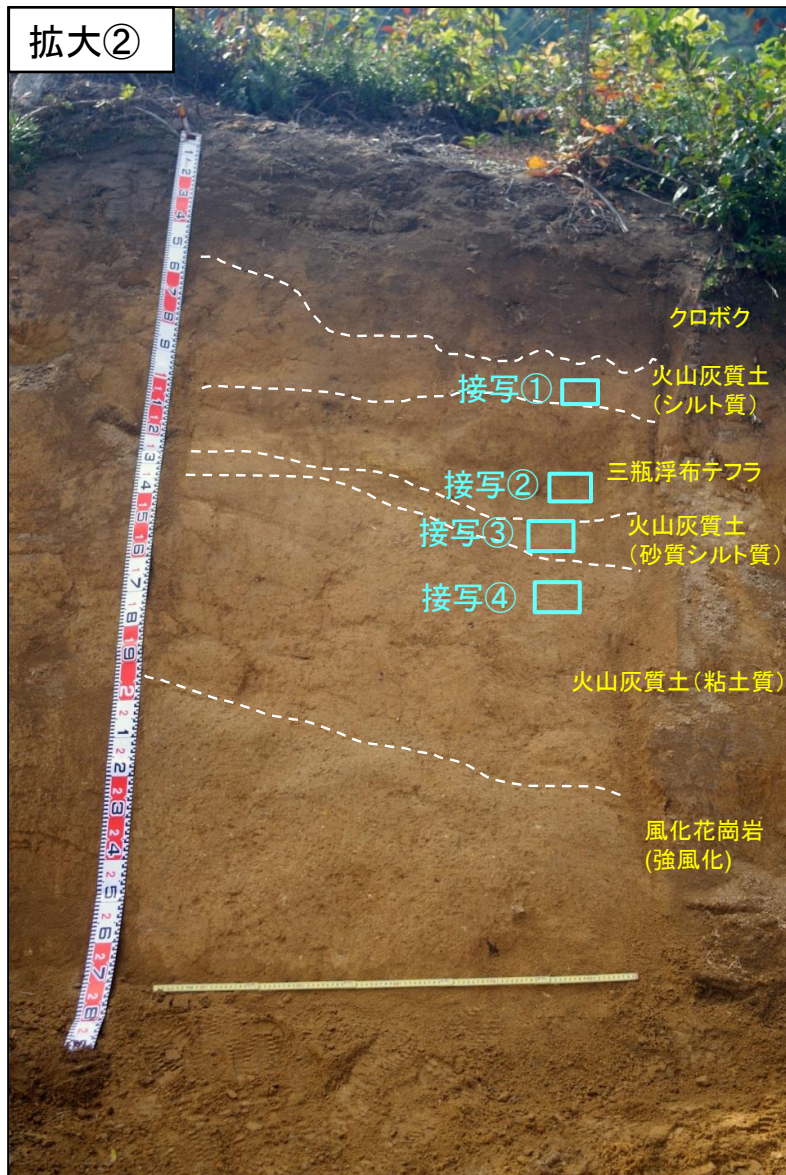
・林道沿いの全面露頭において、三瓶浮布テフラが確認される。







拡大②



三瓶浮布テフラの接写写真

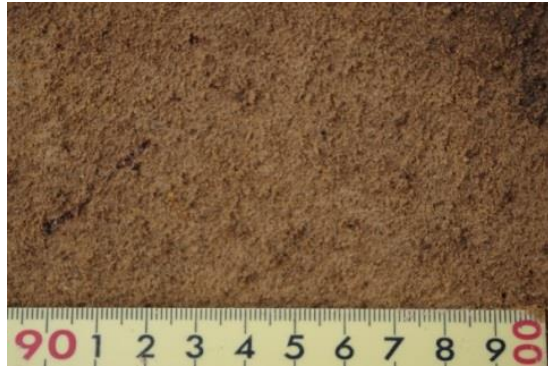


- ・上位からクロボク、火山灰質土(シルト質)、三瓶浮布テフラ、火山灰質土(砂質シルト質)、火山灰質土(粘土質)、風化花崗岩(強風化)を確認した。
- ・風化花崗岩の上位に分布する火山灰質土(粘土質及び砂質シルト質)は火山ガラスを含むことからAT混じりと考えられ、その層の上位に分布する黄褐色を呈し、角閃石を含む軽石層を三瓶浮布テフラと同定した。
- ・三瓶浮布テフラは黄褐色を呈し、φ 5mm程度の軽石を含み、φ 2mm程度の角閃石が認められる。
- ・三瓶浮布テフラの層厚は、黄褐色を呈する軽石主体部分がブロック状に分布する範囲とその上位の不均質に混在する範囲を合わせて「30cm」と評価した。
- ・三瓶浮布テフラの上位または下位に分布する火山灰質土(シルト質または砂質シルト質)は、褐色または淡黄褐色を呈し、三瓶浮布テフラの特徴的な黄褐色の色調とは異なり、これらはレス、ロームなどの風成堆積物や周辺から供給された崩壊土などの二次的堆積物からなると考えられる。

- ・左図に示す地層区分の妥当性確認のため、接写写真撮影及び帯磁率測定を行った。



## 地点6 岡山県北西部(新見市神郷(P1))



接写① 火山灰質土(シルト質)

- ・シルト主体の層相を示し、火山ガラスや黒雲母を少量含む。
- ・色調は褐色を呈する。
- ・下位層とは漸移的である。※

※下位層の三瓶浮布テフラから漸移的に上方細粒化を示すが、不均質に混じる黄褐色の軽石の有無で層相境界を設けた。



接写② 三瓶浮布テフラ

- ・黄褐色の軽石を多量に含む火山灰層で、火山ガラス、黒雲母、角閃石を含む。
- ・色調は黄褐色を呈する。
- ・軽石主体部分がブロック状に分布し、ブロックの周囲には褐色の不均質な砂質シルトが認められる。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。



接写③ 火山灰質土(砂質シルト質)

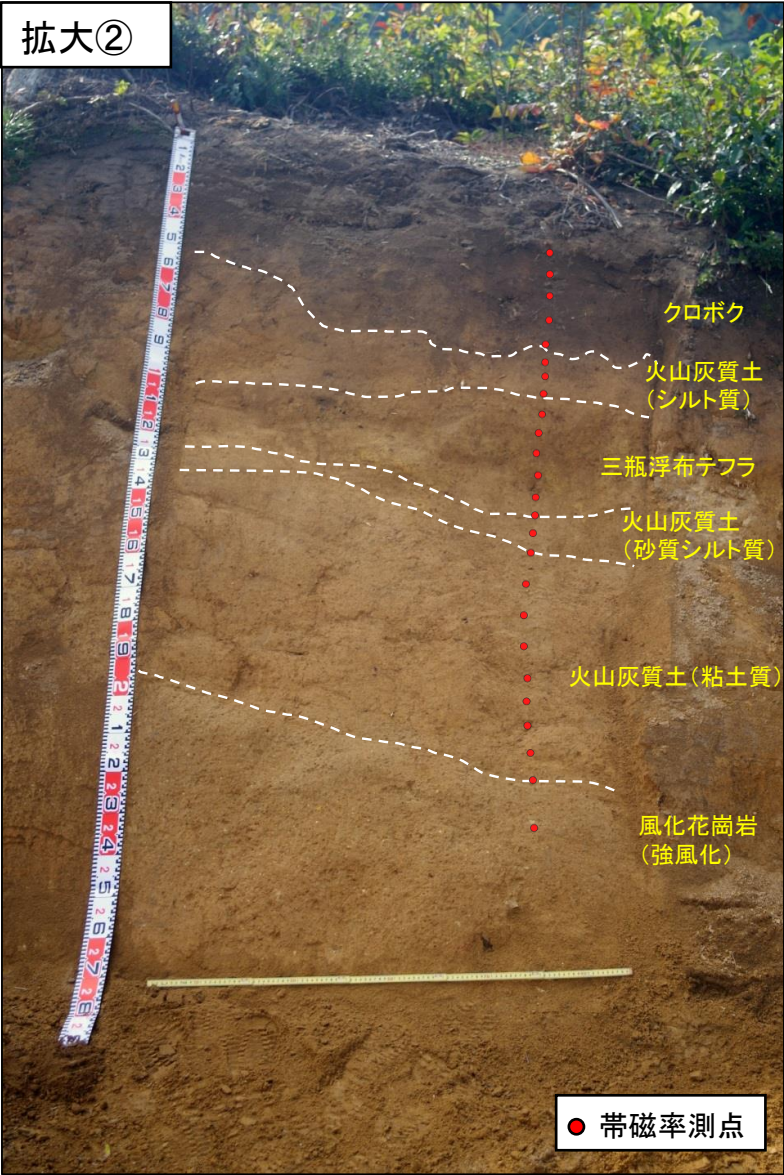
- ・砂質シルト主体の層相を示し、火山ガラス、黒雲母、角閃石を少量含む。
- ・色調は淡黄褐色を呈する。
- ・AT由来の火山灰を含むと考えられる。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。



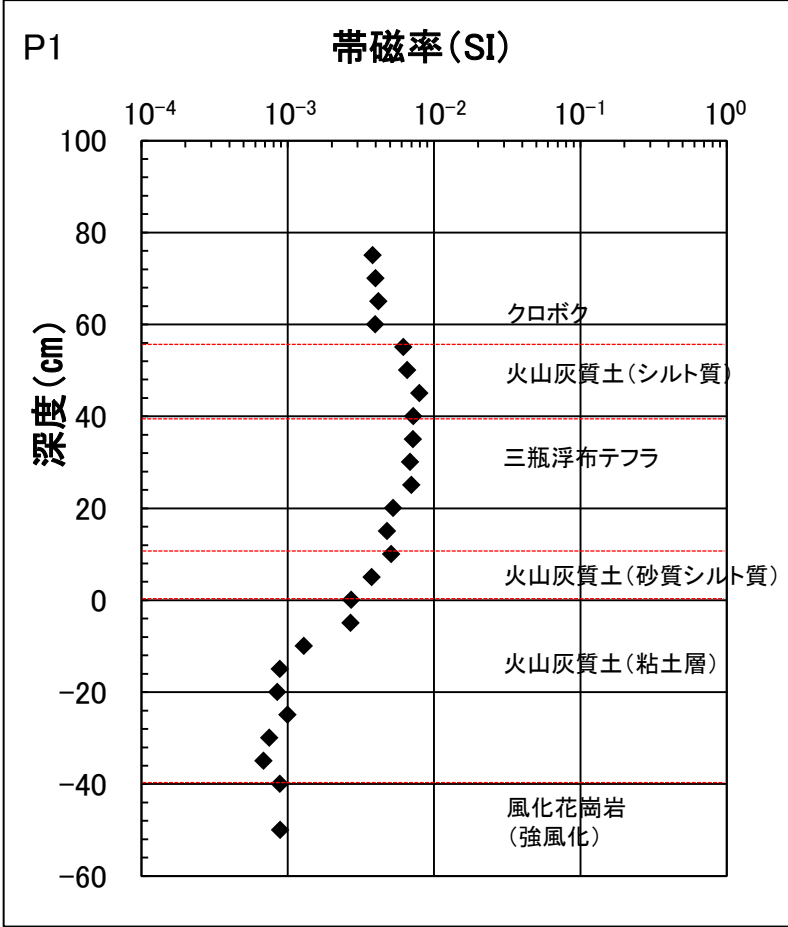
接写④ 火山灰質土(粘土質)

- ・粘土主体の層相を示し、火山ガラスを少量含む。
- ・色調は褐色を呈する。
- ・AT由来の火山灰を含むと考えられる。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。

拡大②



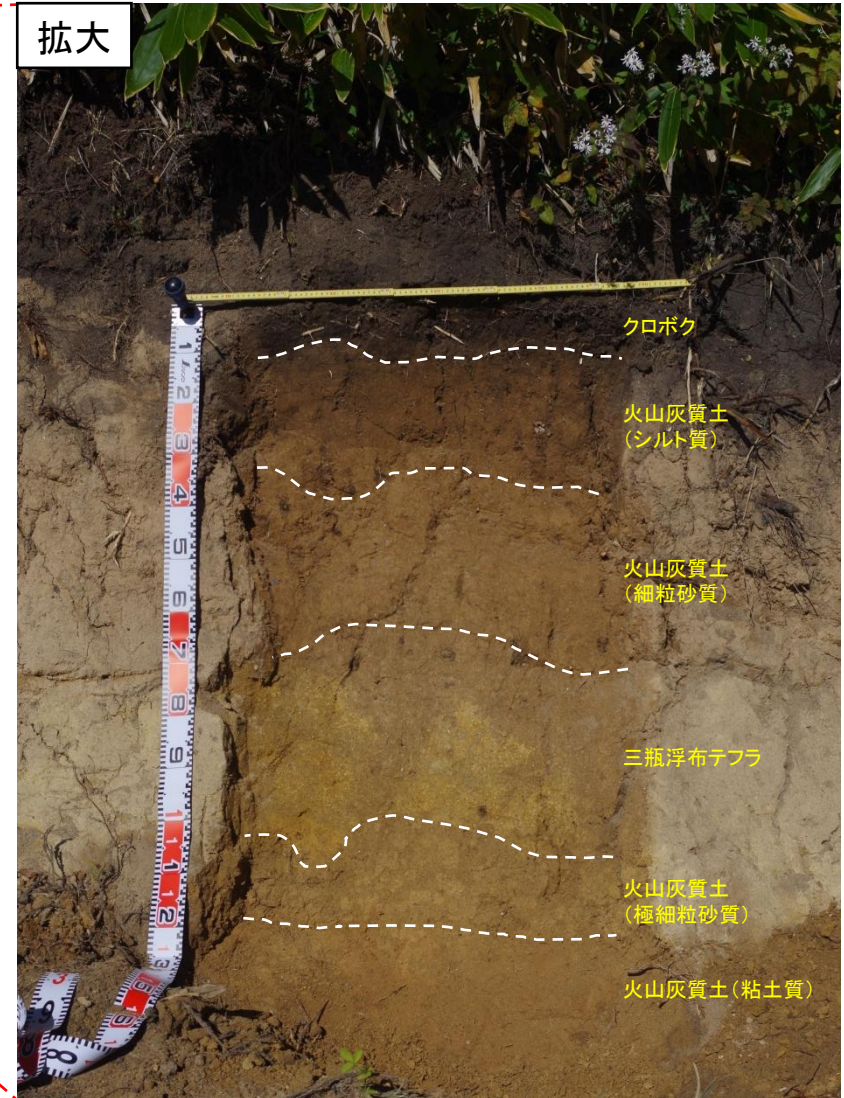
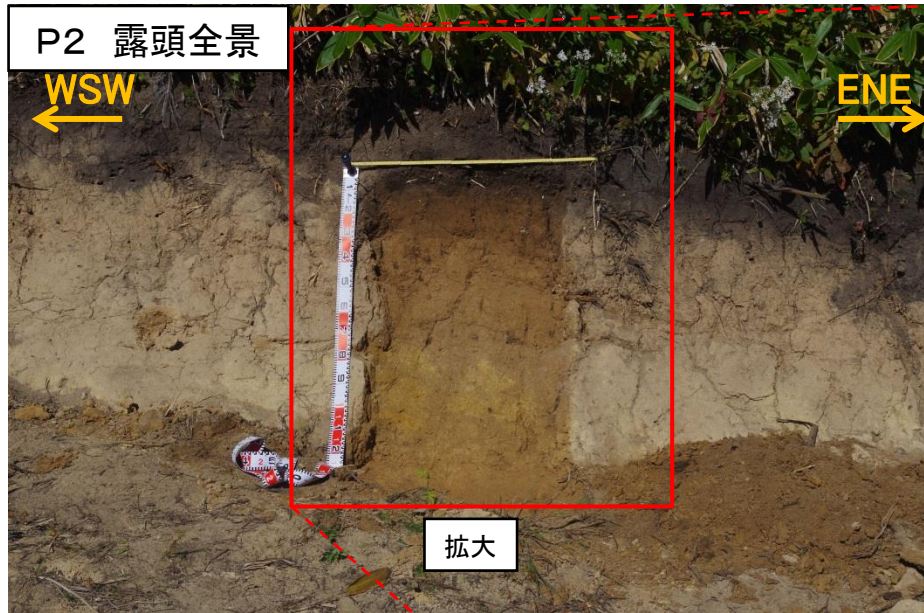
● 帯磁率測点



- ・帯磁率を測定し、地層区分との関係を確認した。
- ・三瓶浮布テフラの帯磁率は、 $10^{-3}$  SI のオーダーであり、ほぼ一定の値を示す。
- ・三瓶浮布テフラの上位または下位に分布する火山灰質土の帯磁率は、三瓶浮布テフラに比べやや低い値を示す。
- ・火山灰質土(粘土質)及び風化花崗岩(強風化)の帯磁率は、三瓶浮布テフラに比べ1オーダー程度低い。



# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷(P2))



- ・上位からクロボク, 火山灰質土(シルト質), 火山灰質土(細粒砂質), 三瓶浮布テフラ(層厚40cm), 火山灰質土(極細粒砂質), 火山灰質土(粘土質)を確認した。
- ・最下位層とその上位の火山灰質土(粘土質及び極細粒砂質)は火山ガラスを含むことからAT混じりと考えられ, その層の上位に分布する黄褐色を呈し, 角閃石を含む軽石層を三瓶浮布テフラと同定した。
- ・三瓶浮布テフラは黄褐色を呈し, φ 2mm程度の軽石を含み, φ 2mm程度の角閃石が認められる。
- ・三瓶浮布テフラの層厚は, 黄褐色を呈する軽石主体部分が層状に分布する範囲とその上位の不均質に混在する範囲を合わせて「40cm」と評価した。
- ・三瓶浮布テフラの上位または下位に分布する火山灰質土(細粒砂質または極細粒砂質)は, 風成堆積物や崩壊土などの二次的堆積物からなると考えられる。

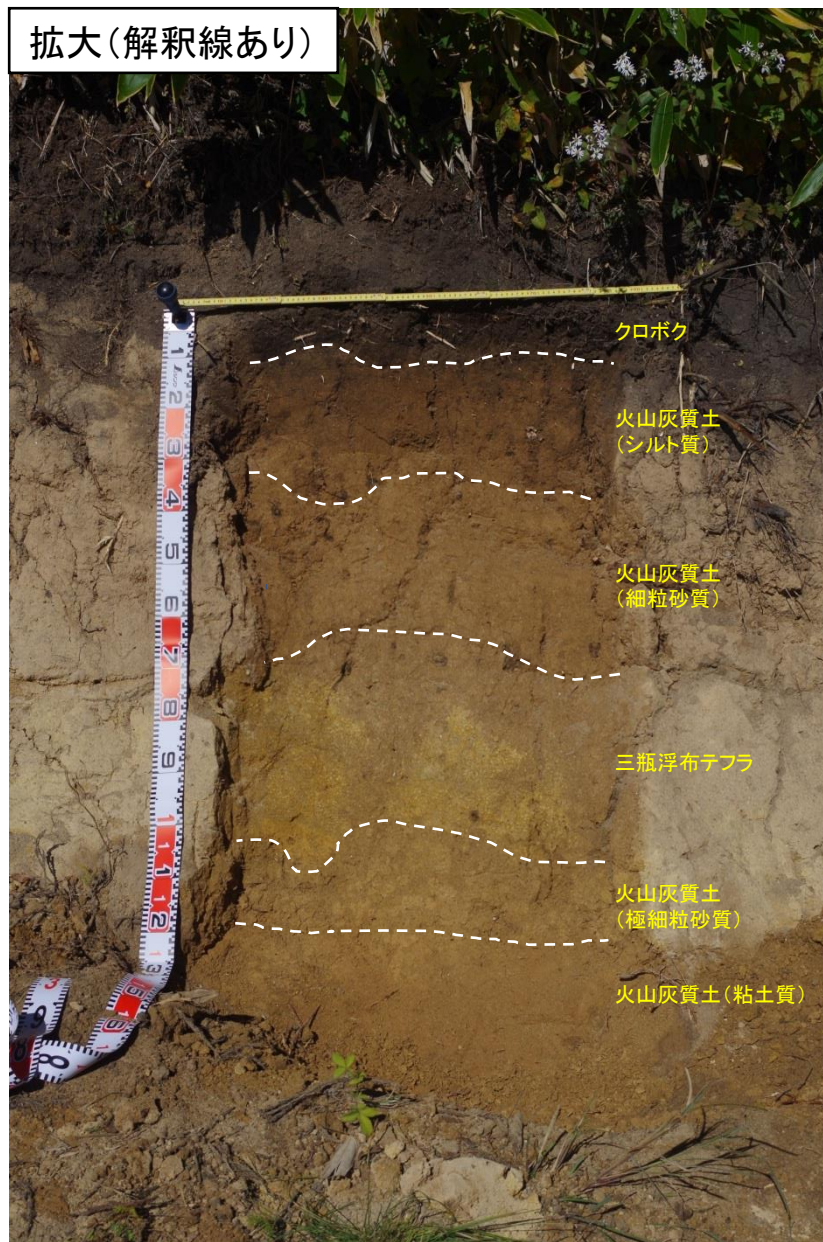
・上図に示す地層区分の妥当性確認のため, 接写写真撮影及び帯磁率測定に加えて, P1~3の代表地点として実体顕微鏡観察を行った。



拡大(解釈線なし)

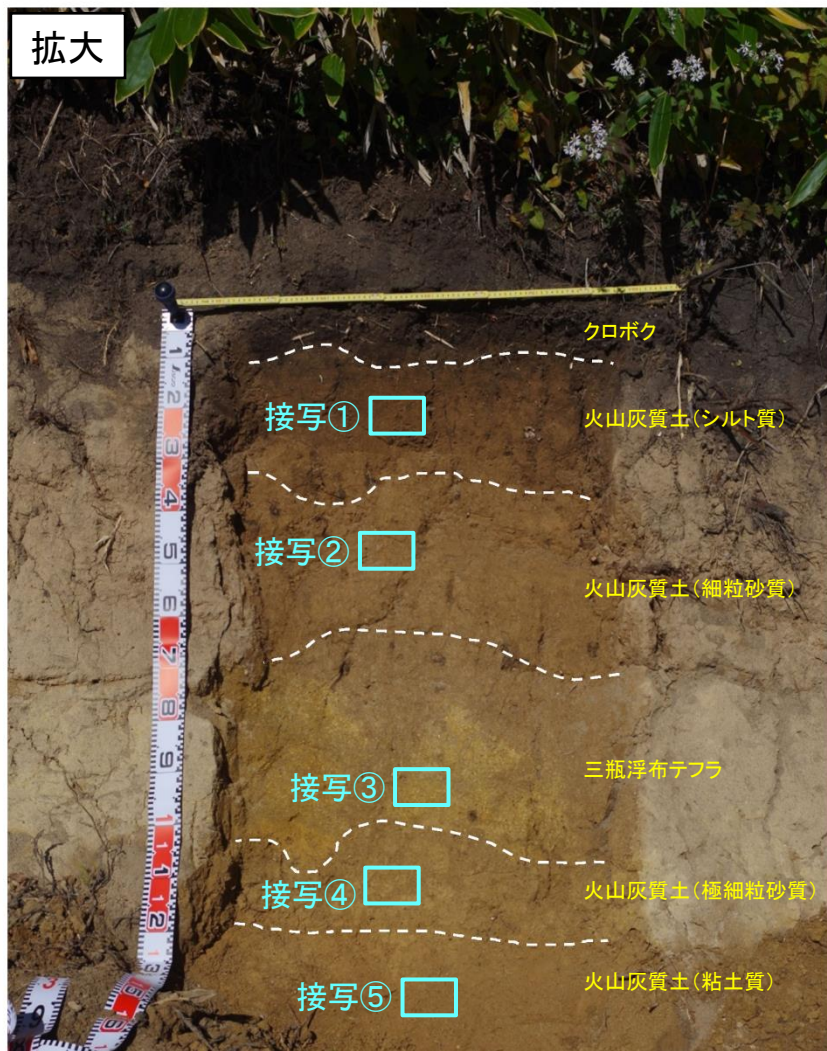


拡大(解釈線あり)





拡大



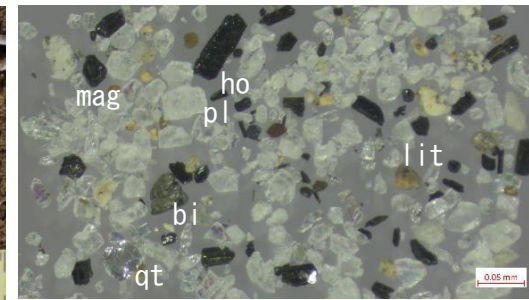
## 接写写真及び実体顕微鏡観察結果

接写① 火山灰質土(シルト質)



- ・シルト主体の層相を示し、火山ガラス、黒雲母、角閃石を少量含む。
- ・色調は暗褐色を呈する。
- ・下位層とは漸移的に変化する。

実体顕微鏡写真



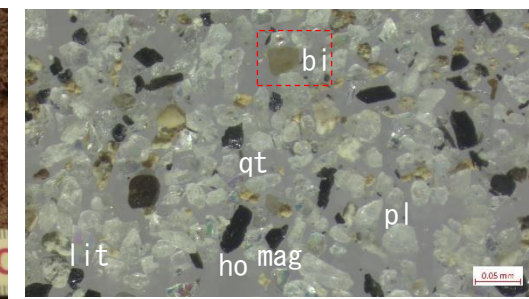
- ・粒径が小さい。
- ・軽石をほとんど含まない。

接写② 火山灰質土(細粒砂質)



- ・細粒砂主体の層相を示し、石英、黒雲母、火山ガラスを含む。
- ・色調は淡褐色を呈する。
- ・黒雲母のサイズはφ 1~2mm程度である。
- ・下位層とは漸移的に変化する。\*

実体顕微鏡写真



- ・粒径が小さい。
- ・軽石をほとんど含まない。
- ・石質岩片を含む。
- ・黒雲母が剥離し、積層構造をほとんど残さない。

### ラベル凡例

qt : 石英 pl : 斜長石 bi : 黒雲母 ho : 普通角閃石  
mag : 磁鉄鉱 lit : 石質岩片

※下位層の三瓶浮布テフラから漸移的に上方細粒化を示すが、不均質に混じる黄褐色の軽石の有無で層相境界を設けた。

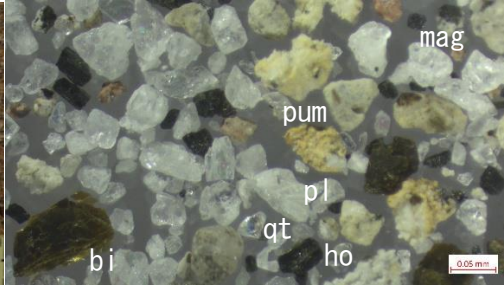


# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷(P2))

## 接写写真及び実体顕微鏡観察結果

接写③ 三瓶浮布テフラ

実体顕微鏡写真



- ・黄褐色の軽石を主体とし、基質は極細粒砂の層相を示し、火山ガラス、黒雲母、角閃石を含む。
- ・色調は黄褐色を呈する。
- ・岩片は非常に少ない。
- ・軽石のサイズはφ 2mm程度である。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。

- ・軽石と黒雲母のサイズが他の鉱物片に対してやや大きく、全体的に粒径が上位、下位層に比べて大きい。
- ・軽石が多い。
- ・黒雲母は積層構造を残す。

接写④ 火山灰質土(極細粒砂質)

実体顕微鏡写真

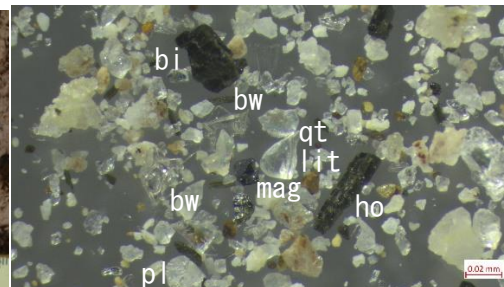


- ・極細粒砂主体の層相を示し、石英、火山ガラス、軽石、黒雲母、角閃石を含む。
- ・色調は淡黄褐色を呈する。
- ・軽石は散在し、サイズはφ 2mm程度である。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。

- ・上位の三瓶浮布テフラに比べて粒径が小さい。
- ・下位の粘土質火山灰層(接写⑤)と同様の鉱物片を含む。
- ・風化花崗岩片が含まれる。
- ・AT由来の火山灰を含むと考えられる。

接写⑤ 火山灰質土(粘土質)

実体顕微鏡写真



- ・粘土主体の層相を示し、火山ガラスを含む。
- ・色調は褐色を呈する。

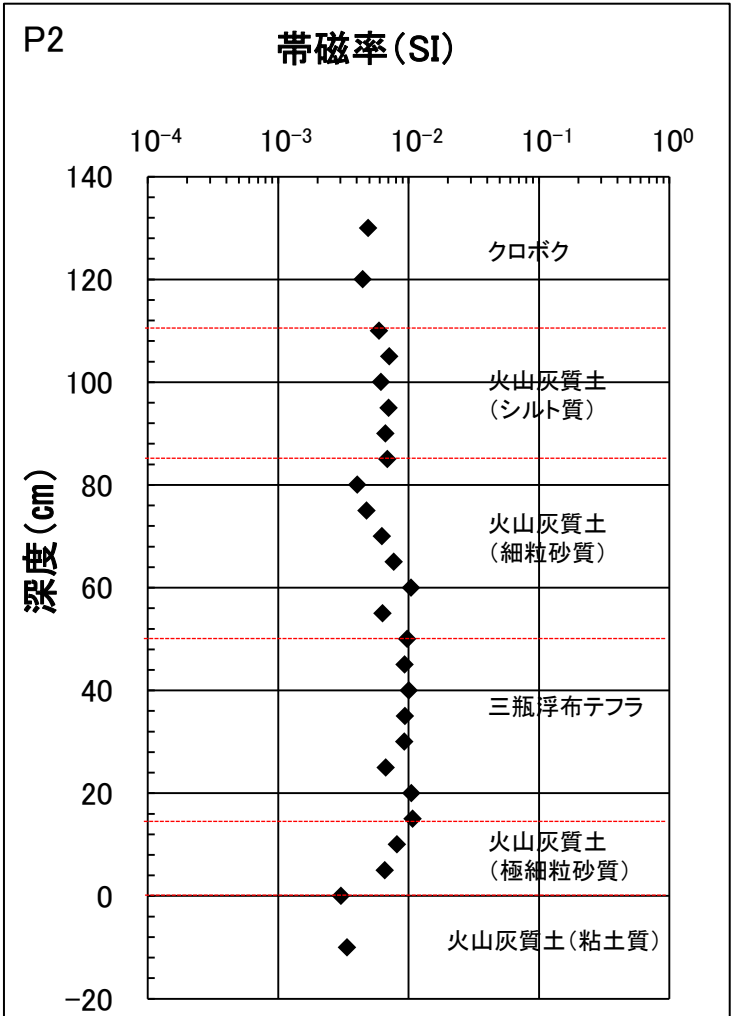
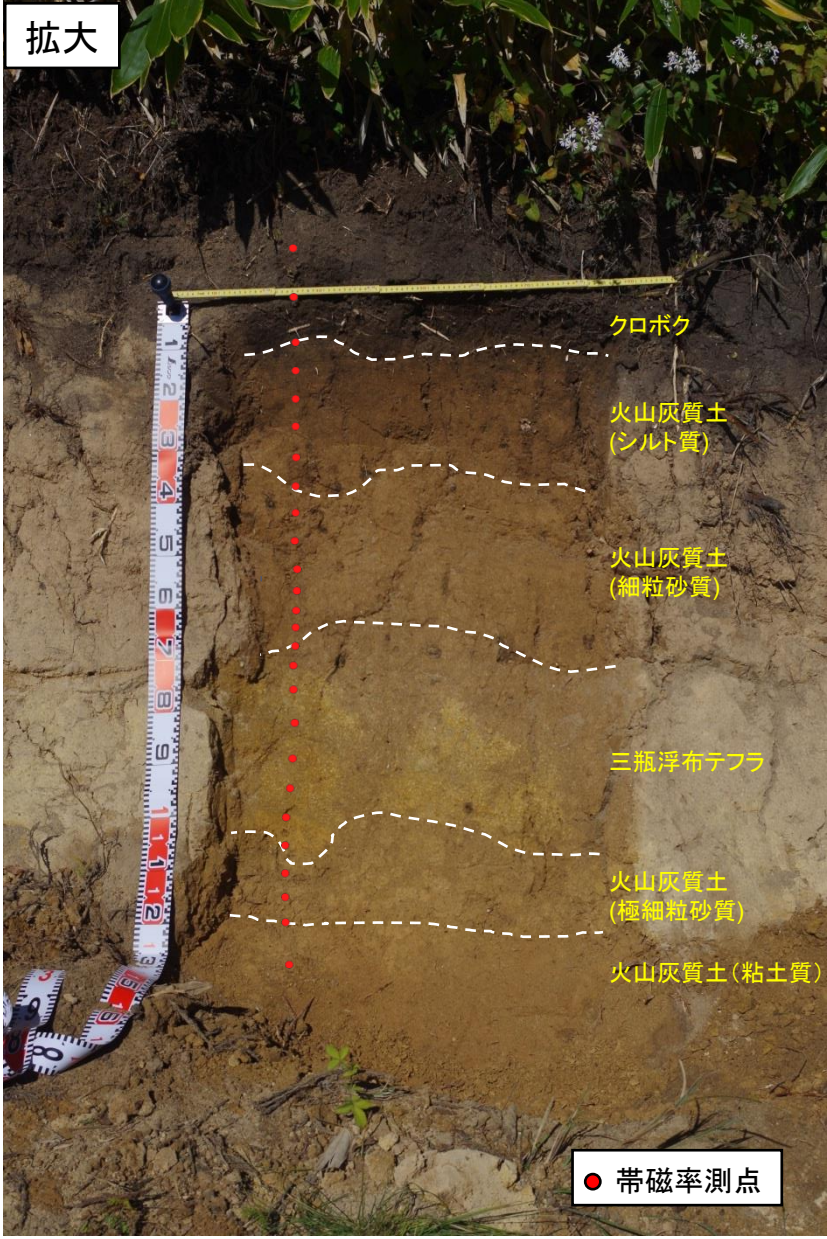
- ・粒径が小さい。
- ・バブル型火山ガラスと鉱物片が含まれる。
- ・AT由来の火山灰を含むと考えられる。

### ラベル凡例

- qt : 石英
- pl : 斜長石
- bi : 黒雲母
- ho : 普通角閃石
- mag : 磁鉄鉱
- bw : バブル型火山ガラス
- pum : 軽石
- lit : 石質岩片
- a-Gr : 風化花崗岩

- ・三瓶浮布テフラ(接写③)は軽石が多く、粒径が上位層(接写②)及び下位層(接写④)に比べて大きい。
- ・三瓶浮布テフラの上位の火山灰質土(細粒砂質)(接写②)は石質岩片を含み、軽石はほとんど含まない。
- ・三瓶浮布テフラより下位の火山灰質土(極細粒砂~粘土質)(接写④及び⑤)はバブル型火山ガラスが認められることから既往文献で示される層序と対比するとAT由来の火山灰を含むと考えられる。





- ・帯磁率を測定し、地層区分との関係を確認した。
- ・三瓶浮布テフラの帯磁率は、10<sup>-2</sup> SI 程度であり、ほぼ一定の値を示す。
- ・三瓶浮布テフラの上位または下位に分布する火山灰質土の帯磁率は、三瓶浮布テフラに比べやや低い値を示す。
- ・火山灰質(粘土質)の帯磁率は、三瓶浮布テフラに比べ半分以下の低い値を示す。

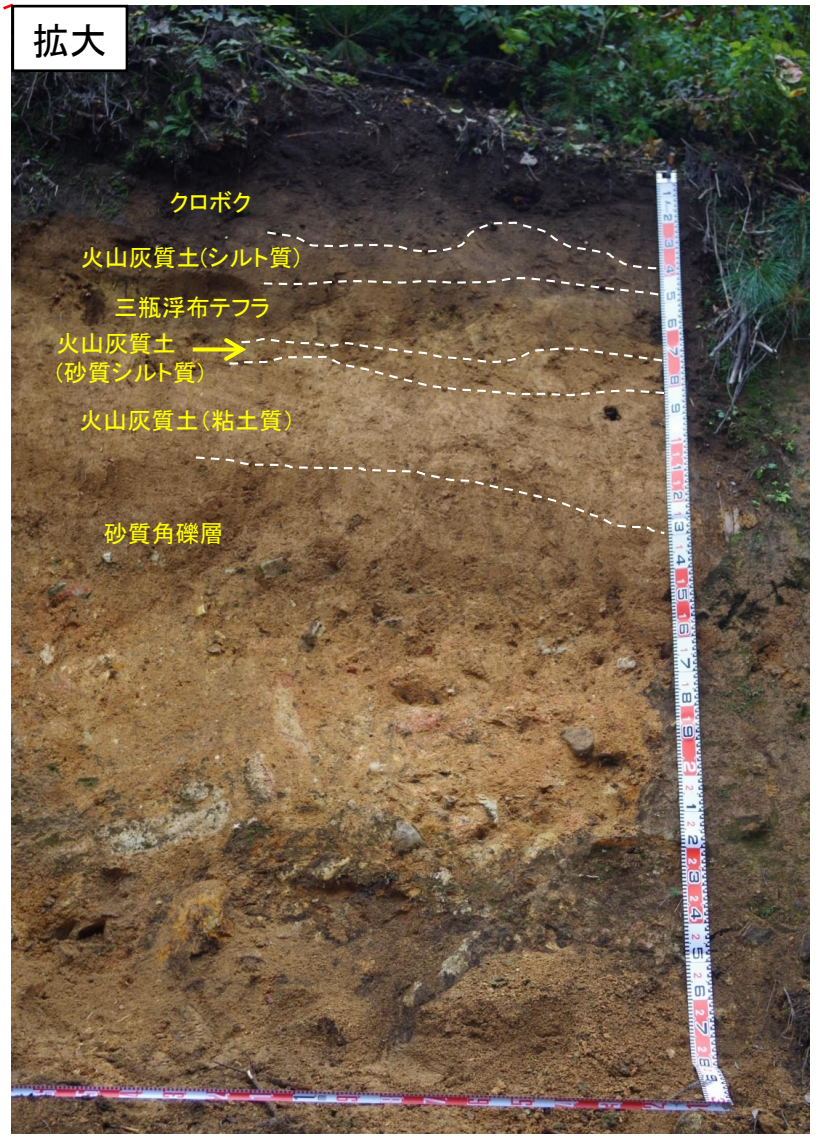


# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷(P3))

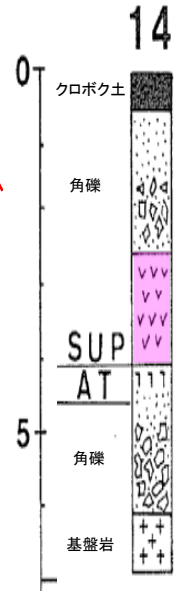
P3 露頭全景



拡大



- ・上位から黒ボク, 火山灰質土(シルト質), 三瓶浮布テフラ(層厚20cm), 火山灰質土(砂質シルト質), 火山灰質土(粘土質), 砂質角礫層, 風化花崗岩を確認した。
- ・砂質角礫層が認められることから, 林・三浦(1987)に示される地質柱状図(14)に類似する露頭である。
- ・砂質角礫層の上位に分布する火山灰質土(粘土質及び砂質シルト質)は火山ガラスを含むことからAT混じりと考えられ, その層の上位に分布する黄褐色を呈し, 角閃石を含む軽石層を三瓶浮布テフラと同定した。
- ・三瓶浮布テフラは黄褐色を呈し, φ 6mm程度の軽石を含み, φ 1~2mm程度の角閃石が認められる。
- ・三瓶浮布テフラの上位または下位に分布する火山灰質土(シルト質または砂質シルト質)は, 風成堆積物や崩壊土などの二次的堆積物からなると考えられる。



林・三浦(1987)より引用・加筆

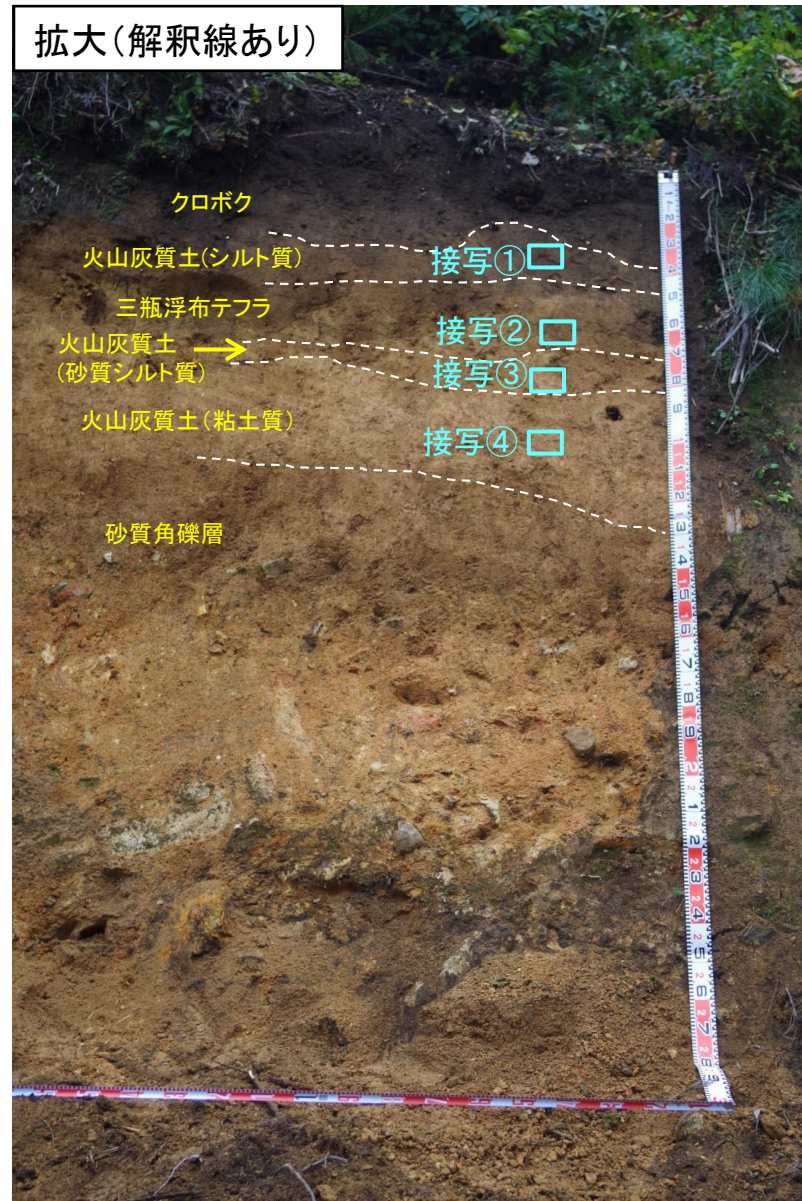
・上図に示す地層区分の妥当性確認のため, 接写写真撮影及び帯磁率測定を行った。



拡大(解釈線なし)



拡大(解釈線あり)





## 地点6 岡山県北西部(新見市神郷(P3))



接写① 火山灰質土(シルト質)

- ・シルト主体の層相を示し、火山ガラスを少量含む。
- ・色調は暗褐色を呈する。
- ・下位層とは漸移的である。※

※下位層の三瓶浮布テフラから漸移的に上方細粒化を示すが、不均質に混じる黄褐色の軽石の有無で境界を設けた。



接写② 三瓶浮布テフラ

- ・黄褐色の軽石を多量に含む火山灰層で、火山ガラス、黒雲母、角閃石を含む。
- ・色調は黄褐色を呈する。
- ・軽石のサイズはφ 6mm程度、鉱物のサイズはφ 1~2mm程度である。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。



接写③ 火山灰質土(砂質シルト質)

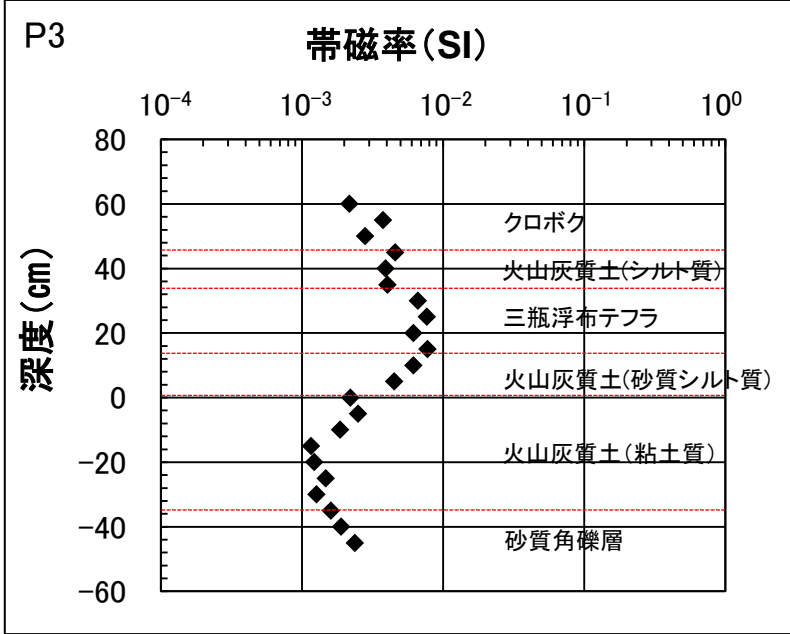
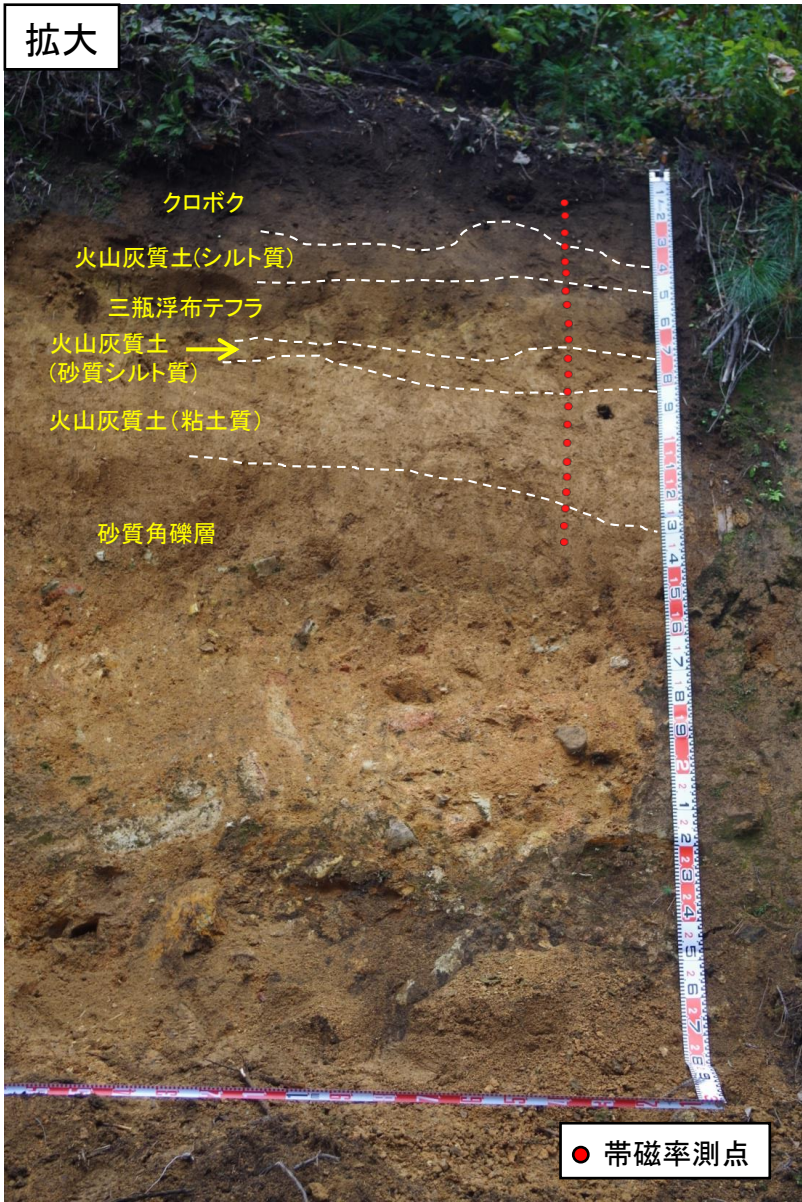
- ・砂質シルト主体の層相を示し、石英、黒雲母、火山ガラスを含む。
- ・色調は淡黄褐色を呈する。
- ・AT由来の火山灰を含むと考えられる。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。



接写④ 火山灰質土(粘土質)

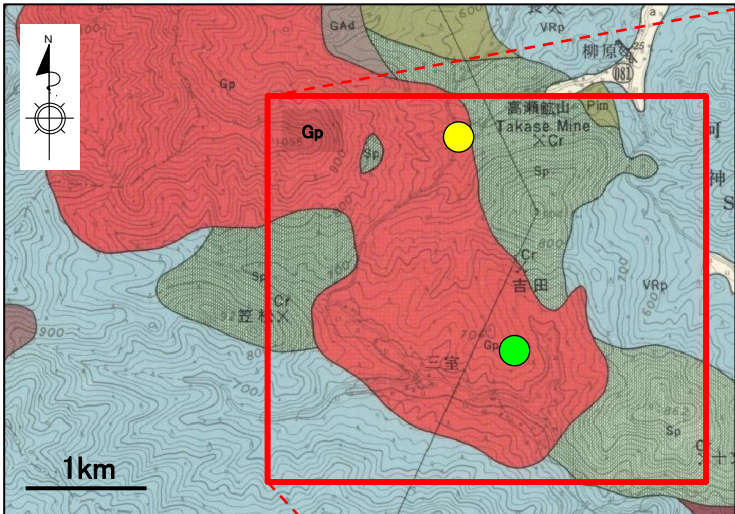
- ・粘土主体の層相を示し、火山ガラスを含む。
- ・色調は淡褐色~褐色を呈する。
- ・AT由来の火山灰を含むと考えられる。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。





- ・帯磁率を測定し、地層区分との関係を確認した。
- ・三瓶浮布テフラの帯磁率は、10<sup>-3</sup> SI のオーダーである。
- ・三瓶浮布テフラの上位または下位に分布する火山灰質土の帯磁率は、三瓶浮布テフラに比べやや低い値を示す。
- ・火山灰質土(粘土質)の帯磁率は、三瓶浮布テフラに比べ1オーダー程度低い。





服部(1978)より引用・加筆

凡例

時代	分類			
白亜紀後期-晩新世	貫入岩類	花崗斑岩	Gp	花崗斑岩、微文象花崗岩および花崗閃緑岩
		石英閃緑岩・閃緑玢岩	Qp	石英閃緑岩・閃緑岩および閃緑玢岩
白亜紀	堆積岩類および火山岩類	三国山流紋岩類	Vtp	おもに流紋岩凝灰岩と凝灰角礫岩からなり、少量のデイサイトを含む
古生代	古生層(三郡変成岩)	千枚岩	Pm	苦鉄質~中世火山岩起源の淡い緑色千枚岩
		蛇紋岩類など	GAs	粗粒かんらん石・単斜輝石・はんれい岩
		蛇紋岩類など	Sp	蛇紋岩、少量の細粒はんれい岩をを含む



— : 主な地表地質踏査ルート  
○ : 三瓶浮布テフラ確認露頭

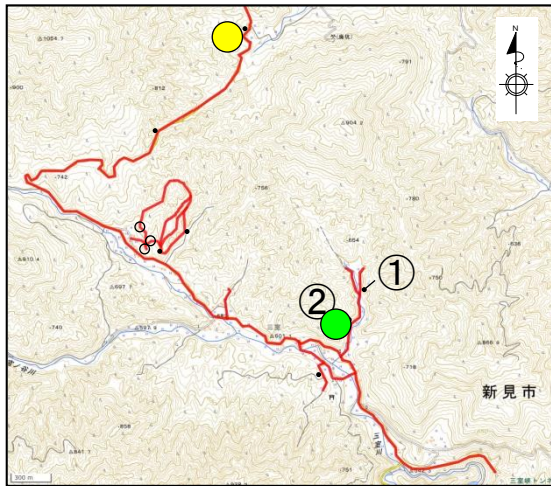
第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))  
● : >100cm  
● : >50cm  
● : 30cm

出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

・服部(1978)の5万分の1図幅「上石見地域の地質」によると、新見市神郷における第四紀火山灰堆積報告地点は、50cm以上及び30cm以上の計2地点である。



# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷)



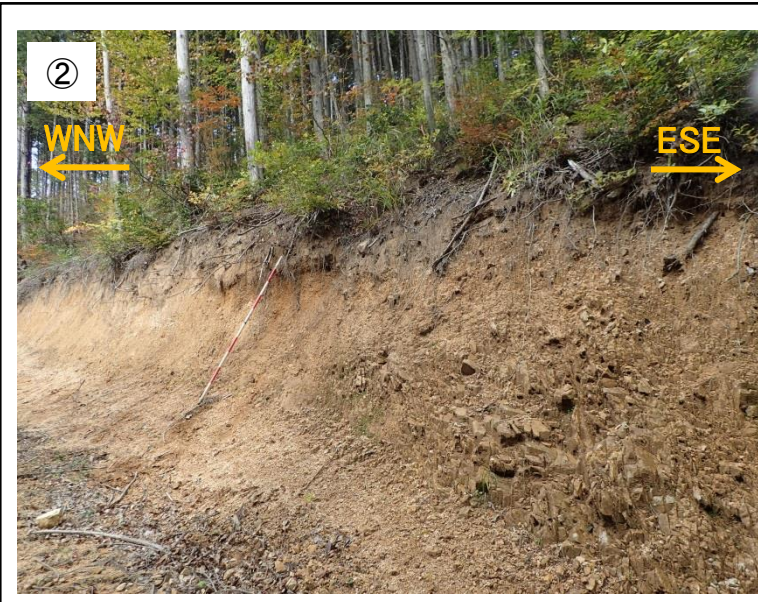
出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

- : 主な地表地質踏査ルート
- : 三瓶浮布テフラ確認露頭

- 第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))
- : >100cm
  - : >50cm
  - : 30cm



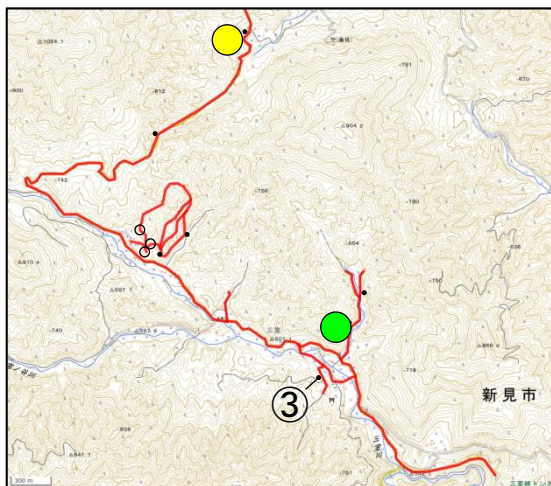
- ・基盤岩の花崗岩が分布している。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚30cm報告地点付近の全面露頭である。
- ・表層付近までマサ化の進んだ風化花崗岩が認められ、その上位に腐植土が薄く堆積する。
- ・火山灰層は認められない。



# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷)



出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

- : 主な地表地質踏査ルート
- : 三瓶浮布テフラ確認露頭

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

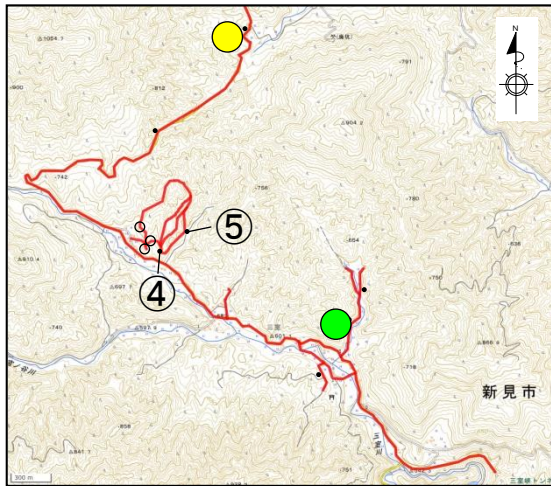
- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



- ・服部(1978)は、岡山県北西部(新見市神郷付近)において、河岸段丘堆積物が火山灰層(層厚30cm)に覆われていると報告している。
- ・小規模な表層すべりの滑落崖において段丘礫層を確認したが、その上位に火山灰層は認められない。



# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷)



出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

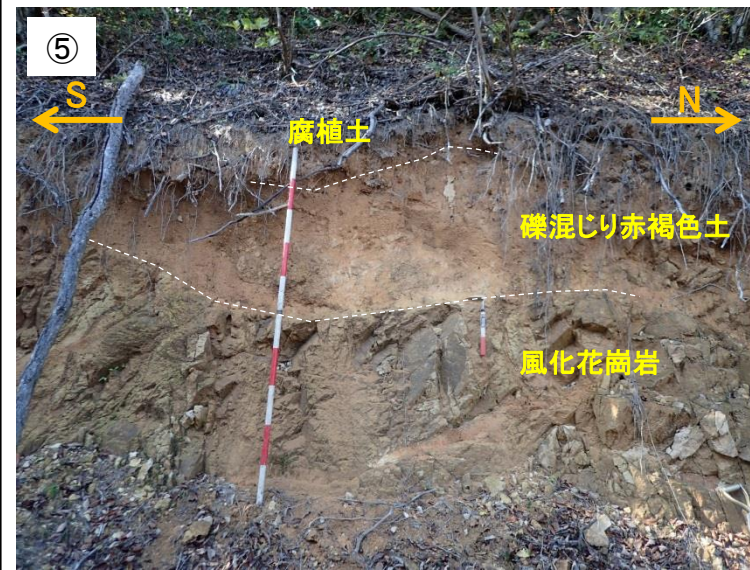
- : 主な地表地質踏査ルート
- : 三瓶浮布テフラ確認露頭

### 第四紀火山灰層厚 (服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



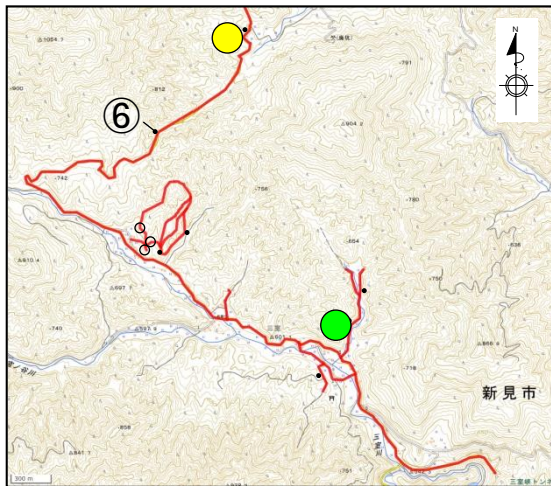
- ・地質調査により三瓶浮布テフラを確認した地点より東方の林道沿いの全面露頭である。
- ・表層付近まで風化花崗岩が分布している。
- ・火山灰層は認められない。



- ・地質調査により三瓶浮布テフラを確認した地点より東方の林道沿いの全面露頭である。
- ・風化花崗岩の上位に礫混じりの赤褐色土が認められ、その上位は腐植土からなる。
- ・火山灰層は認められない。



# 地点6 岡山県北西部(新見市神郷)



出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

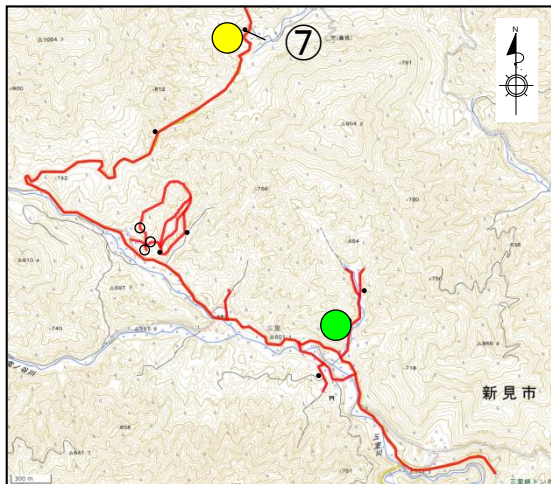
- : 主な地表地質踏査ルート
- : 三瓶浮布テフラ確認露頭

- 第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))
- : >100cm
  - : >50cm
  - : 30cm



- ・基盤岩の花崗岩が分布している。
- ・火山灰層は認められない。

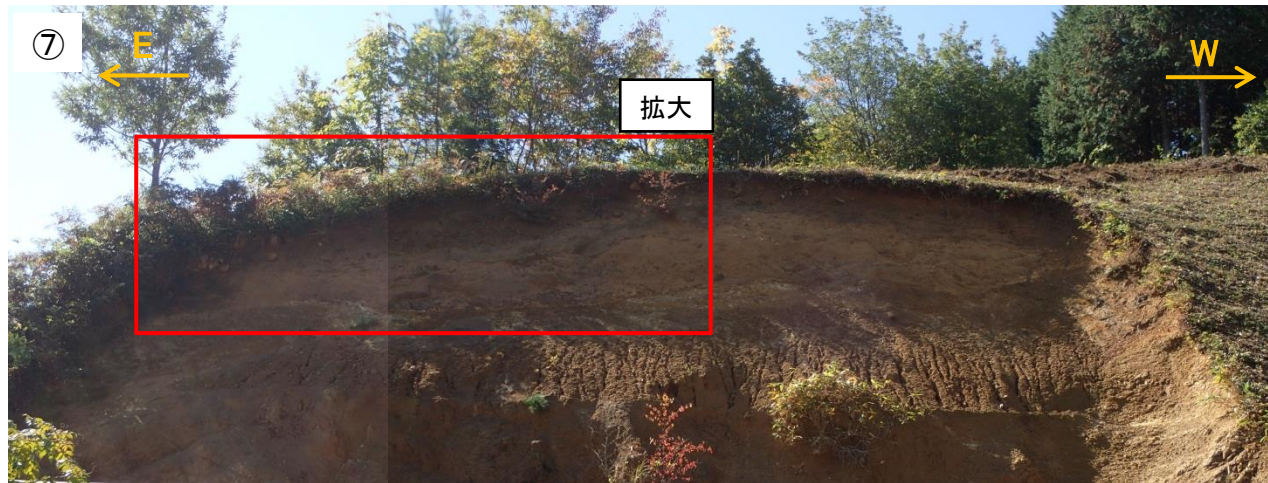




出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

- : 主な地表地質踏査ルート
- : 三瓶浮布テフラ確認露頭

- 第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))
- : >100cm
  - : >50cm
  - : 30cm



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告地点付近の全面露頭である。
- ・表層付近までマサ化の進んだ風化花崗岩が認められ、その上位に礫混じりの褐色粘土、クロボクが薄く堆積する。
- ・火山灰層は認められない。



## 地点6 岡山県北西部(新見市神郷)調査結果

- ・林・三浦(1987)に示される岡山県北西部(新見市神郷)の詳細な露頭地点(文献調査地点⑱三瓶浮布テフラ層厚:155cm)が不明であること,及び服部(1978)によると新見市神郷において第四紀火山灰層が2地点で認められるとされていることを踏まえ,当該地域において地表地質踏査を実施した。
- ・地質調査の結果,林道沿い(P1, P2及びP3)において三瓶浮布テフラが認められ,その層厚は最大40cmであることを確認した。
- ・町田・新井(2011)は,三瓶浮布テフラの等層厚線図を作成するにあたり,林・三浦(1987)を引用しているが,当該地域は町田・新井(2011)の等層厚線図の50cm以下の範囲に位置する。
- ・林・三浦(1987)で報告されている三瓶浮布テフラの層厚155cmについては,給源からの距離に対し,周辺の降灰厚さと比較し突出して層厚が大きく,当該地点の代表性を示す層厚とは考え難いことから参考扱いとする。
- ・服部(1978)による新見市神郷の堆積報告地点については,地表地質踏査の結果,林道沿い(P1, P2及びP3)において三瓶浮布テフラが認められ,その層厚は最大40cmであることから,三瓶浮布テフラの可能性が高いと考えられる。
- ・上記を踏まえ,当該地域における三瓶浮布テフラの降灰層厚は,地質調査によって確認した最大層厚40cmを採用して評価する。



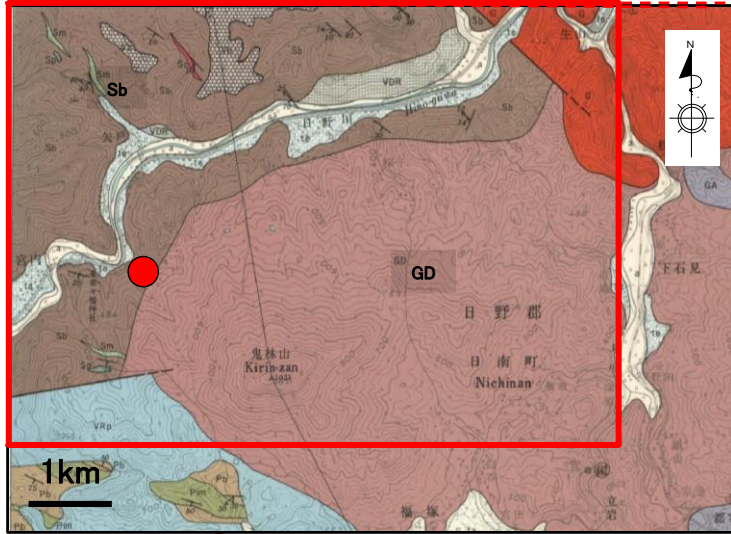
・岡山県北西部(新見市神郷)の三瓶浮布テフラの層厚は40cmとする。



# 地点7 鳥取県西部(日南町宮内付近)

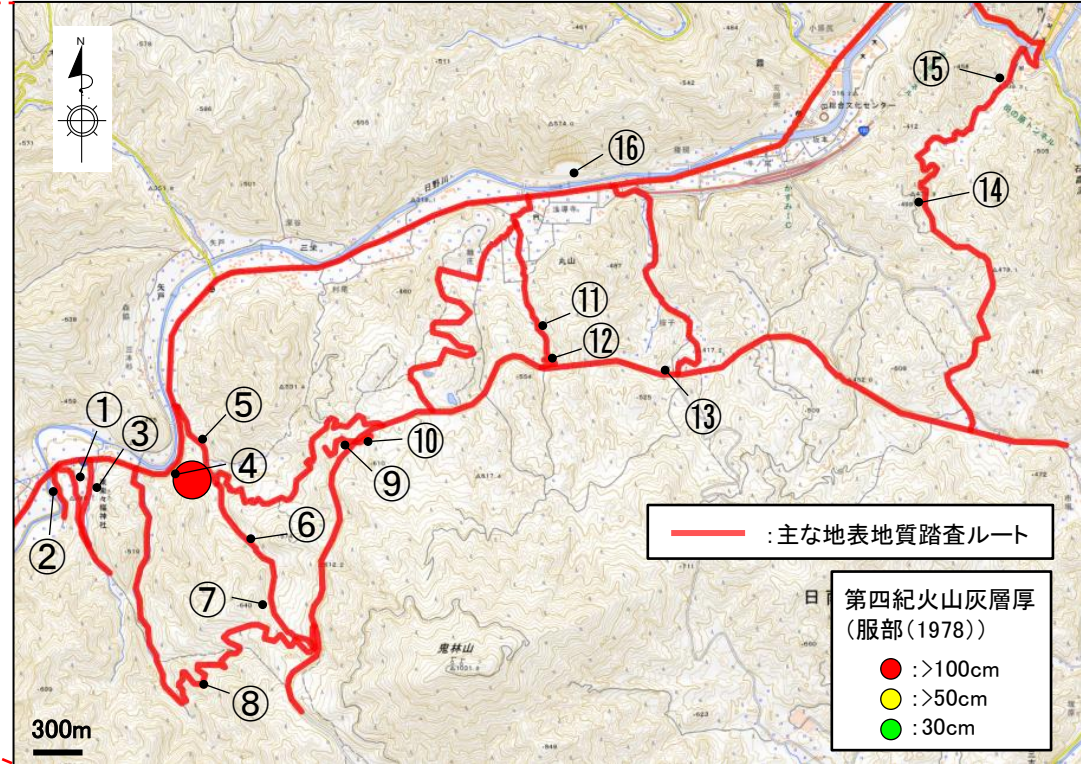
## 鳥取県西部(日南町宮内付近)(地質調査)

- ・服部(1978)によると、鳥取県西部(日南町宮内付近)において層厚100cm以上の第四紀火山灰層が1地点で認められるとされている。
- ・服部(1978)の堆積報告地点を中心に地表地質踏査(右下図に主な地表地質踏査ルート(赤線)を示す)を実施し、第四紀火山灰の分布状況を確認した。



凡例 服部(1978)より引用・加筆

時代	分類		
現世	沖積層	a	礫・砂・シルトおよび粘土
更新世	崖錐堆積層	1a	礫・砂・シルトおよび粘土
	河岸段丘堆積層	1b	礫・砂・シルトおよび粘土
鮮新世	かんらん石玄武岩	1c	かんらん石玄武岩
白亜紀後期- 晩新世	貫入岩類	鳥取花崗岩	粗粒黒雲母花崗岩、少量の斑状花崗岩・アブライトおよびベグマタイトを含む
		花崗閃緑岩	ホルンブレンド黒雲母花崗閃緑岩、ときおり単斜輝石を含む
		はんれい岩	かんらん石・単斜輝石・ホルンブレンドはんれい岩
白亜紀	堆積岩類および火山岩類	千屋火山岩類	デイサイトと流紋岩溶岩およびそれらの凝灰岩・凝灰角礫岩、少量の安山岩を含む
		三国山流紋岩類	おもに流紋岩凝灰岩と凝灰角礫岩からなり、少量のデイサイトを含む
		蛇紋岩類など	蛇紋岩、少量の細粒はんれい岩を含む

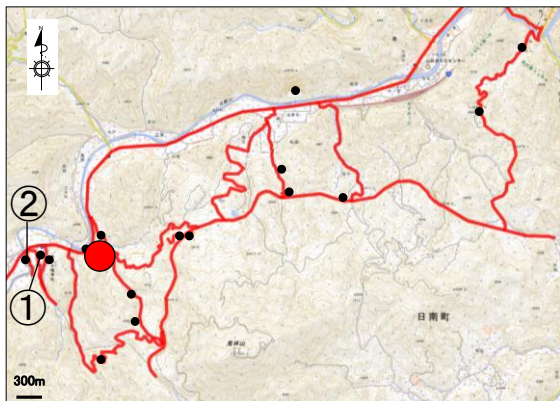


出典:国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

時代	分類			
古生代	古生層(三郡変成岩)	千枚岩	Pm	苦鉄質~中世火山岩起源の淡い緑色千枚岩
			Pb	砂岩・泥岩起源の黒色千枚岩
		結晶片岩(曹長石斑状変晶を含む)	Pa	チャート起源の珪質片岩
			Pg	苦鉄質火山岩起源の緑色片岩
			Pd	砂岩・泥岩起源の黒色片岩
			Pc	砂岩・泥岩起源の黒色片岩



# 地点7 鳥取県西部(日南町宮内付近)



出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



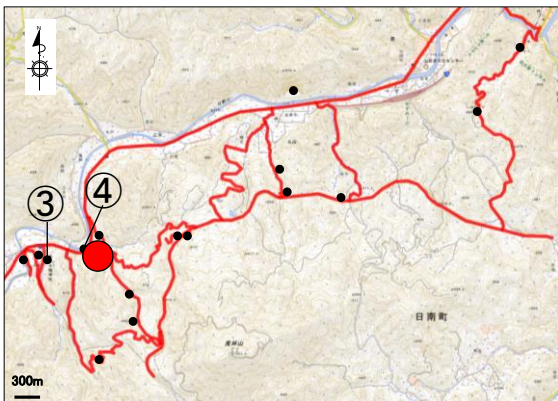
- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点より西方の平野部である。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点より西方の平野部斜面の露頭状況である。
- ・古生代の三郡変成岩が分布している。
- ・火山灰層は認められない。



# 地点7 鳥取県西部(日南町宮内付近)



出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

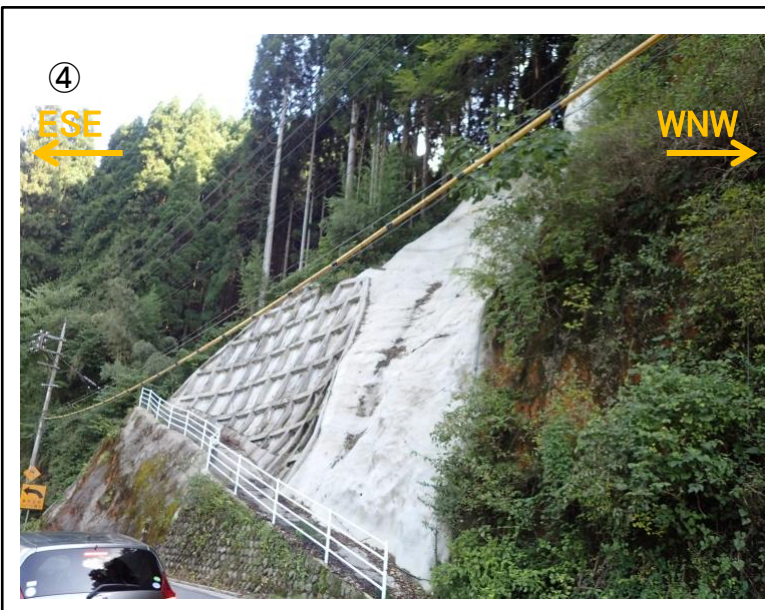
— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



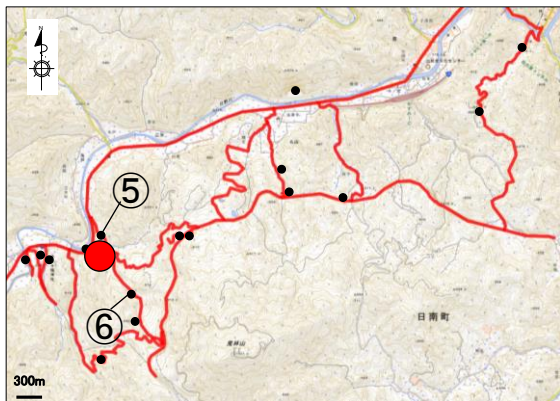
- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点西方の露頭状況である。
- ・下位から礫層, クロボクが分布する。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点付近の法面状況である。
- ・法面は法枠や吹付が施され, 付近は植生が繁茂しており, 地質状況は確認できない。



# 地点7 鳥取県西部(日南町宮内付近)

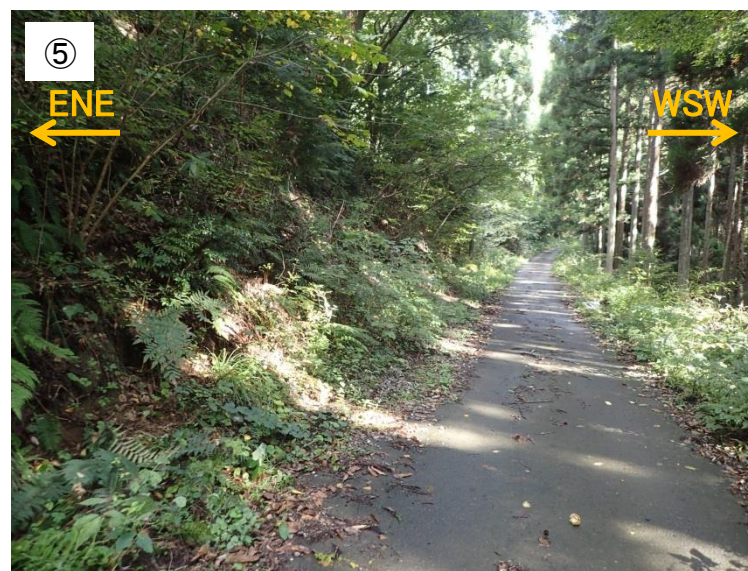


出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



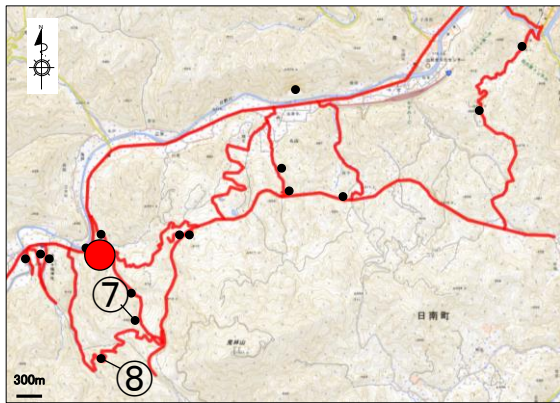
- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点付近の町道脇の法面状況である。
- ・法面は崖錐堆積物が分布する。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点付近の谷の上流部の露頭状況である。
- ・古生代の三郡変成岩や崖錐堆積物が分布する。
- ・火山灰層は認められない。



# 地点7 鳥取県西部(日南町宮内付近)



出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm

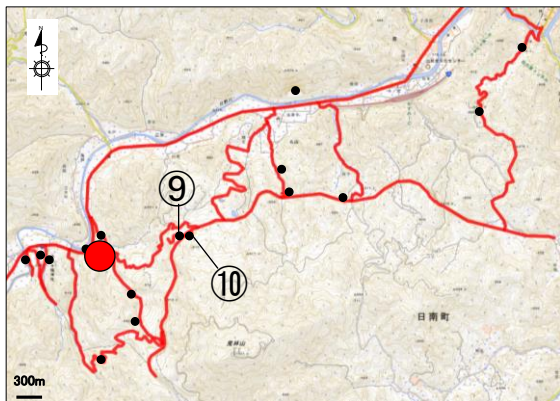


- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点付近の谷の上流部の露頭状況である。
- ・下位から強風化花崗岩, マサ(細粒砂質), クロボクが分布する。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の南方の法面状況である。
- ・強風化花崗岩が分布する。
- ・火山灰層は認められない。





出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

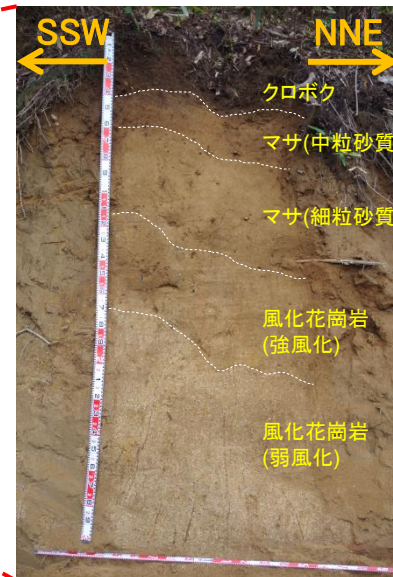
— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の東方の露頭状況である。
- ・下位から風化花崗岩, マサ, クロボクが分布する。
- ・火山灰層は認められない。

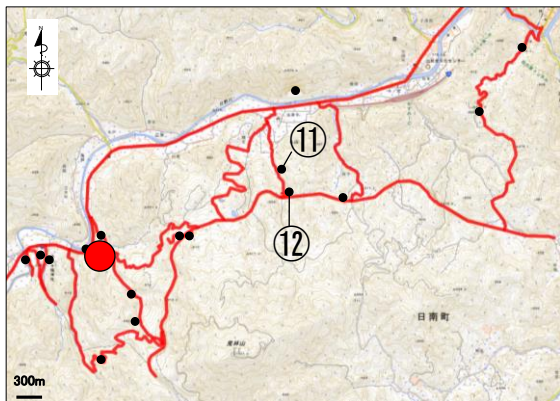


クロボク  
マサ(中粒砂質)  
マサ(細粒砂質)  
風化花崗岩  
(強風化)  
風化花崗岩  
(弱風化)



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の東方の露頭状況である。
- ・下位から角礫混じり粘土層, 腐植土が分布する。
- ・火山灰層は認められない。





出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



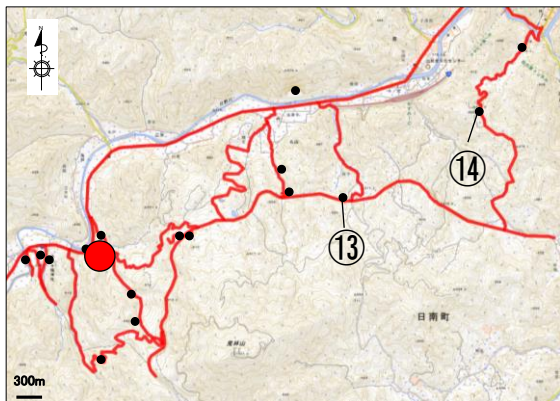
- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の東方の露頭状況である。
- ・下位から角礫混じり粘土層, 腐植土が分布する。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の東方の法面状況である。
- ・花崗岩が分布しており, 火山灰層は認められない。



# 地点7 鳥取県西部(日南町宮内付近)



出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

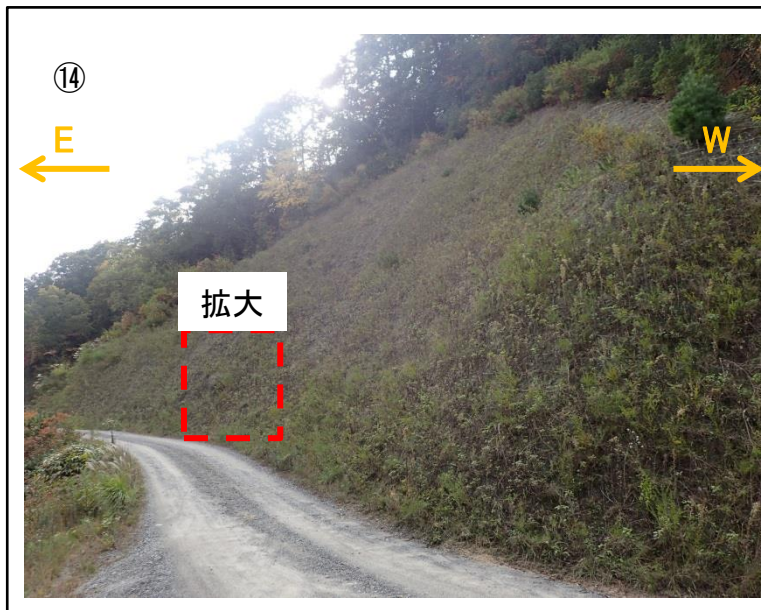
— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



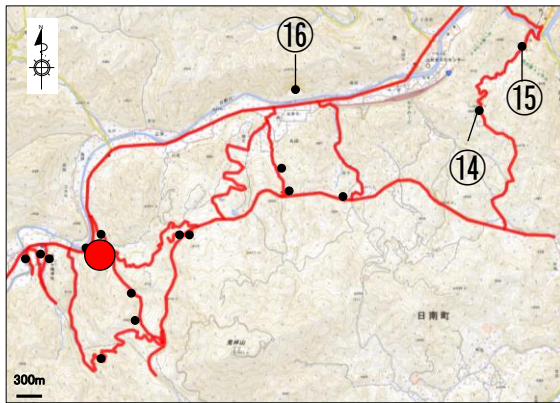
- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の東方の露頭状況である。
- ・花崗岩が分布しており、火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の東方の法面状況である。
- ・落石防止・植生ネットで覆われ、火山灰層は確認できない。



# 地点7 鳥取県西部(日南町宮内付近)



出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の東方の露頭状況である。
- ・写真⑭から⑮までの道路脇の露頭では花崗岩が分布しており、火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚100cm以上報告地点の北東の採石場の露頭状況である。
- ・花崗岩が分布しており、火山灰層は認められない。

・地表地質踏査を行った結果、火山灰層は確認されなかったことから、服部(1978)が報告している鳥取県西部(日南町宮内付近)の第四紀火山灰層は、当該地点の代表性を示すような第四紀火山灰層厚ではないものと考えられる。

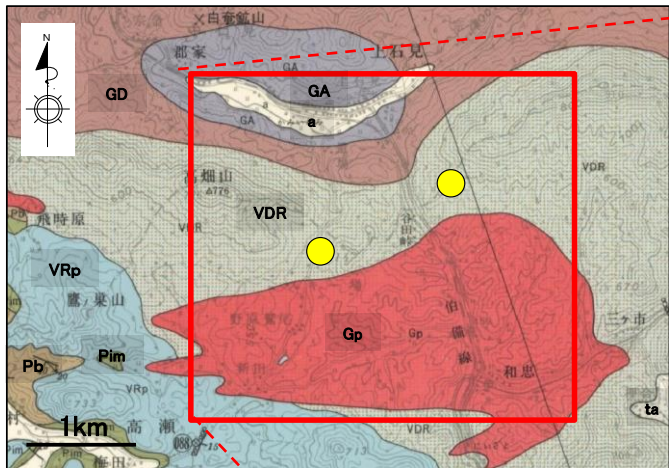


余白



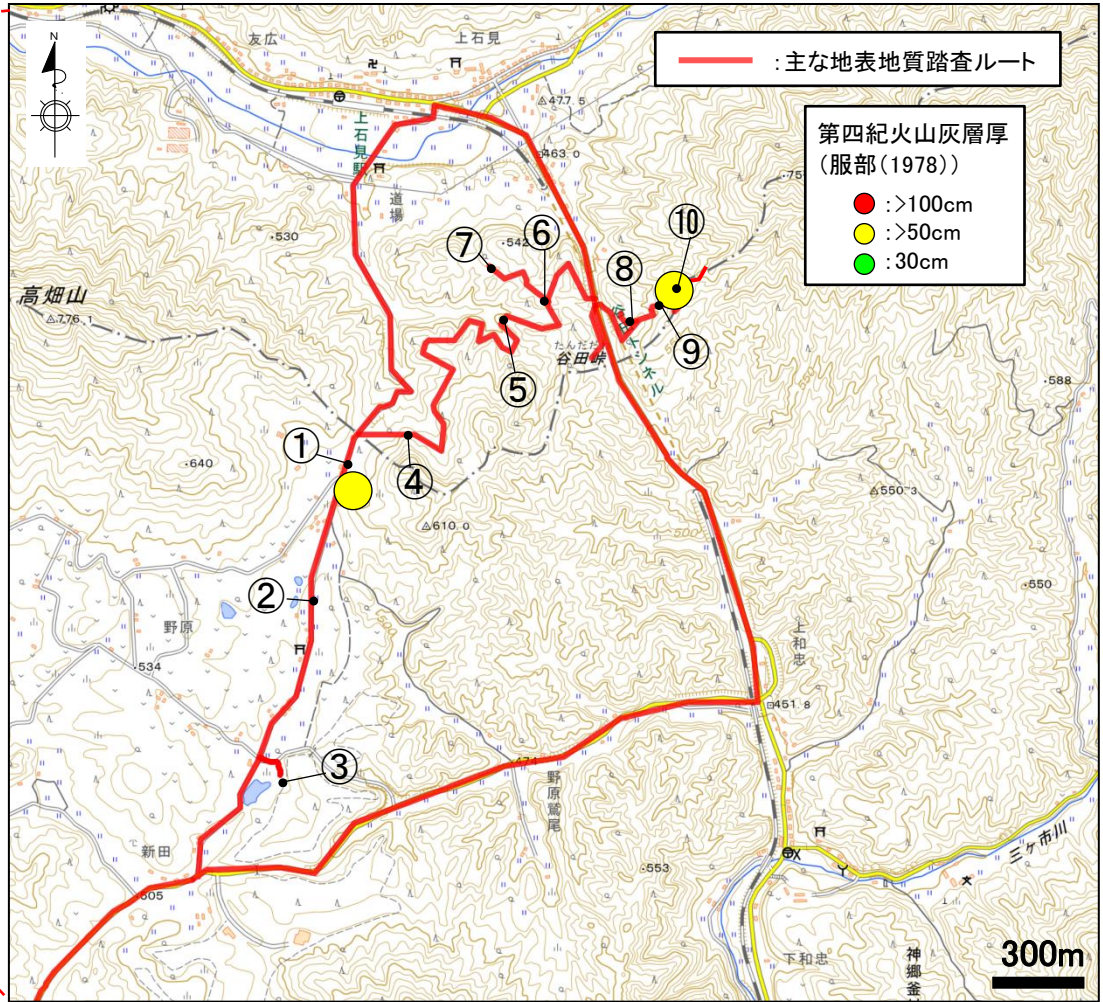
## 鳥取県西部(日南町上石見付近)(地質調査)

・服部(1978)によると、鳥取県西部(日南町上石見付近)において、層厚50cm以上の第四紀火山灰層が2地点で認められるとされている。  
 ・服部(1978)の堆積報告地点を中心に地表地質踏査(右下図に主な地表地質踏査ルート(赤線)を示す)を実施し、第四紀火山灰の分布状況を確認した。



服部(1978)より引用・加筆  
凡例

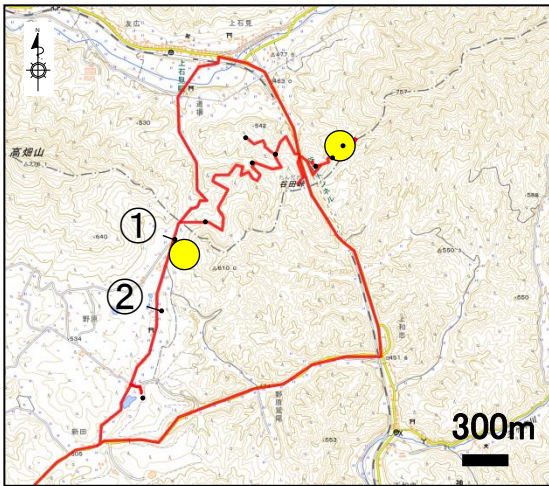
時代	分類		
現世	沖積層	礫・砂・シルトおよび粘土	
更新世	崖錐堆積層	礫・砂・シルトおよび粘土	
白亜紀後期- 晩新世	貫入岩類	花崗斑岩	花崗斑岩、微文象花崗岩および花崗閃緑岩
		花崗閃緑岩	ホルンブレンド黒雲母花崗閃緑岩、ときおり単斜輝石を含む
		はんれい岩	かんらん石・単斜輝石・ホルンブレンドはんれい岩
白亜紀	堆積岩類および火山岩類	千屋火山岩類	デイサイトと流紋岩溶岩およびそれらの凝灰岩・凝灰角礫岩、少量の安山岩を含む
		三国山流紋岩類	おもに流紋岩凝灰岩と凝灰角礫岩からなり、少量のデイサイトを含む
古生代	古生層 (三郡変成岩)	千枚岩	苦鉄質～中世火山岩起源の淡緑色千枚岩
			砂岩・泥岩起源の黒色千枚岩



出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆



# 地点8 鳥取県西部(日南町上石見付近)



— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



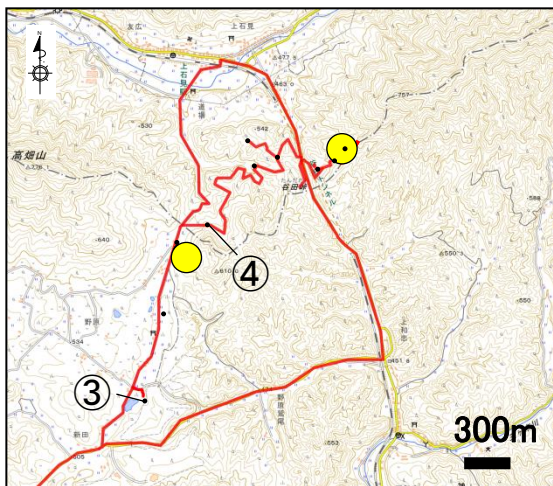
- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告地点付近の状況である。
- ・服部(1978)によると、白亜紀のデイサイト及び流紋岩が分布するとされている。
- ・現在は、荒廃農地となっている。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告地点より南方の露頭状況である。
- ・服部(1978)によると、白亜紀後期の花崗斑岩が分布するとされている。
- ・耕作地が広がっている。



# 地点8 鳥取県西部(日南町上石見付近)

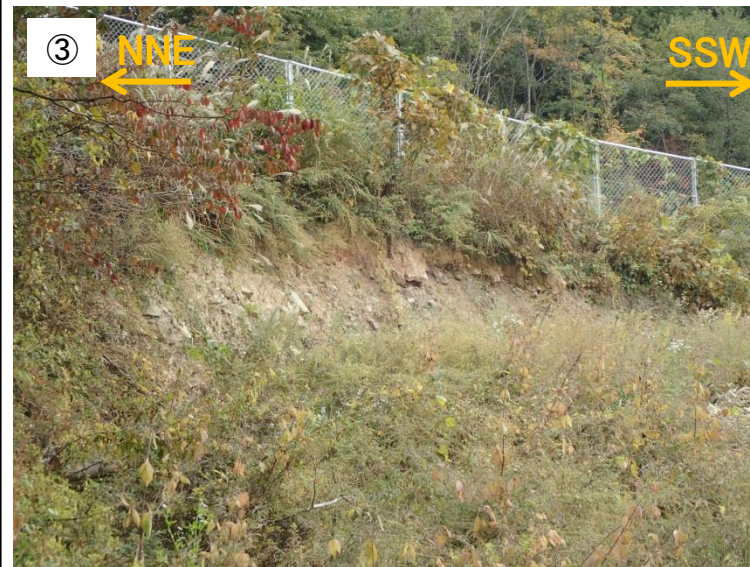


出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



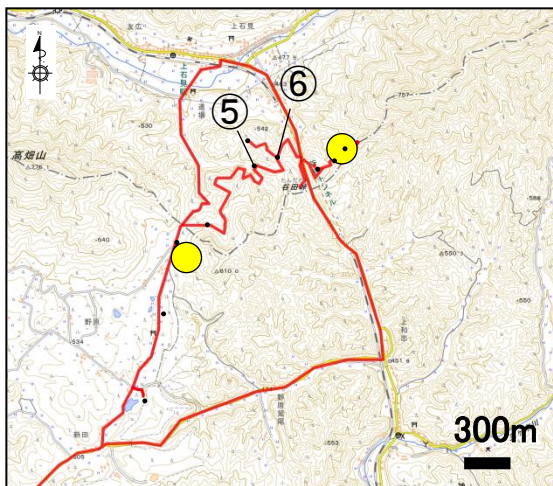
- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告地点よりさらに南方の露頭状況である。
- ・表層付近まで角礫混じり粘土層(φ 5~40cmの角礫)が認められる。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告地点より東方の露頭状況である。
- ・下位からマサ, クロボクが分布する。
- ・火山灰層は認められない。



# 地点8 鳥取県西部(日南町上石見付近)



出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



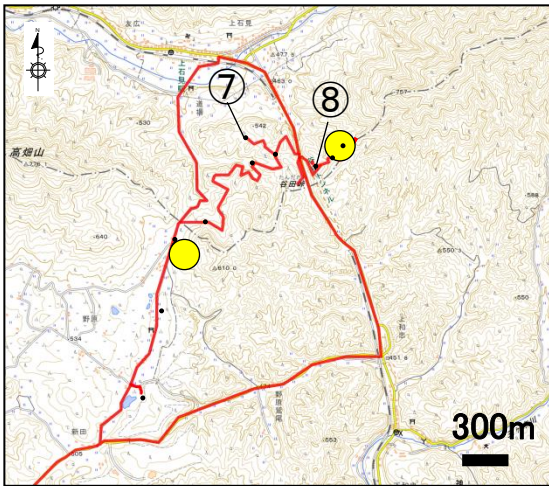
- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告の2地点の中間に位置する林道の露頭状況である。
- ・花崗岩が分布し、表層付近には花崗岩の角礫混じり粘土層が認められる。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告の2地点の中間に位置する林道の露頭状況である。
- ・下位からデイサイト、角礫混じり粘土層、クロボクが分布する。
- ・火山灰層は認められない。



# 地点8 鳥取県西部(日南町上石見付近)



出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm

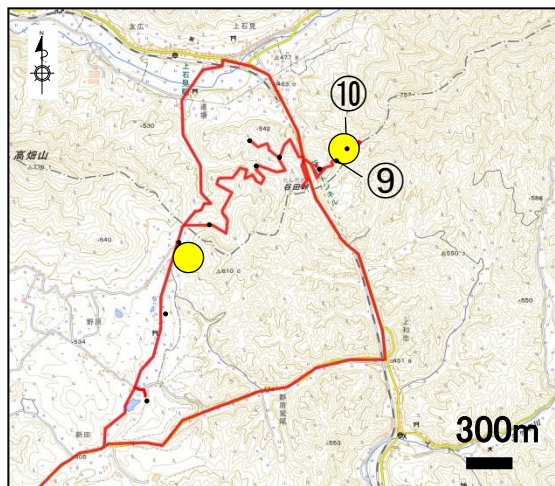


- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告の2地点の間に位置する林道の露頭状況である。
- ・下位から角礫混じり粘土, 腐植土が分布する。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告地点より西方の露頭状況である。
- ・下位からデイサイト, 角礫混じり粘土, 腐植土が分布する。
- ・火山灰層は認められない。





出典：国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

— : 主な地表地質踏査ルート

第四紀火山灰層厚  
(服部(1978))

- : >100cm
- : >50cm
- : 30cm



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告地点より南西の露頭状況である。
- ・表層付近まで角礫混じり粘土層(φ 5~40cmの角礫)が認められる。
- ・火山灰層は認められない。



- ・服部(1978)による第四紀火山灰層厚50cm以上報告地点付近の露頭状況である。
- ・下位から風化花崗岩, マサ, クロボクが分布する。
- ・火山灰層は認められない。



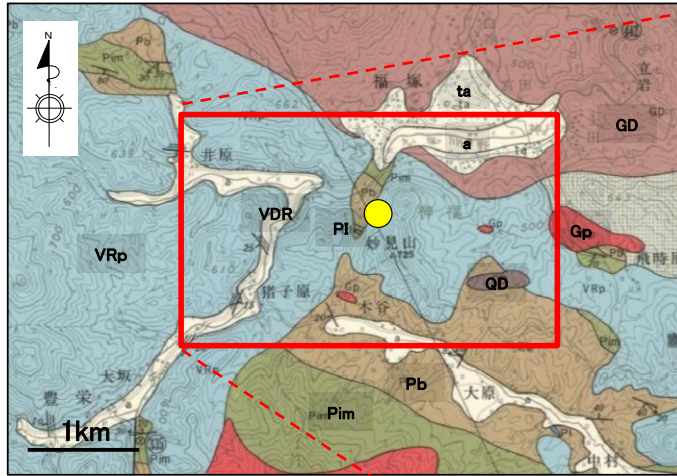
・地表地質踏査を行った結果, 火山灰層は確認されなかったことから, 服部(1978)が報告している鳥取県西部(日南町上石見付近)の第四紀火山灰層は, 当該地点の代表性を示すような第四紀火山灰層厚ではないものと考えられる。



# 地点9 鳥取県西部(日南町神福付近)

## 鳥取県西部(日南町神福付近)(地質調査)

・服部(1978)によると、鳥取県西部(日南町神福付近)において層厚50cm以上の第四紀火山灰層が1地点で認められるとされている。  
 ・服部(1978)の堆積報告地点を中心に地表地質踏査(右下図に主な地表地質踏査ルート(赤線)を示す)を実施し、第四紀火山灰の分布状況を確認した。



凡例 服部(1978)より引用・加筆



出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

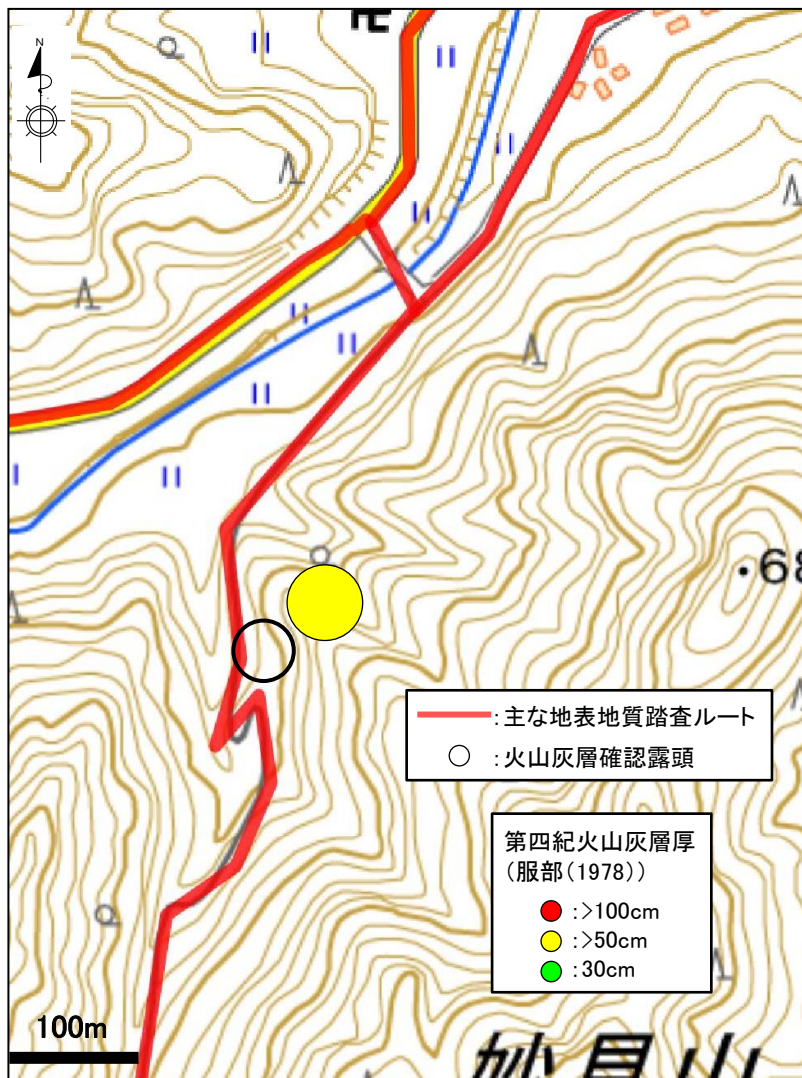
・服部(1978)の堆積報告地点付近は、妙見山の北西斜面に分布する谷の斜面遷緩線付近に位置する。

時代	分類	凡例	説明	
現世	沖積層		礫・砂・シルトおよび粘土	
更新世	崖錐堆積層		礫・砂・シルトおよび粘土	
白亜紀後期- 暁新世	貫入岩類		花崗斑岩、微文象花崗岩および花崗閃緑岩	
			ホルンブレンド黒雲母花崗閃緑岩、ときおり単斜輝石を含む	
			石英閃緑岩・閃緑岩および閃緑玢岩	
白亜紀	堆積岩類および火山岩類		デイサイトと流紋岩溶岩およびそれらの凝灰岩・凝灰角礫岩、少量の安山岩を含む	
			おもに流紋岩凝灰岩と凝灰角礫岩からなり、少量のデイサイトを含む	
古生代	古生層(三郡変成岩)	千枚岩		石炭岩(レンズ状)
				苦鉄質～中世火山岩起源の淡緑色千枚岩
				砂岩・泥岩起源の黒色千枚岩



## 地点9 鳥取県西部(日南町神福付近)

- ・当該地域で火山灰を確認した谷沿いの林道斜面には基盤岩の流紋岩、それらの角礫を含む土石流堆積物や崖錐堆積物が分布するが、下図に○で示した北西斜面の谷の合流部付近に局所的に分布する火山灰層を確認した。
- ・確認した火山灰層は、その位置関係から服部(1978)の報告地点の火山灰層に対応すると考えられる。



火山灰層露頭周辺の状況



露頭全景

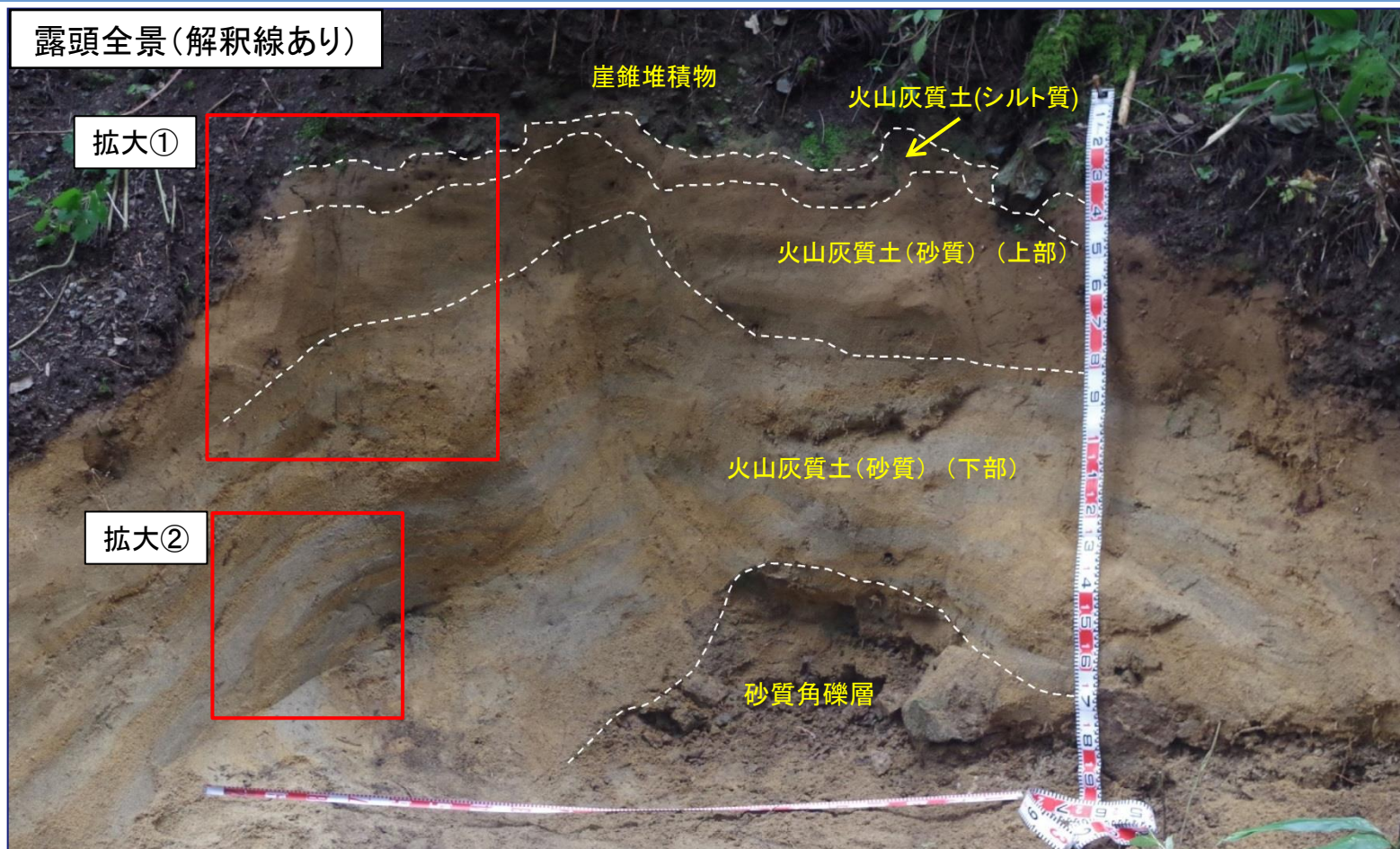




露頭全景(解釈線なし)

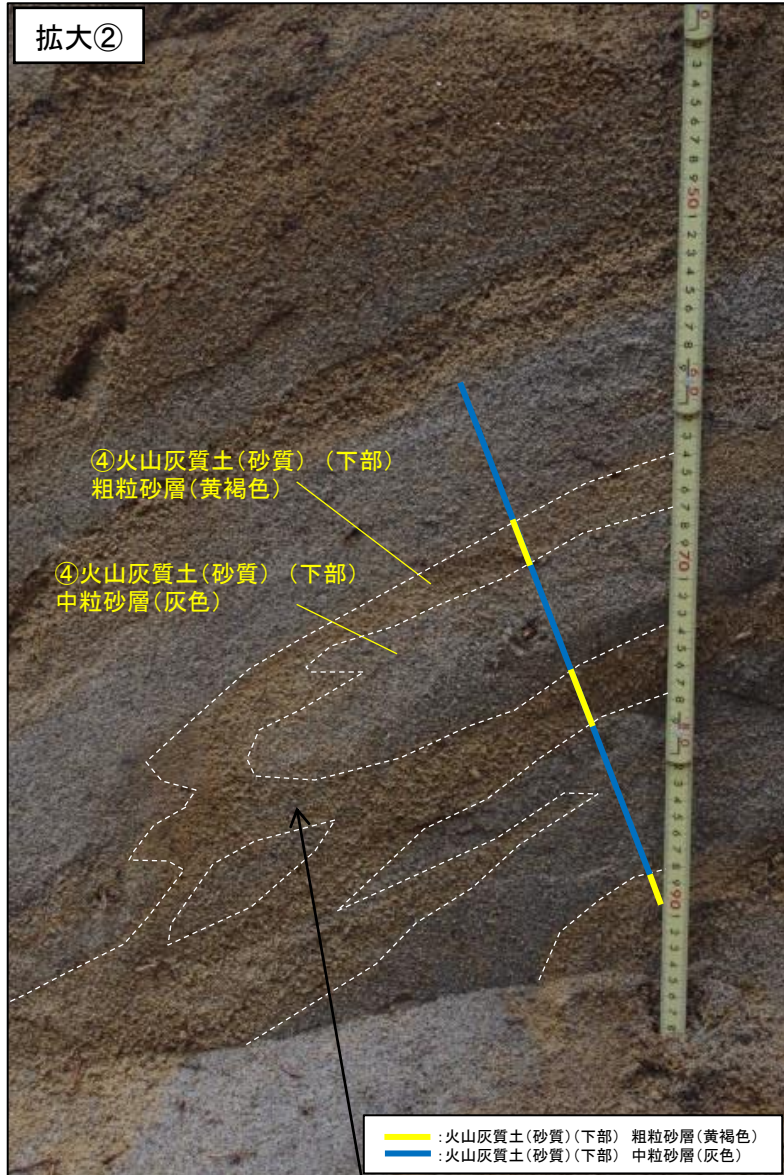
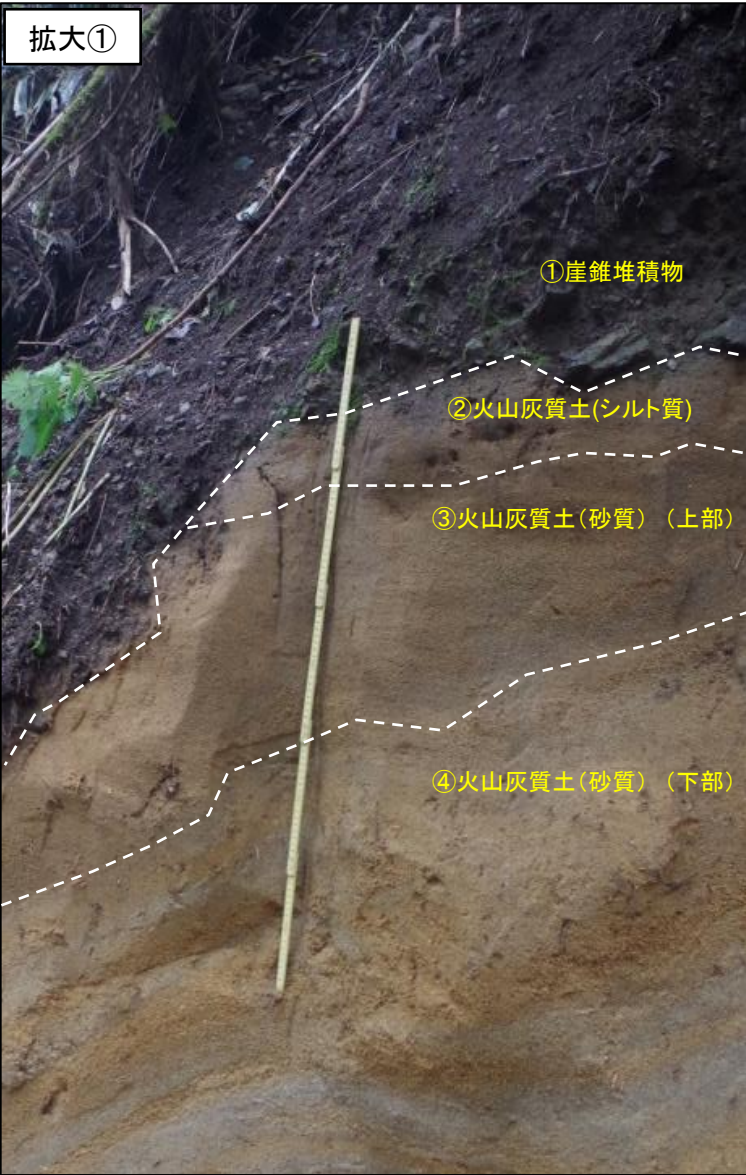






- ・下位から砂質角礫層、火山灰質土(砂質)、火山灰質土(シルト質)、崖錐堆積物を確認した。
- ・服部(1978)は火山灰層が崖錐堆積物に覆われる露頭もみられると報告しており、当該地域の性状と整合する。
- ・火山灰質土(砂質)は、大局的には、色調差が不明瞭な粗粒砂と中粒砂の互層からなる上部、色調差が明瞭な粗粒砂と中粒砂の互層からなる下部の2層に分けられ、いずれの層も二次運搬されたと考えられる層状の堆積構造が認められる。
- ・当該地点で確認した火山灰層は、斜面の谷の合流部付近に局所的に分布していること、また、二次運搬されたと考えられる性状を示していることから、層相と層序の関係が不明確であり、火山灰層の起源を特定できなかった(三瓶浮布テフラか否かも不明)。
- ・次頁の観察結果に基づき層相から上図のとおり地層区分を行ったが、当該地点で確認された火山灰層と岡山県北西部(新見市神郷)で確認された三瓶浮布テフラとの相違を把握するために、実体顕微鏡観察及び帯磁率測定を行った。



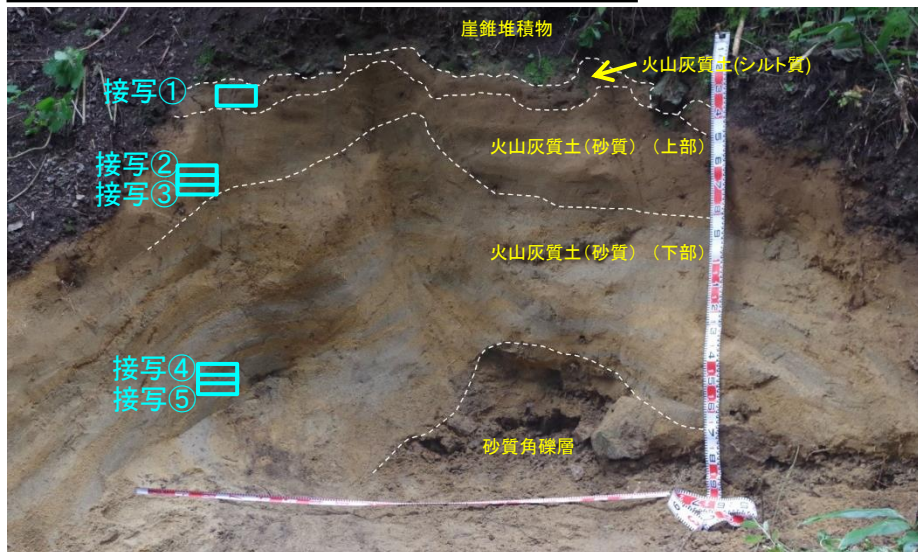


- ①崖錐堆積物  
(層厚30cm以上)  
基質支持で大礫～細礫を含む。  
下位層を不整合に覆う。
- ②火山灰質土(シルト質)  
(層厚5～10cm)  
シルト主体で暗褐灰色を呈する。  
下位層とは漸移的である。
- ③火山灰質土(砂質)(上部)  
(層厚40～50cm)  
粗粒砂層(淡黄褐色)と中粒砂層(淡黄灰色)の互層で、  
両方の層にφ1mm程度の軽石が含まれ、色調差は不明瞭。  
下位層とは明瞭な境界をなす。
- ④火山灰質土(砂質)(下部)  
(層厚60～70cm)  
粗粒砂層(黄褐色)と中粒砂層(灰色)の互層で、粗粒砂層にのみφ1～3mmの軽石が含まれ、色調差は明瞭。  
単層の厚さは10cm以下で一部指交関係が認められる。  
下位層とは明瞭な境界をなす。
- 砂質角礫層  
(層厚30cm以上)  
基質支持(一部礫支持)で巨礫～細礫からなる角礫層。  
礫は亜角礫～角礫で淘汰は悪い。

・火山灰質土(砂質)(下部)の粗粒砂層及び中粒砂層の単層の厚さはそれぞれ10cm以下で、一部指交関係が認められる。



## 接写写真及び実体顕微鏡観察結果



### ラベル凡例

qt: 石英 pl: 斜長石 bi: 黒雲母 ho: 普通角閃石  
mag: 磁鉄鉱 pum: 軽石 lit: 石質岩片

### 接写① 火山灰質土(シルト質)



### 実体顕微鏡写真

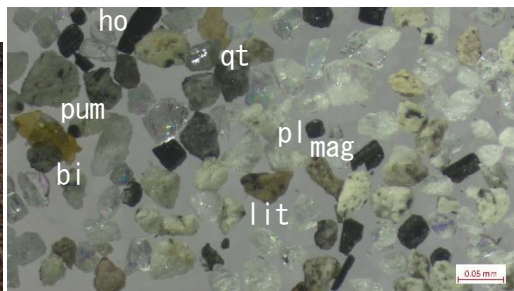
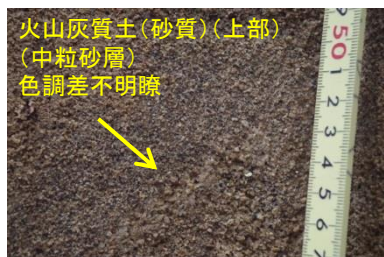


- ・シルト主体の層相を示し、火山ガラスを少量含む。
- ・色調は暗褐灰色を呈する。
- ・下位層とは漸移的である。

- ・下位の火山灰質土(砂質)に含まれる鉱物に比べて粒径が小さい。
- ・軽石を含む。

### 接写② 火山灰質土(砂質)(上部) (中粒砂層)

### 実体顕微鏡写真

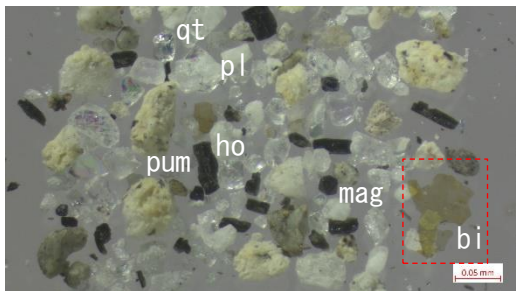
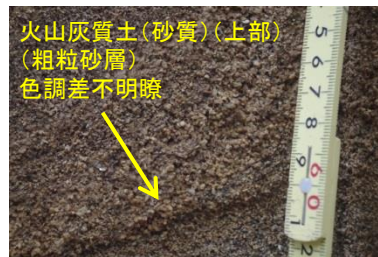


- ・中粒砂主体の層相を示し、石英・長石・黒雲母・角閃石を多く含む。
- ・色調は淡黄灰色を呈する。
- ・φ 1mm程度の軽石を含む。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。

- ・磁鉄鉱、軽石及び石質岩片を多く含む。
- ・黒雲母は剥離し、積層構造をほとんど残さない。
- ・角閃石は破断し、短柱状である。

### 接写③ 火山灰質土(砂質)(上部) (粗粒砂層)

### 実体顕微鏡写真



- ・粗粒砂主体の層相を示し、φ 1mm程度の軽石を多く含む。
- ・色調は淡黄褐色を呈する。
- ・有色鉱物の含有量は砂質火山灰(下部)より多い。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。

- ・軽石のサイズが鉱物片に対し有意に大きい。
- ・黒雲母は剥離し、積層構造をほとんど残さない。



# 地点9 鳥取県西部(日南町神福付近)

## ・接写写真及び実体顕微鏡観察結果

接写④ 火山灰質土(砂質)(下部)  
(中粒砂層)



実体顕微鏡写真



- ・中粒砂主体の層相を示し、石英・長石・黒雲母・角閃石を多く含む。
- ・色調は灰色を呈する。
- ・軽石は含まれない。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。

- ・磁鉄鉱が多く、石質岩片を含むが軽石は含まれない。
- ・黒雲母は剥離し、積層構造をほとんど残さない。
- ・角閃石は破断し、短柱状である。

接写⑤ 火山灰質土(砂質)(下部)  
(粗粒砂層)



実体顕微鏡写真



- ・粗粒砂主体の層相を示し、φ 1~3mm程度の軽石を多く含む。
- ・色調は黄褐色を呈する。
- ・有色鉱物の含有比は低い。
- ・下位層とは明瞭な境界をなす。

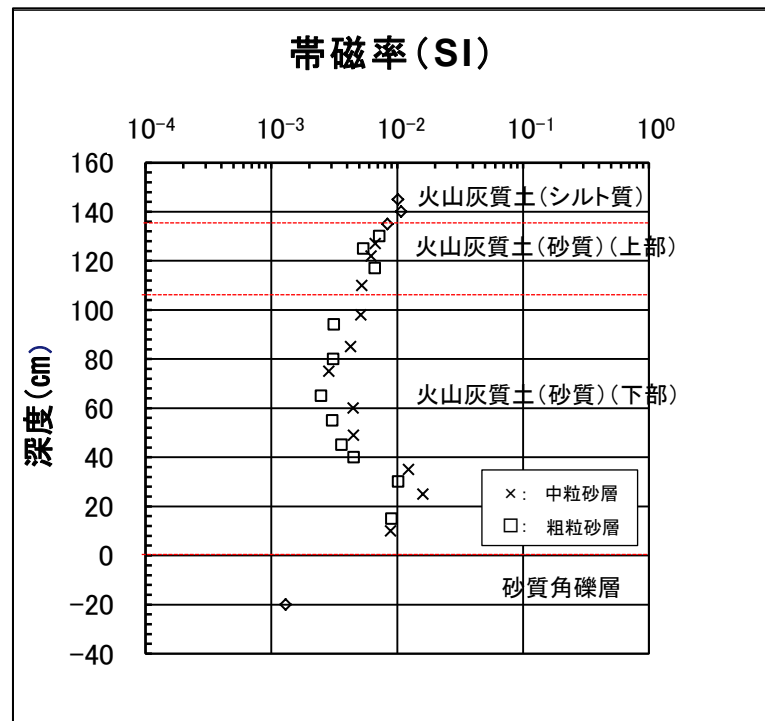
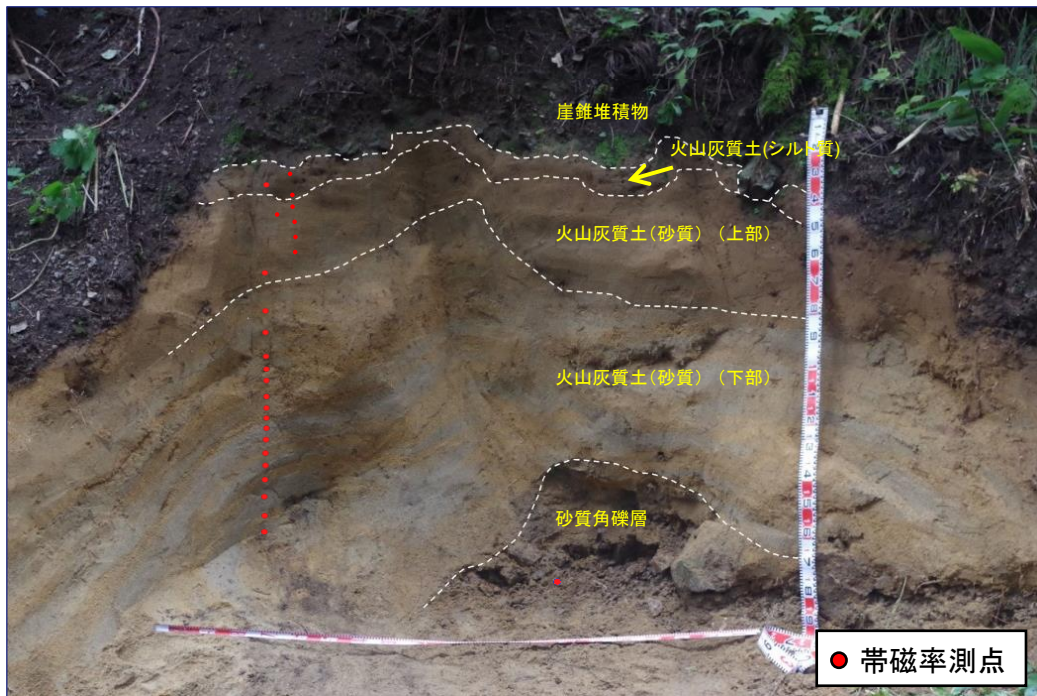
- ・軽石のサイズが鉱物片に対し有意に大きい。
- ・黒雲母は剥離し、積層構造をほとんど残さない。

### ラベル凡例

- qt : 石英
- pl : 斜長石
- bi : 黒雲母
- ho : 普通角閃石
- mag : 磁鉄鉱
- pum : 軽石
- lit : 石質岩片

- ・火山灰質土(砂質)に含まれる黒雲母は剥離し、積層構造をほとんど残していない。また、火山灰質土(砂質)の中粒砂層に含まれる角閃石の一部は破断し、短柱状である。これらの黒雲母、角閃石の形状は、二次運搬の過程で摩耗した結果形成されたものと考えられ、原位置での堆積物ではないと考えられる。
- ・火山灰質土(砂質)の下部の灰色を呈する中粒砂層では、軽石が含まれていないことから、火山灰質土(砂質)の下部の明瞭な色調差は軽石の有無によるものと考えられる。
- ・火山灰質土(砂質)の中粒砂層は粗粒砂層に比べて磁鉄鉱が多く含まれる傾向が認められる。





- 火山灰質土(砂質)の帯磁率の範囲は $10^{-2} \sim 10^{-3}$ SIのオーダーであり、深度方向へ緩やかに変化する。
- 火山灰質土(砂質)は、前述のとおり粗粒砂と中粒砂の互層からなるが、両層の帯磁率を比較した結果、中粒砂層の方が若干高い値を示し、その傾向は火山灰質土(砂質)の下部で顕著である。この結果は、顕微鏡観察で粗粒砂層に比べて中粒砂層に磁鉄鉱が多く含まれていることと整合する。
- 岡山県北西部(新見市神郷(P2))において降灰層厚として評価した三瓶浮布テフラの帯磁率( $10^{-2}$ SIのオーダー)では、ほぼ一定の値を示すのに対し、本火山灰質土(砂質)は最下部で $10^{-2}$ SI程度を示すものの、それより上位では $10^{-3}$ SIのオーダーとやや低い値を示す。この結果は再堆積に由来した特徴と考えられる。



## 地点9 鳥取県西部(日南町神福付近)

- ・服部(1978)が第四紀火山灰層の堆積を報告している鳥取県西部(日南町神福付近)において地表地質踏査を実施した。
- ・地質調査の結果, 服部(1978)の報告地点周辺の林道沿いの斜面には基盤岩の流紋岩, それらの角礫を含む土石流堆積物や崖錐堆積物が分布しており, 局所的に分布する火山灰層を確認した。
- ・火山灰層を確認した露頭は下位から砂質角礫層, 火山灰質土(砂質)(上部・下部), 火山灰質土(シルト質), 崖錐堆積物からなり, 服部(1978)の報告内容(火山灰層が崖錐堆積物に覆われる露頭もみられる)と整合する。
- ・火山灰質土(砂質)を詳細観察した結果, 二次運搬されたと考えられる層状の堆積構造が認められる。また, 実体顕微鏡観察の結果, 黒雲母の剥離や角閃石の破断が認められる。さらに, 岡山県北西部(新見市神郷(P2))において降灰層厚として評価した三瓶浮布テフラの帯磁率( $10^{-2}$ SIのオーダー)では, ほぼ一定の値を示すのに対し, 本火山灰質土(砂質)は最下部で $10^{-2}$ SI程度を示すものの, それより上位では $10^{-3}$ SIのオーダーとやや低い値を示す。これらの結果は再堆積に由来した特徴と考えられる。



- ・服部(1978)が報告している鳥取県西部(日南町神福付近)で確認された火山灰層は, 再堆積に由来した特徴を示しており, 降灰層厚として評価できない。



## 三瓶浮布テフラの降灰層厚に関する文献調査及び地質調査(まとめ)

### 【文献調査結果】

- ・三瓶浮布テフラの降灰層厚に関する文献調査を行い、三瓶山からの距離と層厚との関係を整理した。
- ・三瓶山から敷地まで距離が55kmであることを踏まえ、三瓶山から敷地に相当する範囲の降灰層厚と敷地における降灰層厚の算定式を比較した結果、広島県北東部(道後山周辺)及び岡山県北西部(新見市神郷)が降灰層厚の算定式を上回っていることが確認された。

### 【地質調査結果】

- ・広島県北東部(道後山周辺)(地点4・5)における野村(1987)による三瓶浮布テフラの層厚70cmは、当該地点の代表性を示す層厚とは考え難いことから参考扱いとし、当該地域における三瓶浮布テフラの降灰層厚は、地質調査によって確認した層厚30cmを採用して評価する。
- ・岡山県北西部(新見市神郷)(地点6)における林・三浦(1987)による三瓶浮布テフラの層厚155cmについては、当該地点の代表性を示す層厚とは考え難いことから参考扱いとし、林道沿い(P1, P2及びP3)において確認した最大層厚40cmを採用して評価する。なお、服部(1978)による新見市神郷の堆積報告地点については、地表地質踏査の結果、林道沿い(P1, P2及びP3)において三瓶浮布テフラが認められ、その層厚は最大40cmであることから、三瓶浮布テフラの可能性が高いと考えられる。
- ・鳥取県西部(日南町神福付近)(地点9)の服部(1978)による堆積報告地点付近において、火山灰層を確認したが、再堆積に由来した特徴を示しており、降灰層厚として評価できない。なお、当該火山灰層は、層相と層序の関係が不明確であり、火山灰層の起源を特定できなかった(三瓶浮布テフラか否かも不明)。
- ・岡山県北西部(新見市神郷)(地点6)及び鳥取県西部(日南町神福付近)(地点9)を除く、服部(1978)の5万分の1図幅「上石見地域の地質」によるその他の堆積報告地点については、幅広く地表地質踏査を実施し、火山灰層は確認されなかったことから、服部(1978)が報告している第四紀火山灰層は、当該地点の代表性を示すような第四紀火山灰層厚ではないものと考えられる。

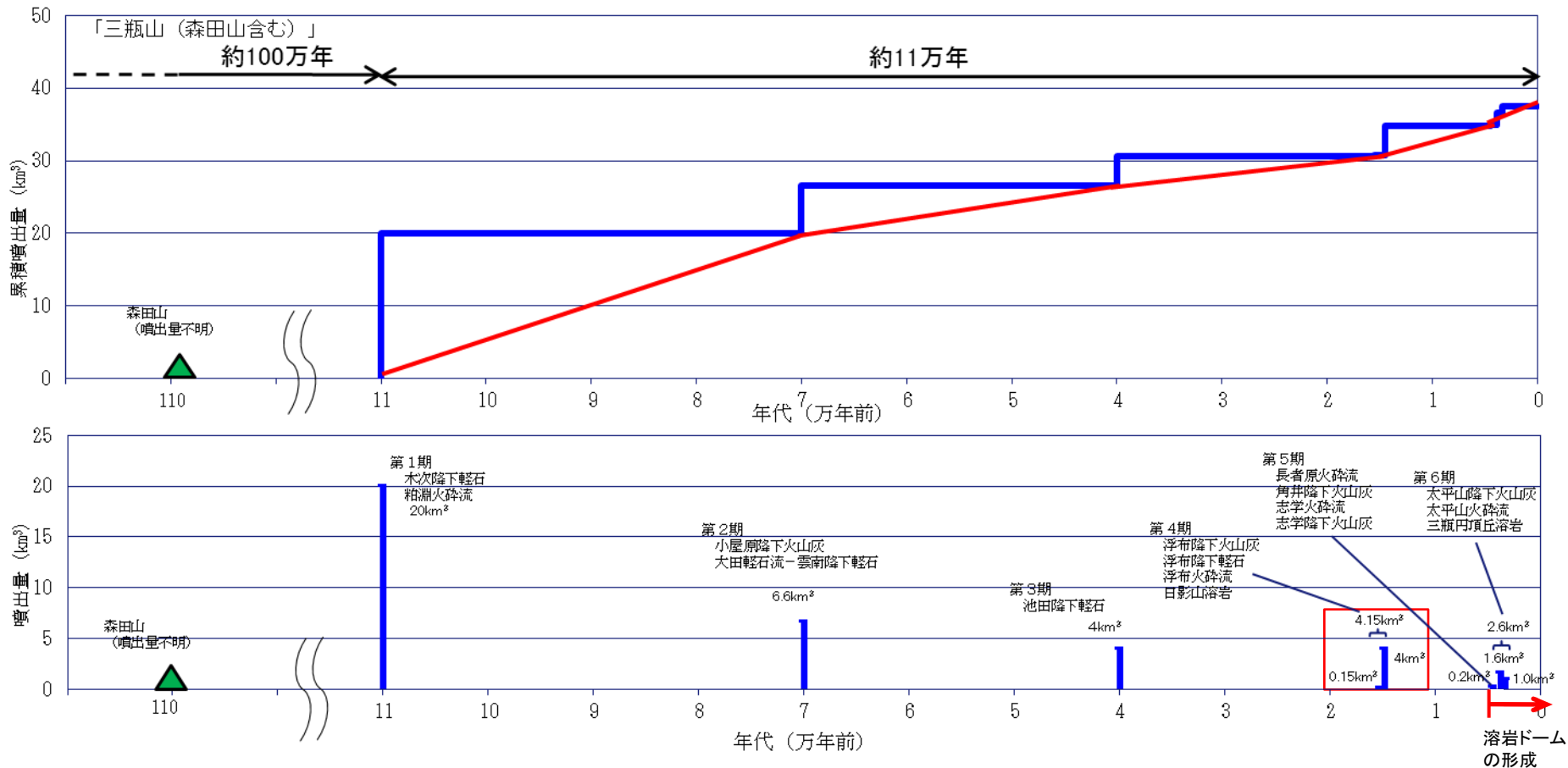


- ・広島県北東部(道後山周辺)の層厚70cm及び岡山県北西部(新見市神郷)の層厚155cmは、当該地点の代表性を示す層厚とは考え難いことから参考扱いとし、地質調査結果による層厚評価に基づき、敷地における降灰層厚の算定式の妥当性確認を行う。



1. 第四紀火山について(三瓶山・大山を除く)
2. 敷地周辺(敷地を中心とする半径約30km範囲)の火山灰層厚に関する地質調査
3. 三瓶浮布テフラの降灰層厚に関する文献調査及び地質調査
4. **三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模について**
5. DNPの噴出規模の算出に関する降灰層厚情報の補足資料
6. DNP等層厚線図面積の検証について
7. 防災科学技術研究所による地震波速度構造モデルについて
8. 既往文献による降下火砕物の体積算出方法の概要について
9. 火山灰シミュレーションにおける大気パラメータ及び噴煙柱高度の考え方について
10. 大山生竹テフラの火山灰シミュレーション結果について
11. その他
  - ・噴火の規模について
  - ・火砕岩の分類





(町田・新井(2011), 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999), 須藤ほか(2007)<sup>(73)</sup>に基づき作成)

- ・三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模については、複数の知見が報告されていることから、これらの知見を整理し、噴火規模の妥当性を確認する。



# 三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模の妥当性確認

・三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模に関する知見として、①【採用値】第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量 $4.15\text{km}^3$ 、②須藤ほか(2007)三瓶浮布降下軽石:噴出量 $74.77\text{km}^3$ 、③須藤ほか(2007)三瓶浮布:噴出量 $6.20\text{km}^3$ が報告されている。これらの噴出量に関する知見を整理し、三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模の妥当性を確認する。

## ①【採用値】 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量 $4.15\text{km}^3$

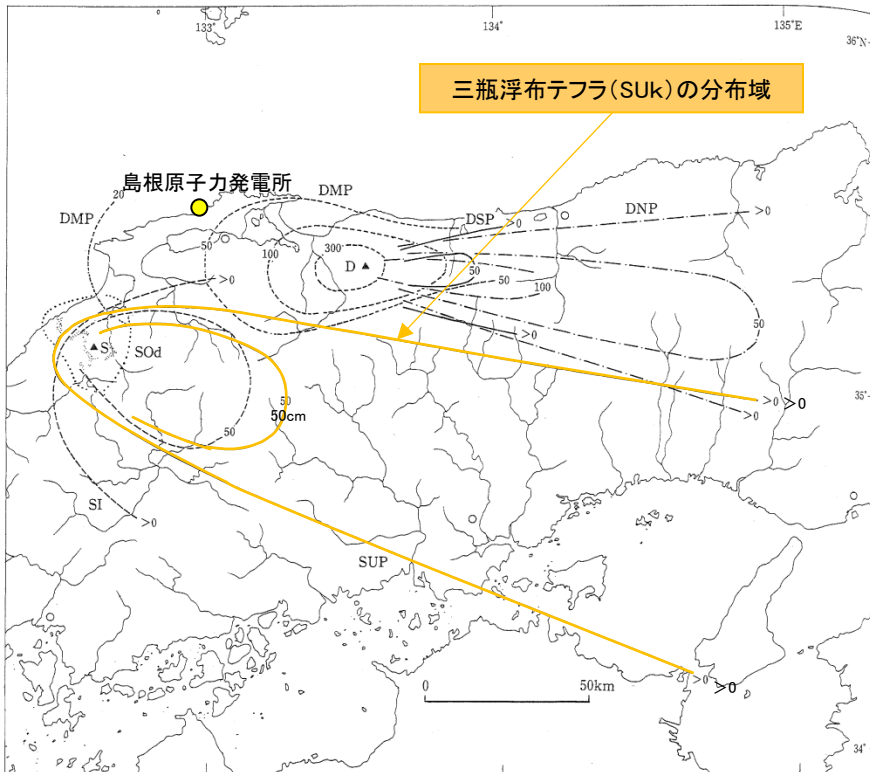


図 3.2-1 中国地方の第四紀後期主要テフラの等層厚線図。  
 SUP 三瓶浮布<sup>1)など</sup> SI 三瓶池田<sup>1)など</sup> Sod 三瓶大田<sup>1)など</sup> (点線内が pfl 分布域)  
 DSP 大山関金<sup>2,3)</sup> DNP 大山生竹<sup>2,3)</sup> DMP 大山松江<sup>2,3)</sup> D:大山, S:三瓶  
 [1] 林・三浦(1987), 2) 町田・新井(1979), 3) 津久井(1984)]

・第四紀火山カタログ編集委員会編(1999)によると、三瓶山を構成する個別火山体は、古三瓶、三瓶火砕流、三瓶カルデラ、上山ベースサージ、日影山、小田火砕流・浮布降下軽石、多根火砕流、北の原溶岩流、三瓶溶岩円頂丘、奥ノ湯火砕流、太平山火砕流・降下火山灰に分類されている。

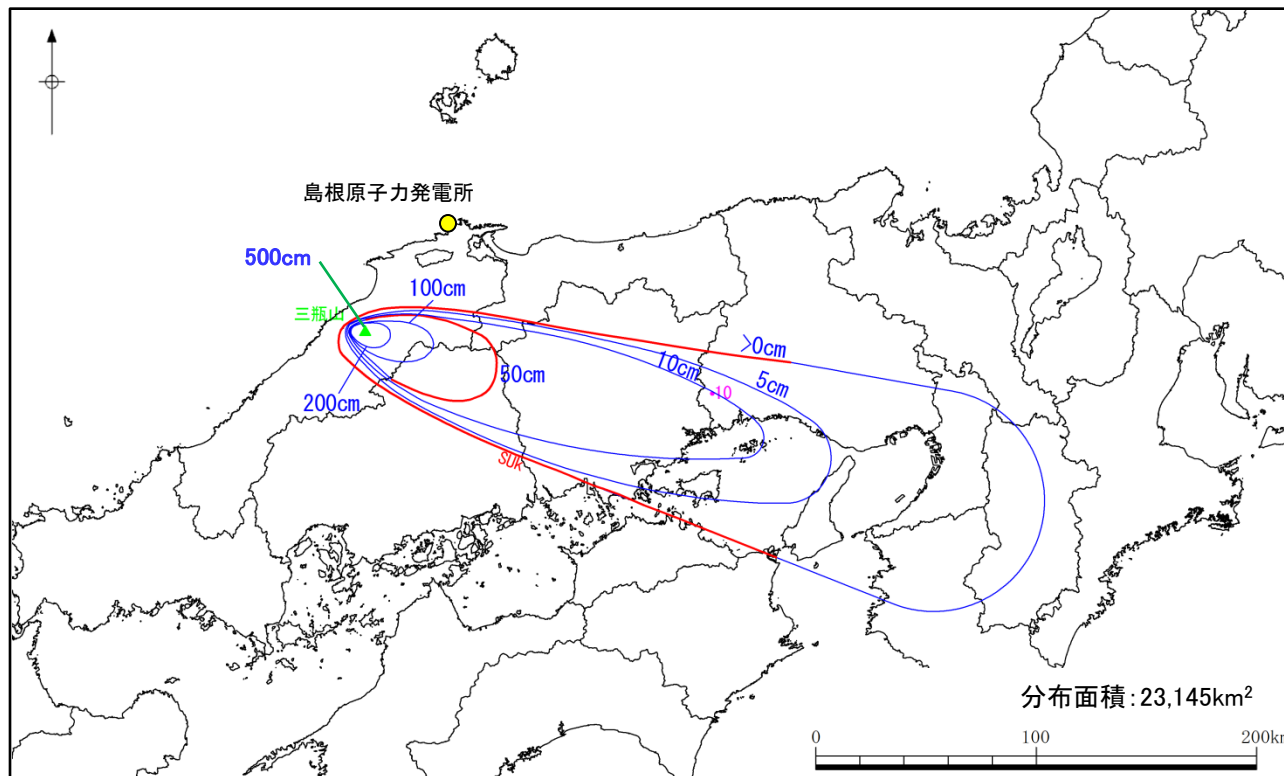
・三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模は、日影山(溶岩) $0.15\text{km}^3$ と小田火砕流・浮布降下軽石 $4\text{km}^3$ を足し合わせた $4.15\text{km}^3$ と評価した。

・なお、第四紀火山カタログ編集委員会編(1999)は、これらの個別火山体の噴火規模について具体的な算定根拠を示していないが、小田火砕流・浮布降下軽石の噴出量 $4\text{km}^3$ は、広域的なテフラ分布に言及した町田・新井(1992)<sup>(74)</sup>に示される等層厚線図を基に見積もられているものと考えられる。



① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量 $4.15\text{km}^3$ の妥当性確認

- ・町田・新井(1992)は、三瓶浮布テフラ(赤穂上部火山灰)が兵庫県南部(赤穂市)で確認された報告(野村・田中(1987))を基に、分布主軸を火山の東南東方向に伸ばす等層厚線図を作成している。また、町田・新井(1992)は、三瓶浮布テフラの給源からの分布距離は200km以上であるとしている。
- ・町田・新井(1992)に示された等層厚線図を基に、概ね近畿地方までの降灰分布を示すように等層厚線を補間することにより、第四紀火山カタログ編集委員会編(1999)に示される噴出量 $4\text{km}^3$ を再現できることを確認した。



【凡例】 単位: cm

- (red line): 町田・新井(1992)による等層厚線
- (blue line): 補間した等層厚線
- (pink dot): 野村・田中(1987)による降灰報告地点 (数字は降灰厚さ(cm))

・三瓶山山頂の最大層厚は、浮布池南岸(三瓶浮布テフラの模式地点)で確認される層厚500cmを考慮した(服部ほか(1983)<sup>(75)</sup>)。

① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量4.15km<sup>3</sup>の妥当性確認

- ・町田・新井(2011)によると, 町田・新井(1992)以降の最近の知見として, 三瓶浮布テフラに対比される火山灰は, 三方低地(竹村ほか(1994)), 琵琶湖(吉川・井内(1991)), 奈良盆地(吉川ほか(1986)等), 神戸市域(加藤ほか(1996)), 赤穂市域(野村・田中(1987))及び岡山県北部(細池湿原)(野村ほか(1995))に認められることから, 町田・新井(1992)に示される等層厚線図が見直されている。なお, 50cmの等層厚線については見直しを行っていない。
- ・町田・新井(2011)に示される等層厚線図を基に, 最新の文献及び地質調査による降灰厚さを参考に等層厚線を補間し, 三瓶浮布テフラの噴出量を算出する。

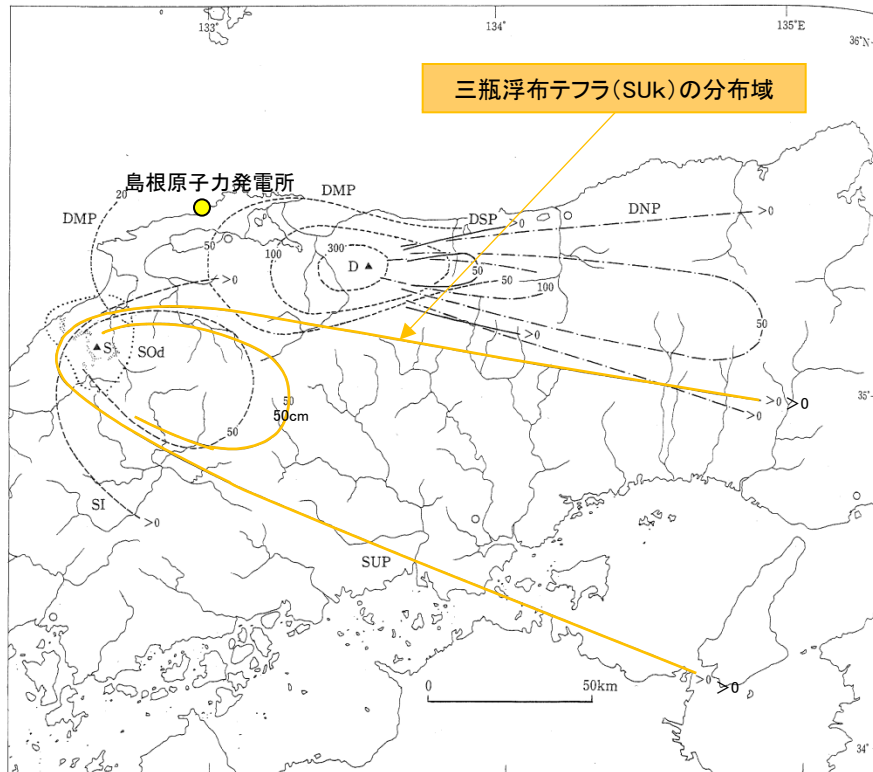


図 3.2-1 中国地方の第四紀後期主要テフラの等層厚線図。  
SUP 三瓶浮布<sup>1)</sup>など SI 三瓶池田<sup>1)</sup>など SOD 三瓶大田<sup>1)</sup>など (点線内が pft 分布域)  
DSP 大山関金<sup>2,3)</sup> DNP 大山生竹<sup>2,3)</sup> DMP 大山松江<sup>2,3)</sup> D: 大山, S: 三瓶  
[1] 林・三浦(1987), 2) 町田・新井(1979), 3) 津久井(1984)]

図 3.2-1 中国地方の後期更新世主要テフラの等層厚線図。  
SUK 三瓶浮布<sup>1,4,7)</sup>など SI 三瓶池田<sup>1)</sup>など SOD 三瓶大田<sup>1)</sup>など (点線内が pft 分布域)  
DSP 大山関金<sup>2,3)</sup> DNP 大山生竹<sup>2,3)</sup> DMP 大山松江<sup>2,3)</sup> D: 大山, S: 三瓶  
[1] 林・三浦(1987), 2) 町田・新井(1979), 3) 津久井(1984), 4) 竹村ほか(1994), 5) 吉川ほか(1986),  
6) Ooi(1992), 7) 加藤ほか(1996)]

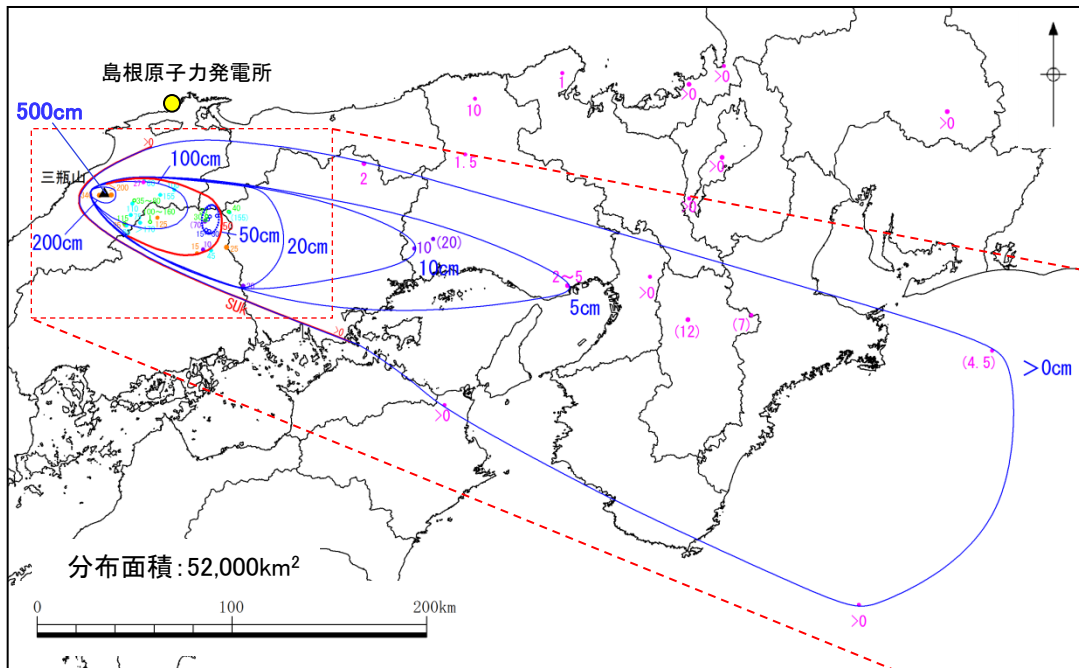
町田・新井(1992)より引用・加筆

町田・新井(2011)より引用・加筆



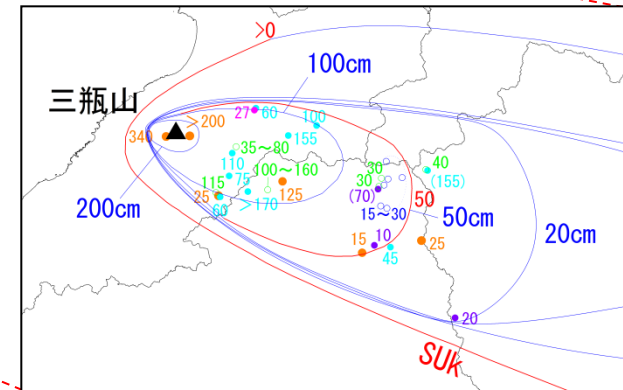
① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量4.15km<sup>3</sup>の妥当性確認

- ・三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模については、Maruyama et al.(2020)によると SUk-UとSUk-Lは別々の噴火イベントとされていること及び SUk-LはSUk-Uと比較し厚く堆積するとされていることを踏まえ、SUk-Uは広い範囲で分布するものの堆積量はわずかであると考えられることから、支配的と考えられるSUk-Lの分布域に着目して噴出量を算出した。
- ・町田・新井(2011)に示された等層厚線図を基に、最新の文献及び地質調査による降灰厚さを包絡するように補間した等層厚線図を作成した。なお、三瓶山から約160km以遠に位置する兵庫県南部(上郡町)、奈良盆地(奈良県田原本町阪手)、三重県西部(池ノ平湿原)及び遠州灘については、給源からの距離に対し、周辺の降灰厚さと比較し突出して層厚が大きく逆転が生じていることから参考扱いとした。
- ・三瓶浮布テフラの噴出量は約4.0km<sup>3</sup>となった。



【凡例】

- : 町田・新井(2011)による等層厚線
  - : 補間した等層厚線(Maruyama et al.(2020)によるSUk-Lの分布域を考慮)
  - : 地質調査地点
  - : 松井・井上(1971)による降灰報告地点
  - : 林・三浦(1987)による降灰報告地点
  - : 野村・田中(1987)による降灰報告地点
  - : 野村(1991)による降灰報告地点
  - : その他(町田・新井(2011), Maruyama et al.(2020)等の文献による降灰報告地点)
  - ( ) : 地質調査結果等により参考扱いとする降灰報告地点 (数字は降灰厚さ(cm))
- ※福岡・松井(2002)による降灰報告地点は三瓶山周辺(三瓶山から約7kmの範囲)のため記載を省略

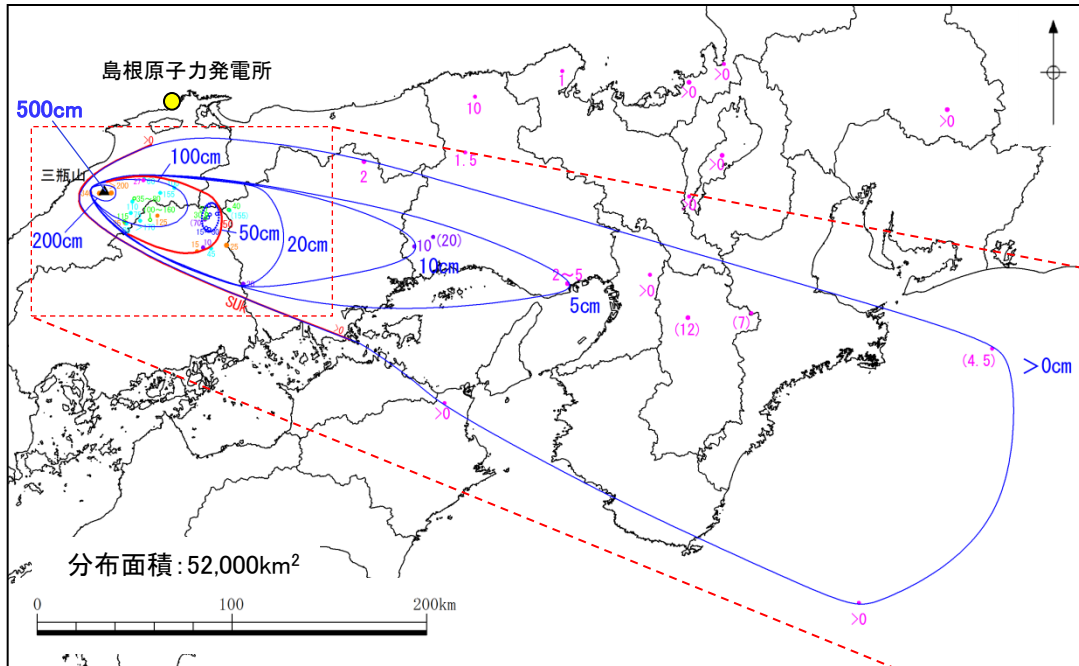


・三瓶山山頂の最大層厚は、浮布池南岸(三瓶浮布テフラの模式地点)で確認される層厚500cmを考慮した(服部ほか(1983))。

- ・文献及び地質調査による降灰厚さを参考に等層厚線を補間した等層厚線図より算出される噴出量約4.0km<sup>3</sup>は、第四紀火山カタログ編集委員会編(1999)に示される小田火砕流・浮布降下軽石の噴出量4km<sup>3</sup>と同程度である。
- ・以上のことから、三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模4.15km<sup>3</sup>(日影山0.15km<sup>3</sup>+小田火砕流・浮布降下軽石4km<sup>3</sup>)は、想定する噴出量として妥当と考えられる。

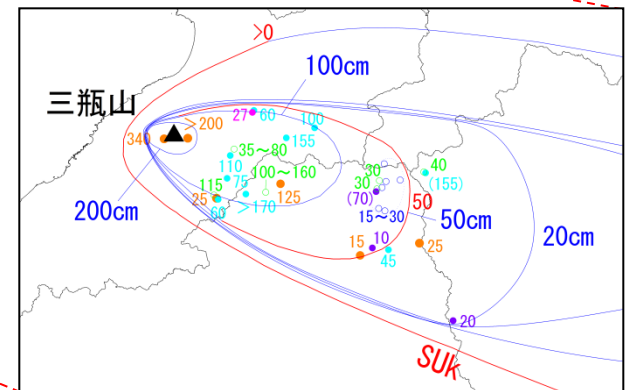
① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量4.15km<sup>3</sup>の妥当性確認

- ・三瓶浮布テフラの噴出規模を算出するため、CADを用いて各等層厚線図の面積を下のとおり算出した。
- ・CADで算出した面積の妥当性を検証するため、三斜法により算出を行い、比較した。
- ・CADで算出した各等層厚線図の面積を利用して体積を算出した。



【凡例】

- : 町田・新井(2011)による等層厚線
  - : 補間した等層厚線(Maruyama et al.(2020)によるSUK-Lの分布域を考慮)
  - : 地質調査地点
  - : 松井・井上(1971)による降灰報告地点
  - : 林・三浦(1987)による降灰報告地点
  - : 野村・田中(1987)による降灰報告地点
  - : 野村(1991)による降灰報告地点
  - : その他(町田・新井(2011), Maruyama et al.(2020)等の文献による降灰報告地点)
  - ( ) : 地質調査結果等により参考扱いとする降灰報告地点 (数字は降灰厚さ(cm))
- ※福岡・松井(2002)による降灰報告地点は三瓶山周辺(三瓶山から約7kmの範囲)のため記載を省略



降灰層厚(cm)	0	5	10	20	50	100	200	500
面積(km <sup>2</sup> )	52,000	9,831	6,113	3,708	1,819	894	80	0
体積(km <sup>3</sup> )	1.41	0.39	0.49	0.56	0.66	0.41	0.08	0.00

合計体積(km <sup>3</sup> )
4.00

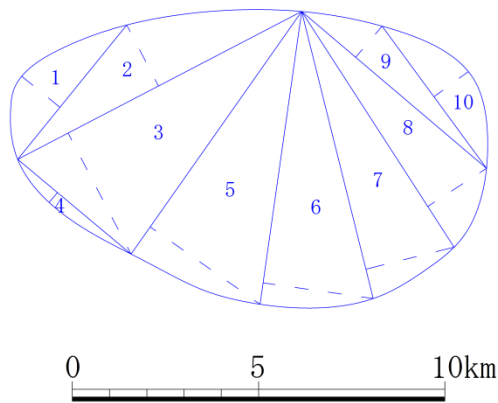
CADにより算出した面積及び算出した面積を利用して得た体積



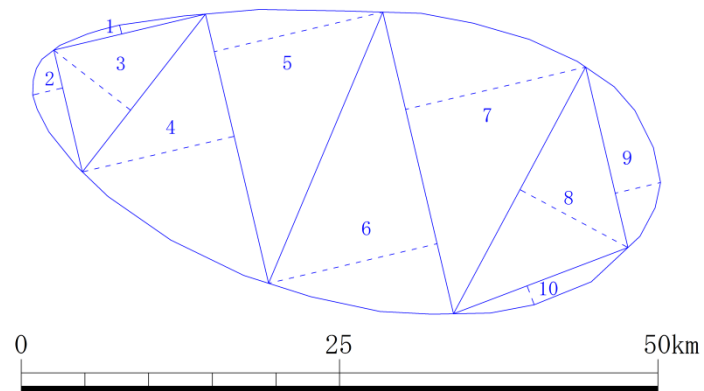
① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量4.15km<sup>3</sup>の妥当性確認

・三斜法は等層厚線図を三角形に分割し、各三角形の面積の合計によって等層厚線図の面積を求めるものであり、数多くの三角形に分割するほど高精度となるが、ここでは10程度の分割を行い、面積を求めた。

等層厚線: 200cm



等層厚線: 100cm

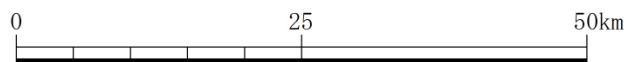
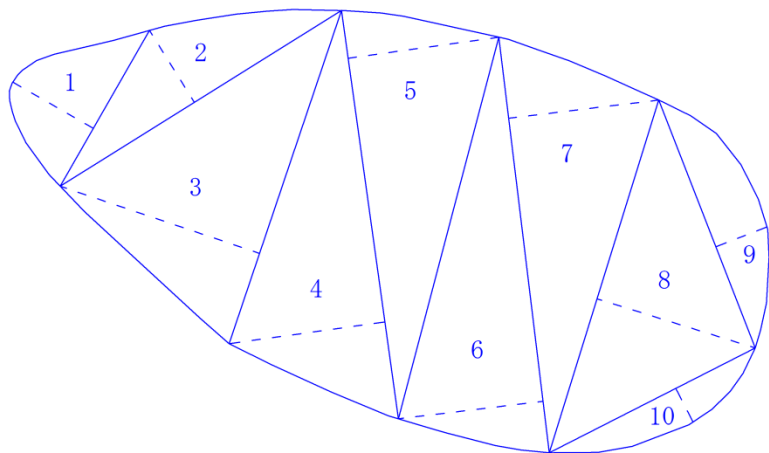


番号	底辺(km)	高さ(km)	倍面積(km <sup>2</sup> )
1	4.643	1.320	6.1
2	8.591	1.845	15.9
3	8.591	3.658	31.4
4	3.964	0.346	1.4
5	7.956	3.607	28.7
6	7.932	2.984	23.7
7	7.936	2.440	19.4
8	7.531	1.879	14.2
9	6.682	1.096	7.3
10	4.734	1.144	5.4
合計			153.4
面積			76.7

番号	底辺(km)	高さ(km)	倍面積(km <sup>2</sup> )
1	12.243	0.721	8.8
2	9.820	2.417	23.7
3	15.712	7.652	120.2
4	21.698	12.243	265.6
5	21.698	13.589	294.9
6	24.318	13.589	330.5
7	24.318	14.527	353.3
8	21.966	9.620	211.3
9	14.547	3.661	53.3
10	14.654	1.588	23.3
合計			1684.9
面積			842.4

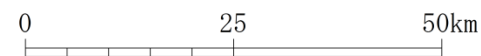
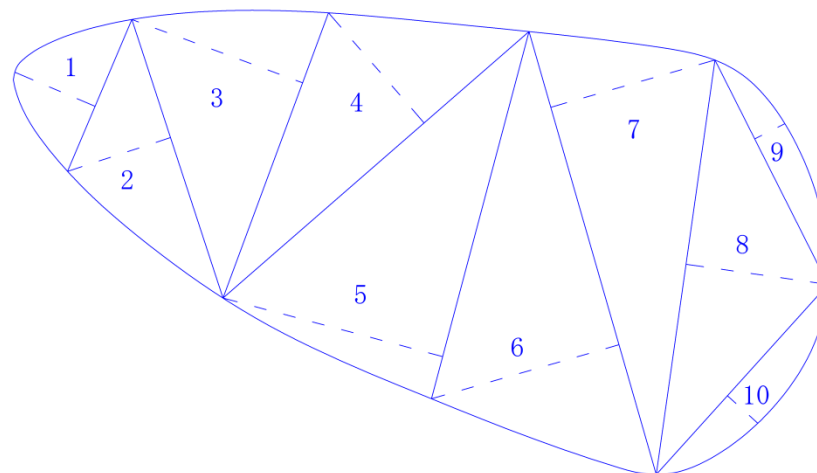
① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量 $4.15\text{km}^3$ の妥当性確認

等層厚線: 50cm



番号	底辺(km)	高さ(km)	倍面積(km <sup>2</sup> )
1	15.738	8.130	127.9
2	29.070	7.428	215.9
3	30.817	18.447	568.5
4	36.133	13.787	498.2
5	36.133	13.346	482.2
6	36.693	12.771	468.6
7	36.693	13.244	486.0
8	32.372	14.510	469.7
9	23.312	4.810	112.1
10	20.250	3.310	67.0
合計			3496.2
面積			1748.1

等層厚線: 20cm

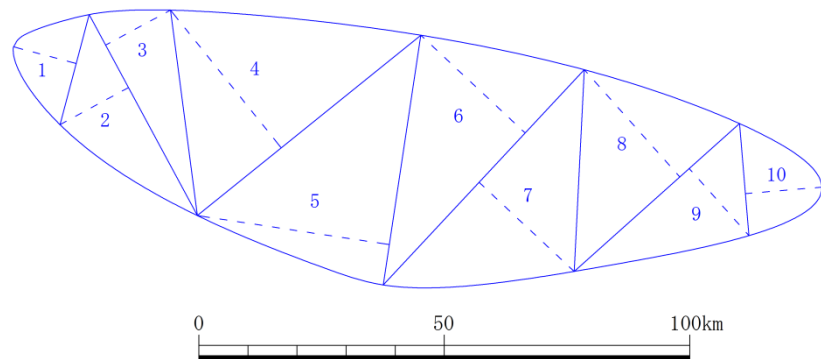


番号	底辺(km)	高さ(km)	倍面積(km <sup>2</sup> )
1	19.782	10.472	207.2
2	35.153	13.009	457.3
3	36.475	21.861	797.4
4	48.700	17.488	851.7
5	45.572	27.297	1244.0
6	55.284	23.423	1294.9
7	55.284	20.514	1134.1
8	50.211	17.225	864.9
9	30.143	4.061	122.4
10	30.751	4.918	151.2
合計			7125.0
面積			3562.5



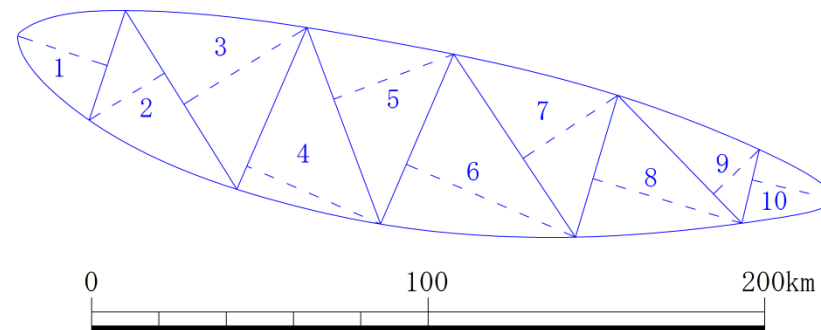
① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量 $4.15\text{km}^3$ の妥当性確認

等層厚線:10cm



番号	底辺(km)	高さ(km)	倍面積(km <sup>2</sup> )
1	23.158	13.177	305.2
2	46.445	15.850	736.2
3	46.445	15.024	697.8
4	58.470	35.973	2103.3
5	51.359	39.555	2031.5
6	59.945	29.096	1744.2
7	59.945	26.527	1590.2
8	45.161	29.239	1320.5
9	45.161	18.284	825.7
10	22.874	15.621	357.3
	合計		11711.8
	面積		5855.9

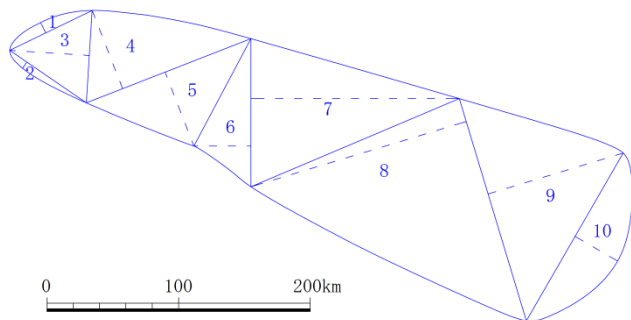
等層厚線:5cm



番号	底辺(km)	高さ(km)	倍面積(km <sup>2</sup> )
1	34.299	28.011	960.7
2	62.584	26.377	1650.8
3	62.584	43.090	2696.7
4	52.384	43.312	2268.9
5	62.375	38.069	2374.6
6	54.966	54.715	3007.5
7	65.299	33.820	2208.4
8	43.972	46.172	2030.3
9	52.916	18.986	1004.7
10	22.502	24.707	556.0
	合計		18758.5
	面積		9379.2

① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量4.15km<sup>3</sup>の妥当性確認

等層厚線: 0cm



番号	底辺(km)	高さ(km)	倍面積(km <sup>2</sup> )
1	69.572	8.781	610.9
2	70.464	5.686	400.7
3	70.237	60.569	4254.2
4	134.168	63.705	8547.2
5	134.168	60.207	8077.9
6	112.322	43.324	4866.2
7	112.322	158.285	17778.9
8	176.041	170.860	30078.4
9	176.041	107.269	18883.7
10	146.974	37.337	5487.6
合計			98985.6
面積			49492.8

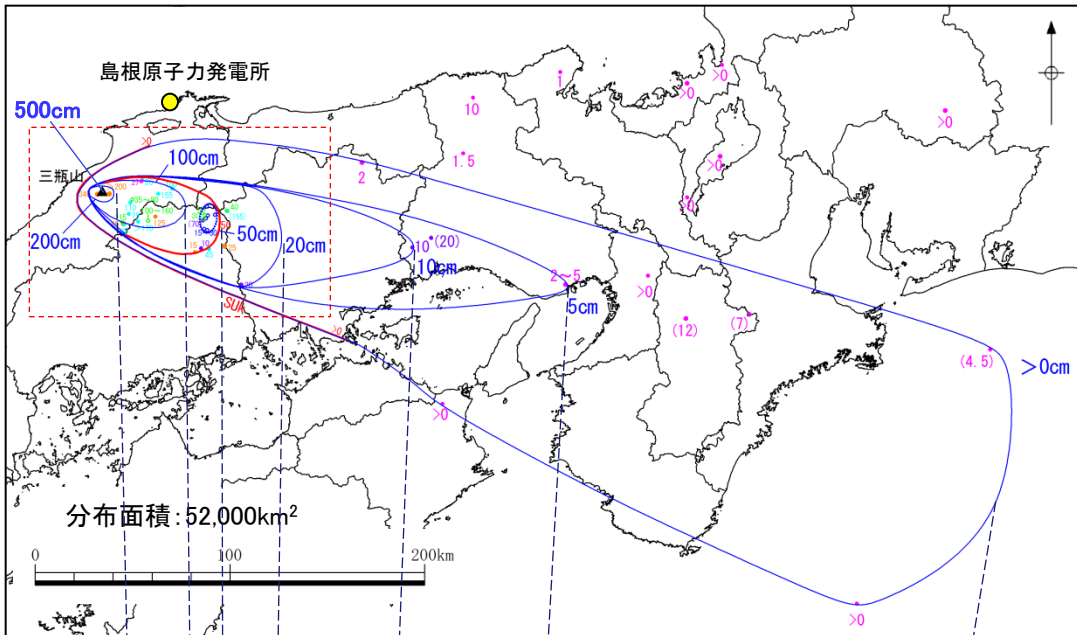
- ・CADで算出した面積と、三斜法で算出した面積を下表に示す。
- ・三斜法で算出した面積は、CADで算出した面積の94~96%を再現できており、CADで算出した面積は妥当であることを確認した。

降灰層厚(cm)	0	5	10	20	50	100	200
①CADで算出した面積(km <sup>2</sup> )	52,000	9,831	6,113	3,708	1,819	894	80
②三斜法で算出した面積(km <sup>2</sup> ) □	49,493	9,379	5,856	3,563	1,748	842	77
比率(②÷①) □	95%	95%	96%	96%	96%	94%	96%

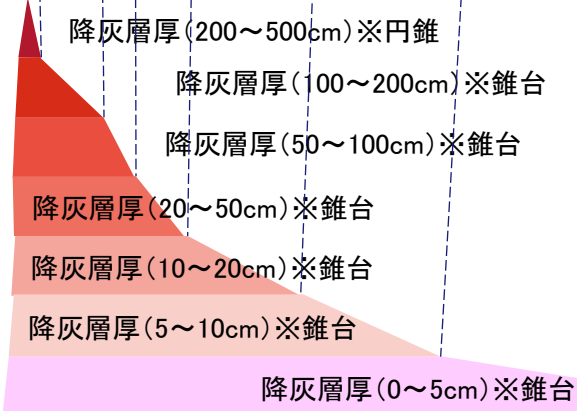


① 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量4.15km<sup>3</sup>の妥当性確認

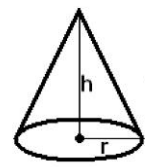
・CADで算出した面積(三斜法で比較し, 妥当性を確認)を利用し, 体積を下のとおり算出した。



- 【凡例】
- : 町田・新井(2011)による等層厚線
  - : 補間した等層厚線(Maruyama et al.(2020)によるSUK-Lの分布域を考慮)
  - : 地質調査地点
  - : 松井・井上(1971)による降灰報告地点
  - : 林・三浦(1987)による降灰報告地点
  - : 野村・田中(1987)による降灰報告地点
  - : 野村(1991)による降灰報告地点
  - : その他(町田・新井(2011), Maruyama et al.(2020)等の文献による降灰報告地点)
  - ( ) : 地質調査結果等により参考扱いとする降灰報告地点 (数字は降灰厚さ(cm))
- ※福岡・松井(2002)による降灰報告地点は三瓶山周辺(三瓶山から約7kmの範囲)のため記載を省略

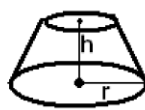


円錐の体積算出方法



体積 $V = \text{底の面積} S \times h(\text{高さ}) \times 1/3$   
但し、底の面積 $S = \text{半径} r \times \text{半径} r \times \text{円周率}(\pi \text{ 又は } 3.1415\cdots)$

錐台の体積算出方法



体積 $V = h/3 \times (\text{上面の面積} + \sqrt{\text{上面の面積} \times \text{底面の面積}} + \text{底面の面積})$

降灰層厚(cm)	0	5	10	20	50	100	200	500
面積(km <sup>2</sup> )	52,000	9,831	6,113	3,708	1,819	894	80	0
体積(km <sup>3</sup> )	1.41	0.39	0.49	0.56	0.66	0.41	0.08	0.00

合計体積(km <sup>3</sup> )	4.00
------------------------	------

② 須藤ほか(2007)三瓶浮布降下軽石:噴出量74.77km<sup>3</sup>の妥当性確認

② 須藤ほか(2007)三瓶浮布降下軽石:噴出量74.77km<sup>3</sup>

- ・ 須藤ほか(2007)は、加藤ほか(1996)に示された等層厚線図を基に、図学的な処理を施して、閉じていない1本の等層厚線を補間した等層厚線図を作成し、その噴出量が74.77km<sup>3</sup>と見積もられるとしている。

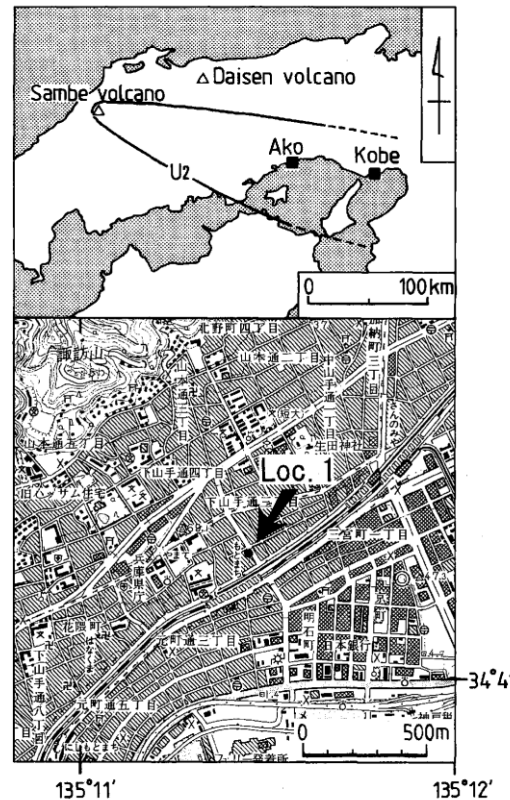
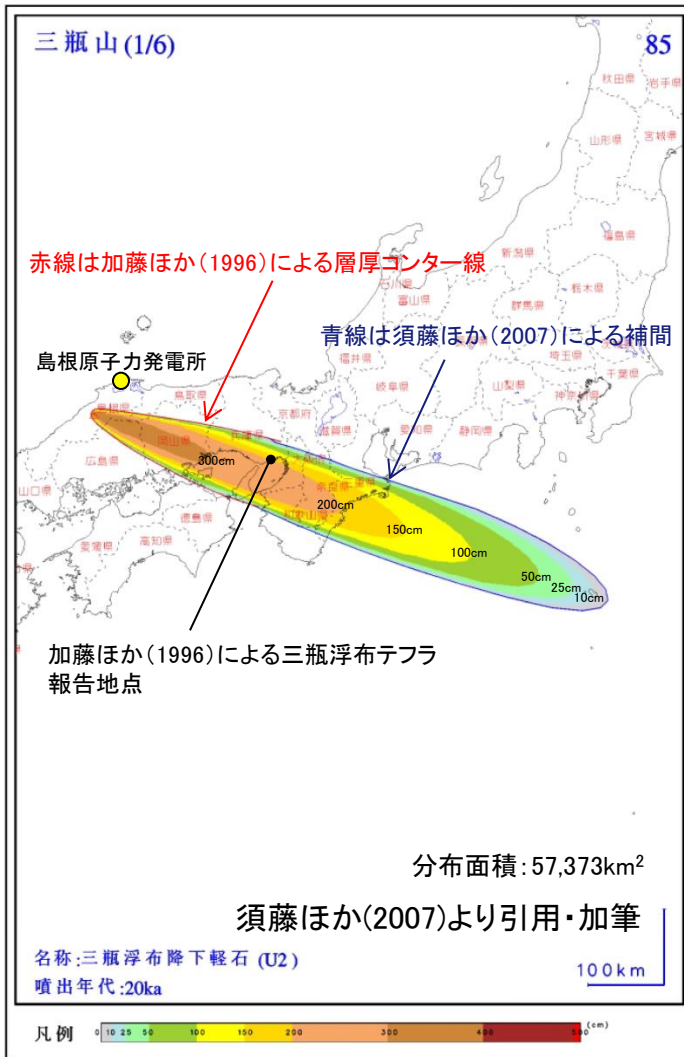


図1 兵庫県神戸市元町のテフラ発見地点と三瓶浮布降下軽石堆積物(U<sub>2</sub>)の分布  
国土地理院発行2万5千分の1地形図「神戸首部」を使用。  
野村・田中(1987)を引用。

加藤ほか(1996)より引用

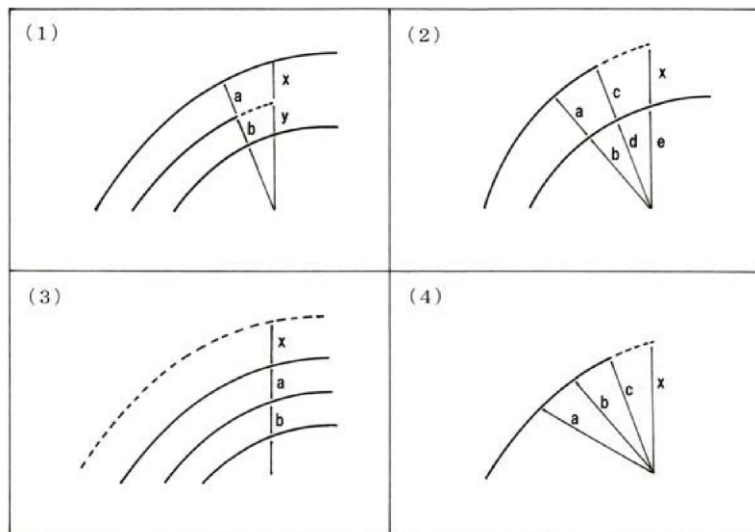
- ・加藤ほか(1996)は、神戸市域において、層厚2~5cmの三瓶浮布テフラ(浮布降下軽石堆積物)を報告している。
- ・また、加藤ほか(1996)は、三瓶浮布テフラ(赤穂上部火山灰)が兵庫県南部(赤穂市)で確認された報告(野村・田中(1987))を基に、分布主軸を火山の東南東方向に伸ばす等層厚線図(閉じていない1本の等層厚線)を作成している。

・須藤ほか(2007)が作成した等層厚線図は、神戸市付近において約200cmの層厚となり、加藤ほか(1996)が報告する層厚(2~5cm)より大幅に大きいことから、噴出量(74.77km<sup>3</sup>)は過大に見積もられているものと考えられる。



## (参考) 須藤ほか(2007)による等層厚線図の作成方法

- ・ 須藤ほか(2007)によると、既存の公開資料に記載されている等層厚線図は、1)線が閉じていないことがある、2)本数が十分でないことがある、3)各等厚測定点の厚さから等層厚線を描くまでの間に各原著者の考え方が強く反映されることがあるなど、層厚分布図を作成させるまでの過程で何らかの作業が必要なものが多いとされている。
- ・ 須藤ほか(2007)は、1)等層厚線は火口を何らかの基準点とした円または楕円などの滑らかな閉じた曲線を描く、2)複数の等層厚線は互いに交差しない、3)層厚値は火口から離れるにしたがい小さくなるものとし、図学的な処理を施して、未完成の各等層厚線を補間したとしている。
- ・ 須藤ほか(2007)は、既に公表文献に記載されている162のユニットについて、火山灰の体積と本研究で求めた体積の火山爆発度指数VEIによる比較を行い、そのうち76%は一致して対応したとしている。一致しなかったのは、例えば既存公表資料の中に示された等層厚線の数が少ない場合であり、遠方に達した0cmの等層厚線のすぐ内側に15cmの線が描かれているなど、火口からの距離と層厚の相関が不自然な場合に相当するものなどであったとしている。



実線：既存の公開資料に記載された等層厚線  
破線：須藤ほか(2007)による補間

第2図 等層厚線補間の方法を示す略図.

Fig. 2 Schematic figures to show how to complete the isopach.

須藤ほか(2007)より引用・加筆

### ③ 須藤ほか(2007)三瓶浮布:噴出量 $6.20\text{km}^3$ の妥当性確認

#### ③ 須藤ほか(2007)三瓶浮布:噴出量 $6.20\text{km}^3$

・ 須藤ほか(2007)は、知見②の他、町田・新井(1992)に示された等層厚線図を基に、図学的な処理を施して、閉じていない2本の等層厚線を補間した等層厚線図を作成し、その噴出量が $6.20\text{km}^3$ と見積もられるとしている。

三瓶山(2/6)

86

赤線は町田・新井(1992)による層厚コンター線

青線は須藤ほか(2007)による補間

島根原子力発電所

野村・田中(1987)による三瓶浮布テフラ報告地点

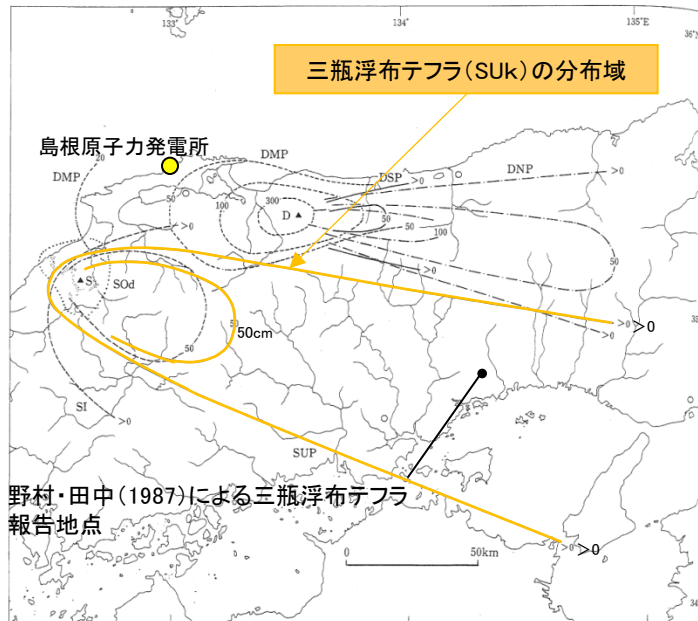
分布面積:  $30,832\text{km}^2$

須藤ほか(2007)より引用・加筆

名称:三瓶浮布(Suk)  
噴出年代:20ka

100 km

凡例 0 50 100 200 300 400 500 600 700 800 (cm)



三瓶浮布テフラ(SUK)の分布域

野村・田中(1987)による三瓶浮布テフラ報告地点

図 3.2-1 中国地方の第四紀後期主要テフラの等層厚線図  
SUP 三瓶浮布<sup>1)2)</sup> SI 三瓶池田<sup>1)2)</sup> SOD 三瓶大田<sup>1)2)</sup> (点線内が pH 分布域)  
DSP 大山燐金<sup>2)</sup> DNP 大山生竹<sup>2)3)</sup> DMP 大山松江<sup>2)3)</sup> D: 大山, S: 三瓶  
(1) 林・三浦(1987), 2) 町田・新井(1979), 3) 津久井(1984)

・ 町田・新井(1992)は、三瓶浮布テフラ(赤穂上部火山灰)が兵庫県南部(赤穂市)で確認された報告(野村・田中(1987))を基に、分布主軸を火山の東南東方向に伸ばす等層厚線図(閉じていない2本の等層厚線)を作成している。

町田・新井(1992)より引用・加筆

・ 野村・田中(1987)は、赤穂市域の複数地点で三瓶浮布テフラが認められ、山麓の緩斜面(麓層面)において断続して確認される三瓶浮布テフラの最大層厚は10数cm、平均層厚は10cm前後であるとしている。

・ 須藤ほか(2007)が作成した等層厚線図は、赤穂市付近において20cm以上の層厚となり、野村・田中(1987)が報告する層厚(10cm前後)より大きいことから、噴出量( $6.20\text{km}^3$ )は大きく見積もられているものと考えられる。



## 三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模(まとめ)

三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模に関する知見として、①【採用値】第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量 $4.15\text{km}^3$ 、②須藤ほか(2007)三瓶浮布降下軽石:噴出量 $74.77\text{km}^3$ 、③須藤ほか(2007)三瓶浮布:噴出量 $6.20\text{km}^3$ が報告されている。

①【採用値】 第四紀火山カタログ編集委員会編(1999):噴出量 $4.15\text{km}^3$

・三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模は、日影山(溶岩) $0.15\text{km}^3$ と小田火砕流・浮布降下軽石 $4\text{km}^3$ を足し合わせた $4.15\text{km}^3$ と評価した。

・第四紀火山カタログ編集委員会編(1999)に示される小田火砕流・浮布降下軽石の噴出量 $4\text{km}^3$ は、最新の文献及び地質調査による降灰厚さを参考に等層厚線を補間した等層厚線図より算出される噴出量約 $4.0\text{km}^3$ と同程度である。

② 須藤ほか(2007)三瓶浮布降下軽石:噴出量 $74.77\text{km}^3$

・須藤ほか(2007)は、加藤ほか(1996)に示された等層厚線図を基に、図学的な処理を施して、閉じていない1本の層厚コンター線を補間した等層厚線図を作成し、その噴出量が $74.77\text{km}^3$ と見積もられるとしている。

・須藤ほか(2007)が作成した等層厚線図は、神戸市付近において約 $200\text{cm}$ の層厚となり、加藤ほか(1996)が報告する層厚( $2\sim 5\text{cm}$ )より大幅に大きいことから、噴出量( $74.77\text{km}^3$ )は過大に見積もられているものと考えられる。

③ 須藤ほか(2007)三瓶浮布:噴出量 $6.20\text{km}^3$

・須藤ほか(2007)は、知見②の他、町田・新井(1992)に示された等層厚線図を基に、図学的な処理を施して、閉じていない2本の等層厚線を補間した等層厚線図を作成し、その噴出量が $6.20\text{km}^3$ と見積もられるとしている。

・須藤ほか(2007)が作成した等層厚線図は、赤穂市付近において $20\text{cm}$ 以上の層厚となり、野村・田中(1987)が報告する層厚( $10\text{cm}$ 前後)より大きいことから、噴出量( $6.20\text{km}^3$ )は大きく見積もられているものと考えられる。

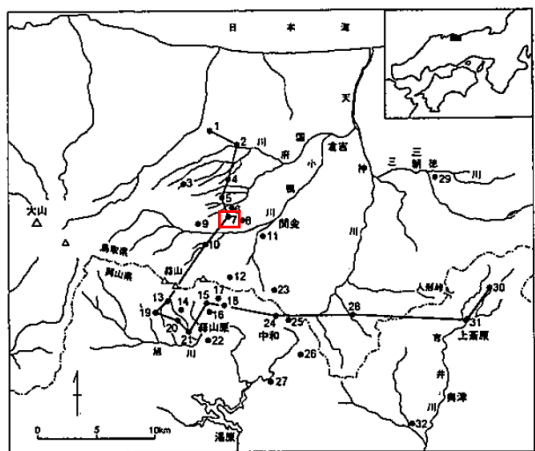
・以上のことから、三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模 $4.15\text{km}^3$ は、想定する噴出量として妥当と考えられる。

1. 第四紀火山について(三瓶山・大山を除く)
2. 敷地周辺(敷地を中心とする半径約30km範囲)の火山灰層厚に関する地質調査
3. 三瓶浮布テフラの降灰層厚に関する文献調査及び地質調査
4. 三瓶浮布テフラ噴出時の噴火規模について
5. **DNPの噴出規模の算出に関する降灰層厚情報の補足資料**
6. DNP等層厚線図面積の検証について
7. 防災科学技術研究所による地震波速度構造モデルについて
8. 既往文献による降下火砕物の体積算出方法の概要について
9. 火山灰シミュレーションにおける大気パラメータ及び噴煙柱高度の考え方について
10. 大山生竹テフラの火山灰シミュレーション結果について
11. その他
  - ・噴火の規模について
  - ・火砕岩の分類

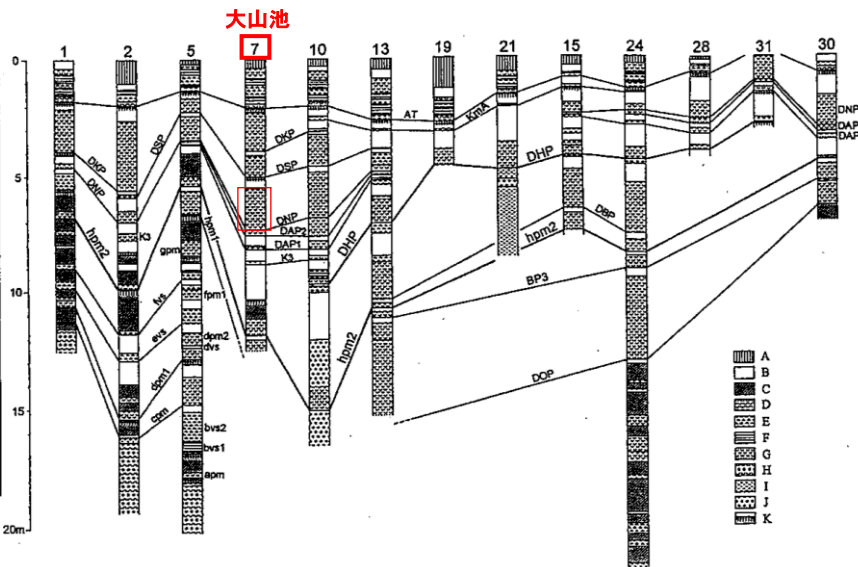


# 鳥取県倉吉市 大山池地点

## 山元(2017)で引用している文献の記載内容

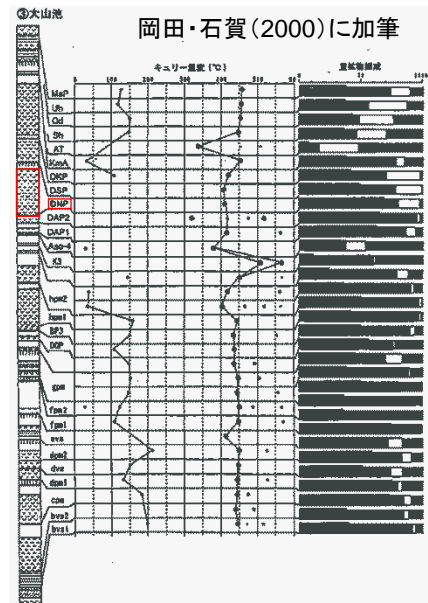


第10図 柱状図(第11図)の位置



第11図 大山東麓から岡山県北部にかけての露頭柱状対比図(凡例は第2図および第5図)

岡田・石賀(2000):大山テフラ より抜粋



第13図 関金町大山池で見られるテフラの総合柱状図と各テフラの分析結果(DNPより下位の層準は普段は水没している)

- ・岡田・石賀(2000)によると大山池は人工のため池で、ここには上部テフラから最下部テフラまでの多くの層準がそろっており、大きく構成の異なる鳥取県側と岡山県側の最下部テフラを対比する上で本露頭の存在は重要であると示されている。
- ・上記文献の露頭柱状対比図よりLoc.7(大山池)におけるDNPの層厚は、170cm~200cm程度と示されている。
- ・再堆積などの堆積状況についての記載はない。

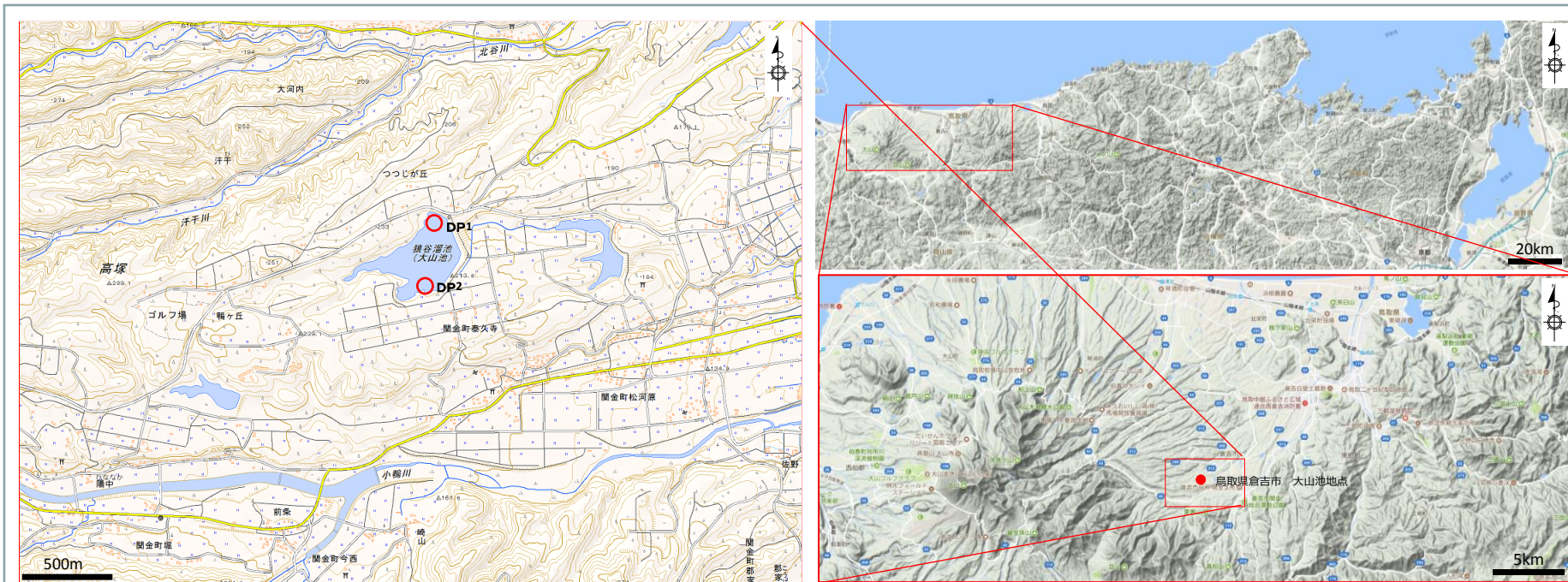
### Step 3 (関金町大山池)

大山池は人工のため池で、維持・管理のために毎年9月末から10月はじめにかけて水を抜くのが地元の行事になっている。水が抜かれて水位が下がると、普段は水没している多くのテフラが露出して観察できるようになる。本見学旅行当日にはかなり水位が下がっているものと予想される。

ここでは、第13図に示すように上部テフラから最下部テフラまで多くの層準がそろっている。下部テフラの大山荒田軽石1(DAP1)の直下には阿蘇-4火山灰(Aso-4)があり、条件が良ければ肉眼的にも識別できる場合がある。最下部テフラは、大山東麓に分布するほとんどの層準がそろっているが、gpmとhpm1の間にある軽石層は、岡山県側に主に分布する大山奥津軽石(DOP)とBP3軽石に対比できる可能性が強い。大きく構成の異なる鳥取県側と岡山県側の最下部テフラを対比する上で、本露頭の存在は重要である。



## 1. 1 地形, 地質的な特徴

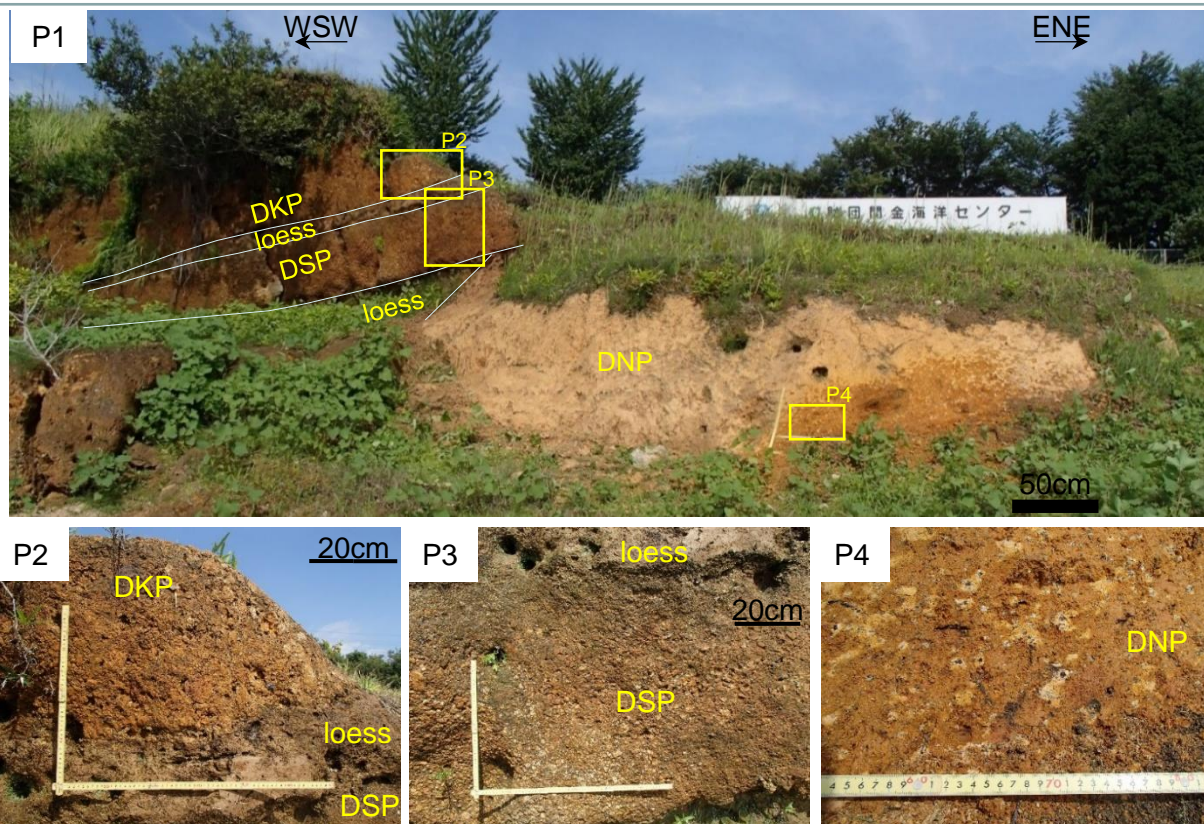


出典: 地図データ@2017Google,ZENRINに加筆

- ・大山より東へ約16kmの地点の大山山麓に位置している。
- ・大山池周辺は平坦地形を成しており, 田畑が広がっている。



## 1.2 現地状況(写真) 大山池(DP1)

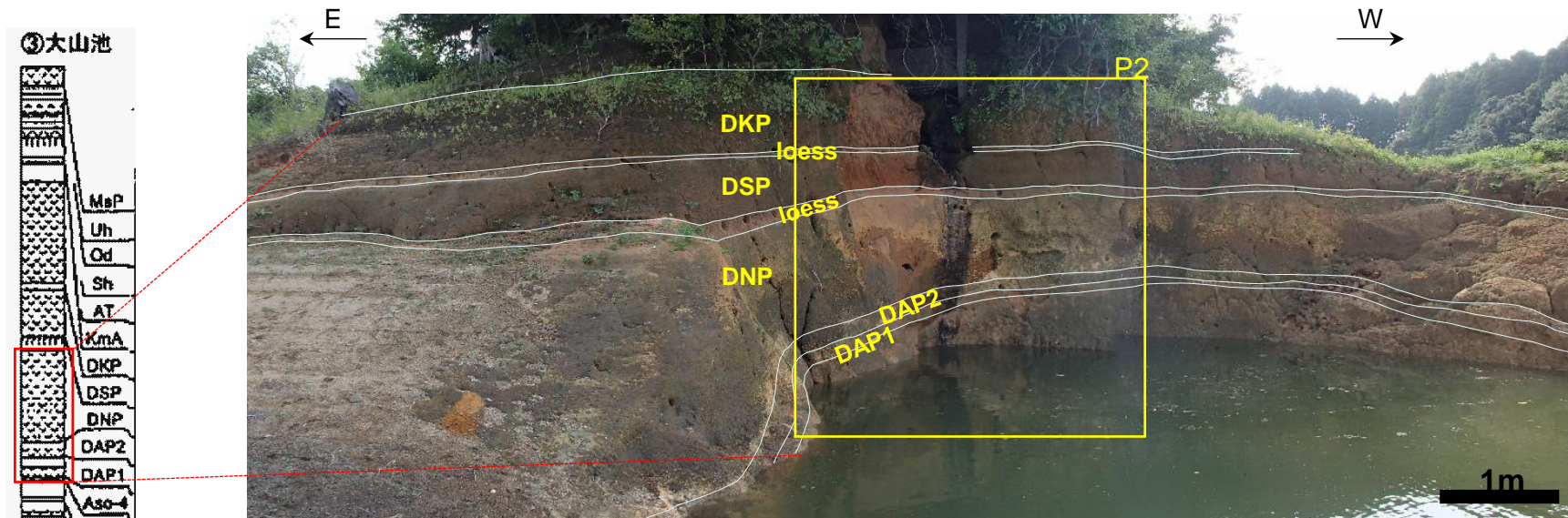


### 【調査結果】

- ・大山池北岸露頭(DP1)では、下位から順にDNP, DSP, DKPを確認した。
- ・いずれも黄褐色を呈する粗粒軽石質火山灰であり、各テフラ層の間には数10cmの黄土が挟在していることを確認した。
- ・DNP, DSP, DKPはいずれもメートルオーダーの層厚を有し、DNPの層厚は上位2層の火山灰層に比べやや厚い層を呈していた。
- ・DNPは変質により粘土化し、他のものよりも淡い褐色を呈していた。



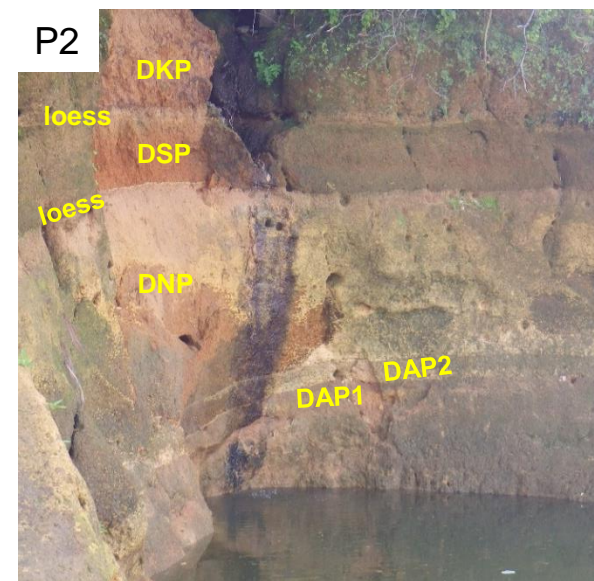
## 1.2 現地状況(写真) 大山池(DP2)



岡田・石賀(2000)より

### 【調査結果】

- ・大山池南岸露頭(DP2)では、下位から順にDAP1, DAP2, DNP, DSP, DKPを確認した。
- ・いずれも黄褐色を呈する粗粒軽石質火山灰からなり、各テフラの層間には数10cmの黄土が挟在していた。
- ・DNPの層厚は上位2層の火山灰層に比べやや厚く、層厚は2m程度であった。
- ・DNPは変質により粘土化し、他のものよりも淡い褐色を呈していた。



# 兵庫県養父市 大屋地点



## 山元(2017)で引用している文献の記載内容

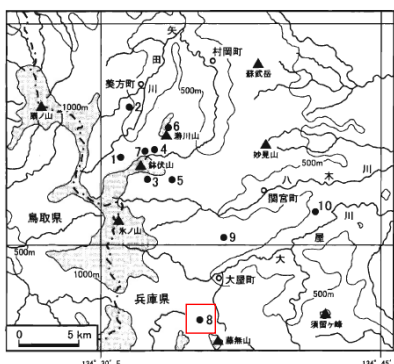


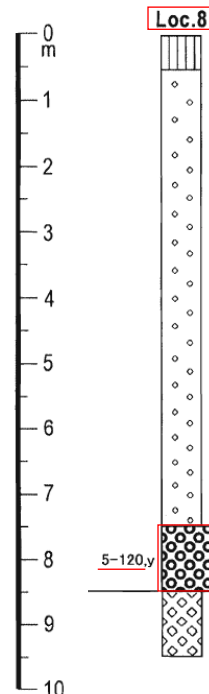
図1 調査地域と記載した第四紀テフラ露頭の位置

ところが、当地域は山地が大半を占め、テフラが保存されやすい丘陵や河岸段丘などの比較的平坦な地形の発達が悪いことから、これまでにテフラ層序の研究がなされていなかった。こうした山地域にあって、鉢伏山周辺地域 (図1) には後期鮮新世～中期更新世に噴出した溶岩流台地 (Furuyama et al., 1993; 先山ほか, 1995) が残存し、第四紀のテフラが保存されやすい平坦面や窪地を提供している。これらの溶岩流台地周辺には地滑り・崩壊地が多数分布し、地滑りブロック背後の凹地や崩壊土砂の平坦な堆積面は、溶岩流台地上の平坦面や窪地と並び、テフラの保存に好適な場所となっている。したがって、本地域に九州の火山起源の広域テフラや大山火山起源のテフラが保存されている可能性は高いと予想される。

加藤他(2001):兵庫県北西部・鉢伏山周辺地域の第四紀後期テフラ層序  
—大山火山起源のテフラを中心として— より抜粋

- ・加藤他(2001)によると鉢伏山周辺地域には、後期鮮新世～中期更新世に噴出した溶岩流台地が残存し、これらの溶岩流台地周辺には地滑り、崩壊地が多数分布すると示されている。
- ・Loc.8(大屋町大屋スキー場)では、層厚5cm～120cmのDNPが示されている。
- ・再堆積などの堆積状況についての記載はない。

加藤他(2001)に加筆



K-Ah: 鬼界アカホヤ火山灰  
AT: 始良丹沢火山灰  
Ata: 阿多火山灰  
DSP: 大山関金軽石  
DNP: 大山生竹軽石  
DOP: 大山奥津軽石  
hpm2: 大山最下部火山灰hpm2軽石  
gpm: 大山最下部火山灰gpm軽石  
fpm: 大山最下部火山灰fpm軽石



図2 調査地点におけるテフラ柱状図

露頭の位置は図1を参照。柱状図左には、記載テフラの層厚(単位はcm)と色調(y:黄色, yb:黄褐色, yg:黄灰色, ygb:黄灰褐色, gb:灰褐色, lb:明褐色, lyb:明黄褐色, w:白色, yw:黄白色)を記した。

Loc.8(大屋町大屋スキー場)では、崩壊堆積物の上位に黄褐色火山灰土とクロボク土が累重し、火山灰土の最下部に径2～3mmの普通角閃石と黒雲母の結晶が散在する黄色風化軽石(T-19)が挟在する。T-19は粒径2～5mmの軽石と岩片から構成され、径10mmを超える軽石や岩片も含まれる。

## 2.1 地形, 地質的な特徴



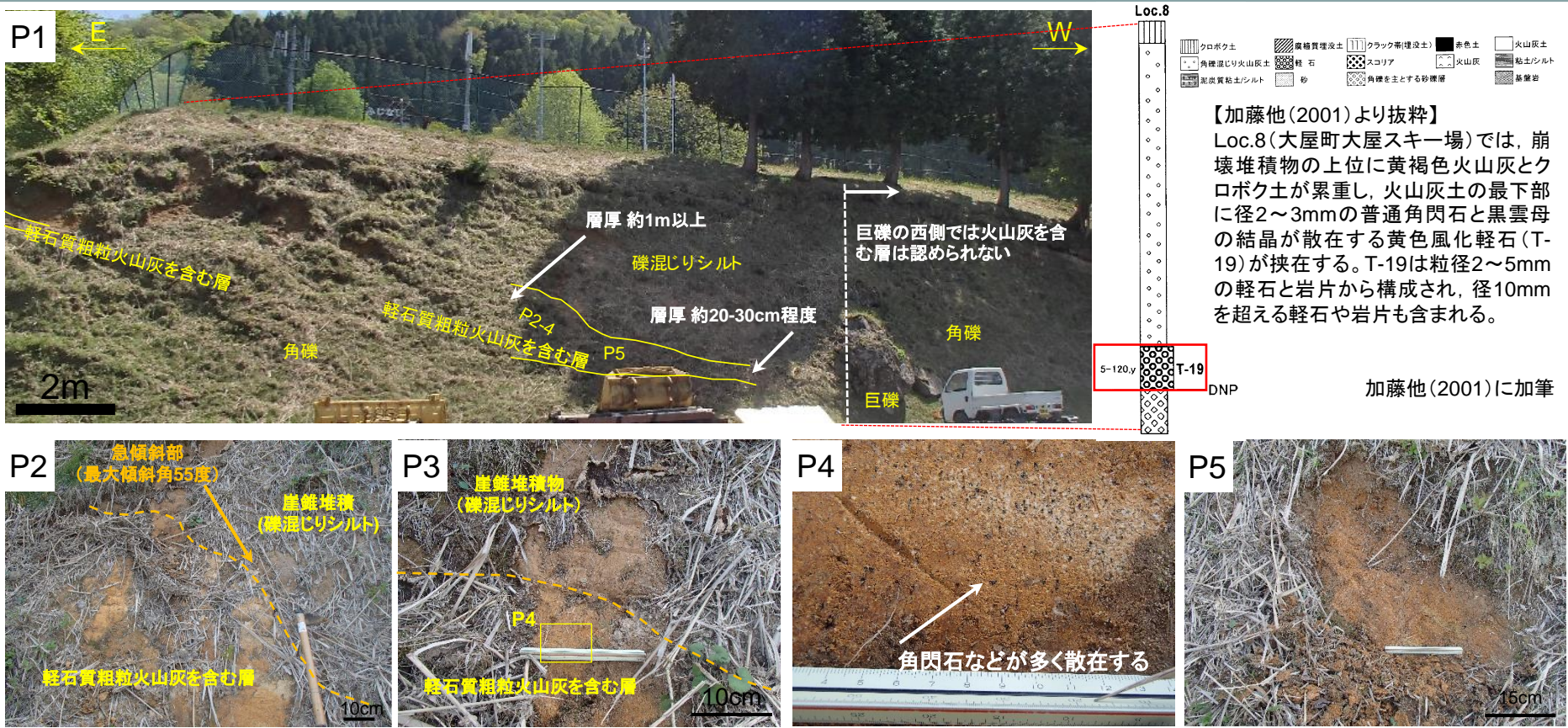
出典: 地図データ@2017Google, ZENRINに加筆

出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

- ・大屋地点は崖錐性堆積物が見られる山腹に位置しており, 崩壊により形成されたと考えられる角礫層が分布していることを現地において確認した。



## 2.2 現地状況(写真) 大屋スキー場(OY1)



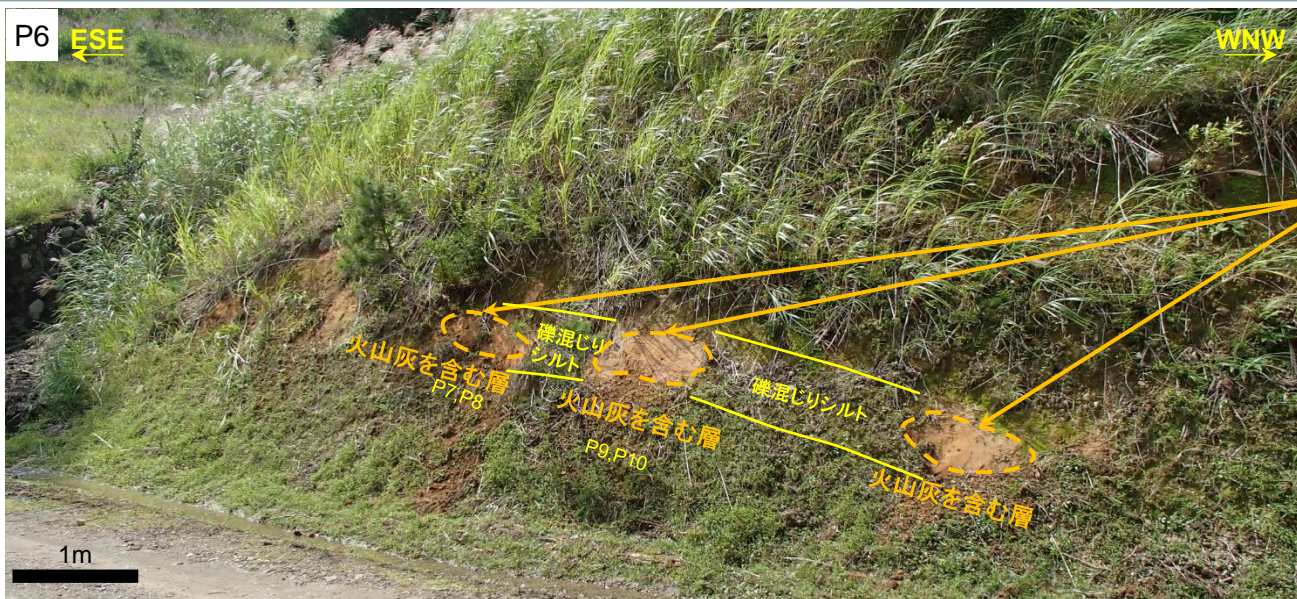
### 【調査結果】

- ・加藤他(2001)によるLoc.8は、山腹にある崖錐斜面の切土法面に位置する。
- ・切土法面は、角礫を主体とする礫質な崩壊堆積物からなり、礫混じりシルトからなる被覆層が崩壊堆積物を覆っていた。
- ・切土法面には巨礫があり、その東側では火山灰を含む層が堆積しているのに対し、巨礫の西側ではそのような層は認められなかった。
- ・東側にある火山灰を含む層は、角礫層と礫混じりシルト層の境界付近に傾斜(最大傾斜角55度)して挟在していた(P2, P3)。
- ・火山灰を含む層の層厚は一定でなく、西側端部(巨礫付近)で20cm~30cm程度であり、東に向かい層厚は厚くなり、1m以上あることを確認した。
- ・火山灰を含む層は黄褐色を呈する軽石質粗粒火山灰からなり、角閃石などが多く散在していた(P4, P5)。



## 2.2 現地状況(写真)

### 大屋スキー場(OY2)



軽石質粗粒火山灰を含む層がレンズ状に点在している



### 【調査結果】

- ・加藤他(2001)によるLoc.8露頭の約150m南西の道路法面においても火山灰を含む層を確認した。
- ・この火山灰を含む層は細礫を含む淡褐色シルト中に層厚20~50cmの黄褐色の軽石質粗粒のものであり、一様な層構造を形成しておらず、連続性も認められなかった。



## 2.3 考察

### 1. 地質学, 地形学的見地からの特徴

- ・加藤他(2001)によると鉢伏山周辺地域には、後期鮮新世～中期更新世に噴火した溶岩流台地が残存し、これらの溶岩流台地周辺には地滑り、崩壊地が多数分布すると示されている。
- ・現地調査の結果、大屋地点は崖錐性堆積物が見られる山腹に位置しており、崩壊により形成されたと考えられる角礫層が分布していることを確認した。

### 2. 火山灰を含む層の観察結果

#### 【露頭OY1】

- ・露頭OY1では巨礫を含む角礫を主体とする礫質な崩壊堆積物からなる切土法面に火山灰を含む層を確認した。
- ・その東側では火山灰を含む層が堆積しているのに対し、巨礫の西側ではそのような層は認められなかった。
- ・火山灰を含む層の層厚は一定でなく、数10cm～1m以上あることを確認した。
- ・火山灰を含む層は黄褐色を呈する軽石質粗粒火山灰からなり、角閃石などが多く散在していた。

#### 【露頭OY2】

- ・露頭OY2では火山灰を含む層を確認したが、この層は細礫を含む淡褐色シルト中に層厚20～50cmの黄褐色の軽石質粗粒のものであり、一様な層構造を形成しておらず、連続性も認められなかった。

対象となる火山灰を含む層は降灰層厚として評価できない。

# 兵庫県香美町 瀨川山地点



## 既往文献の記載内容

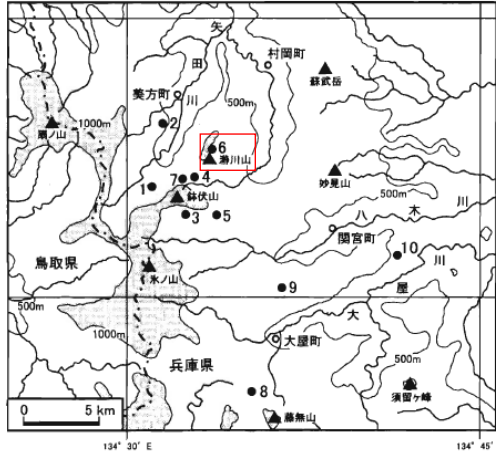
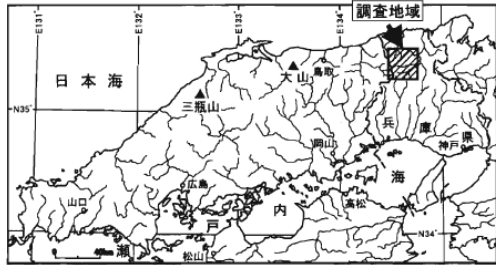
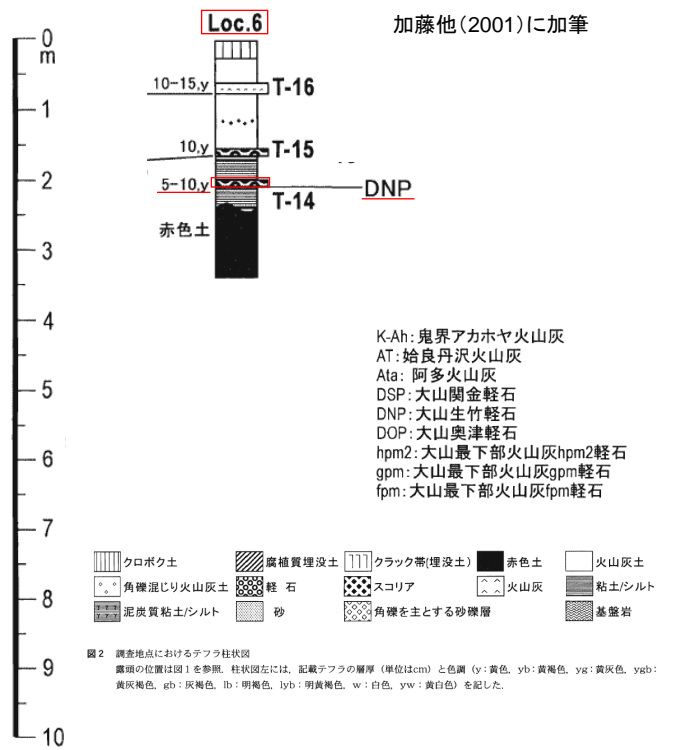


図1 調査地域と記載した第四紀テフラ露頭の位置

ところが、当地域は山地が大半を占め、テフラが保存されやすい丘陵や河岸段丘などの比較的平坦な地形の発達が悪いことから、これまでにテフラ層序の研究がなされていなかった。こうした山地域にあって、鉢伏山周辺地域 (図1) には後期鮮新世～中期更新世に噴出した溶岩流台地 (Furuyama et al., 1993; 先山ほか, 1995) が残存し、第四紀のテフラが保存されやすい平坦面や窪地を提供している。これらの溶岩流台地周辺には地滑り・崩壊地が多数分布し、地滑りブロック背後の凹地や崩壊土砂の平坦な堆積面は、溶岩流台地上の平坦面や窪地と並び、テフラの保存に好適な場所となっている。したがって、本地域に九州の火山起源の広域テフラや大山火山起源のテフラが保存されている可能性は高いと予想される。

加藤他(2001):兵庫県北西部・鉢伏山周辺地域の第四紀後期テフラ層序—大山火山起源のテフラを中心として—より抜粋

- ・加藤他(2001)によると鉢伏山周辺地域には、後期鮮新世～中期更新世に噴出した溶岩流台地が残存し、第四紀のテフラが保存されやすい平坦面や窪地を提供していると示されている。
- ・Loc.6(村岡町瀨川山)では、層厚5cm～10cmのDNPが示されている。
- ・再堆積などの堆積状況についての記載はない。



Loc.6(村岡町瀨川山)は、瀨川山の山頂部に広がる溶岩流台地上に位置する。ここでは、赤色土を不整合に覆う粘土に黄褐色風化軽石(T-14)がパッチ状に挟在する。T-14は粒径1～4mmの軽石と岩片から構成され、径1～2mmの普通角閃石と黒雲母の結晶が散在する。粘土の上位には黄褐色火山灰土とクロボク土が累重し、火山灰土の最下部に黄色風化軽石(T-15)が、上部に黄色細粒火山灰(T-16)が、それぞれ挟在する。T-15はT-14より細粒で、粒径1～3mmの軽石と岩片から構成され、径1mm程度の普通角閃石と黒雲母の結晶が散在する。

## 3. 1 地形, 地質的な特徴



出典: 地図データ@2017Google, ZENRINに加筆

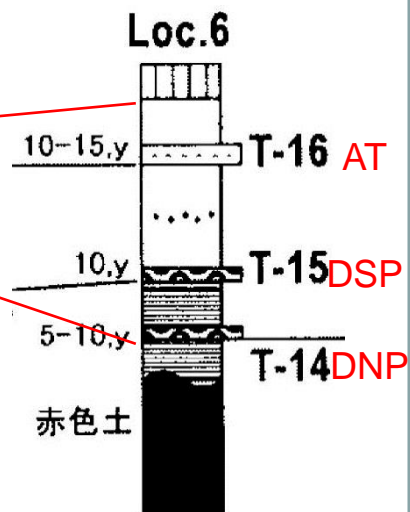
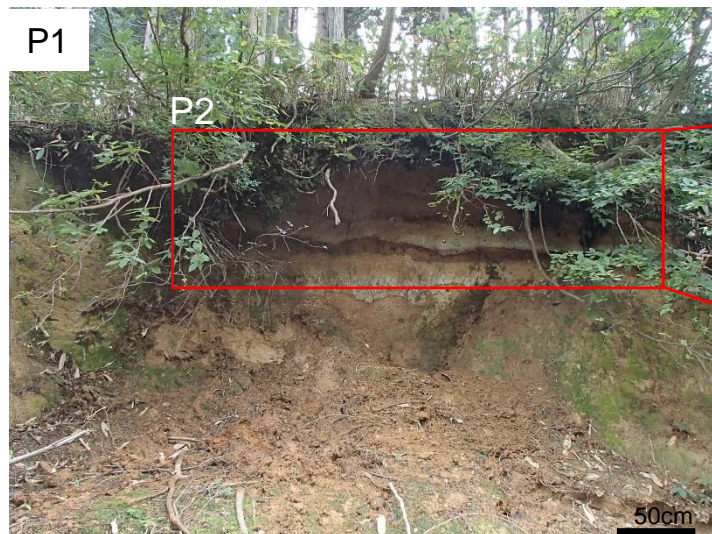


出典: 国土地理院地図 地図・空中写真閲覧サービスに加筆

- ・瀨川山地点は瀨川山山頂部の平坦な台地に位置しており, ほぼ水平に層を成している湿地堆積物層が分布していることを現地において確認した。



## 3.2 現地状況(写真)

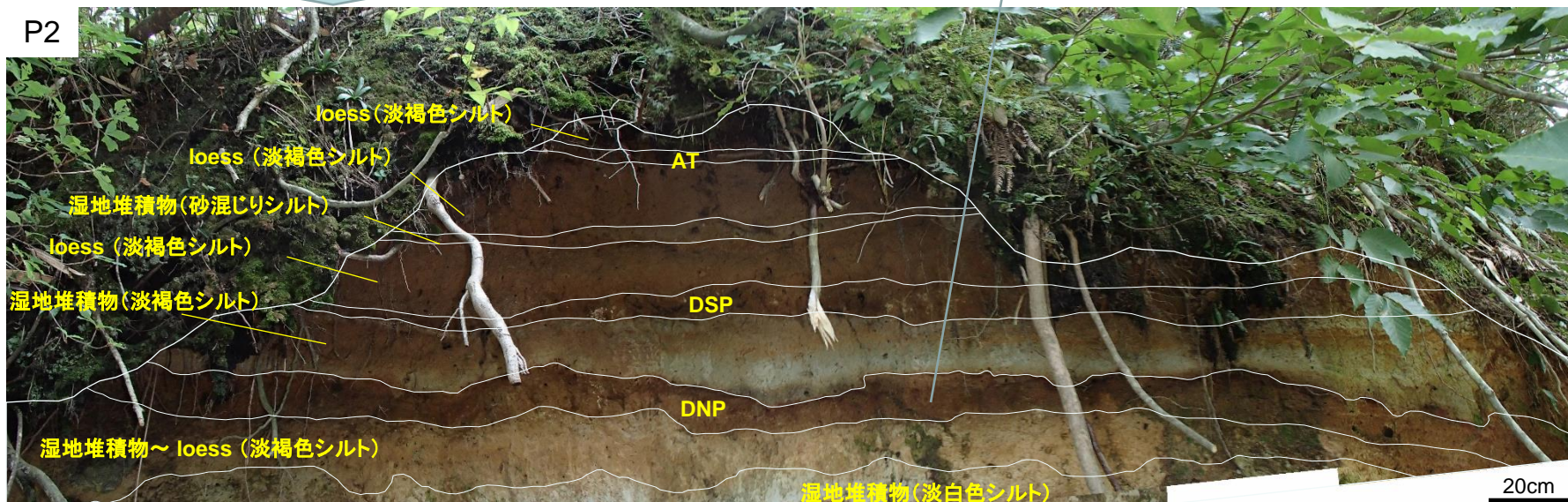


加藤他(2001)に加筆



黒色の重鉱物を多く含み、径数mmのパミスが散在する粗粒火山灰が肉眼で認められた。

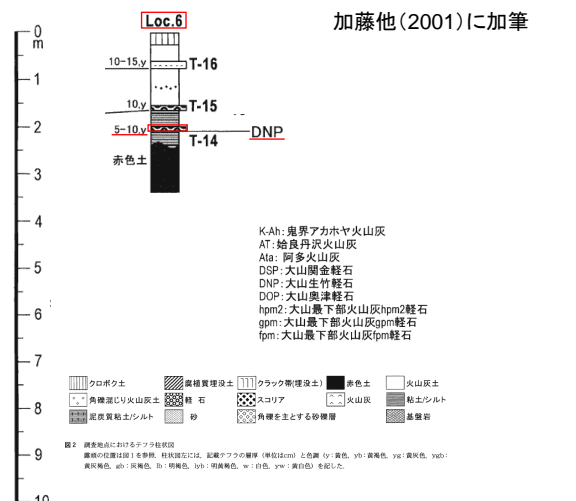
拡大写真





## 【瀨川山の文献との整合確認について】

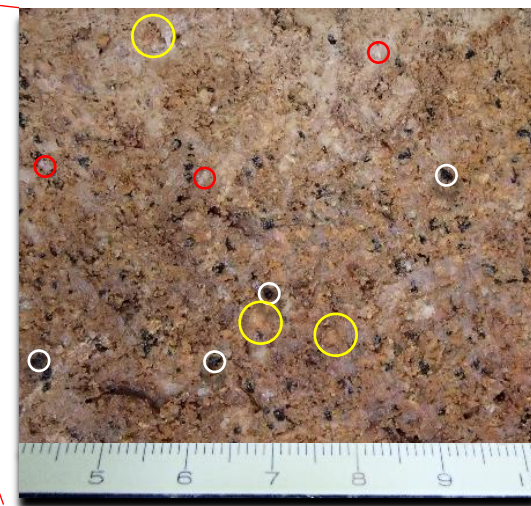
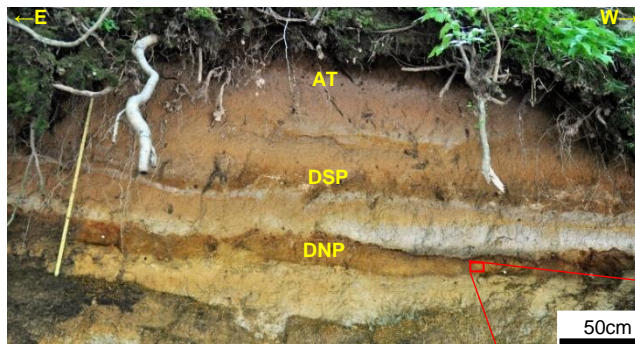
### 既往文献の記載内容



Loc.6 (村岡町瀨川山) は、瀨川山の山頂部に広がる溶岩流台地上に位置する。ここでは、赤色土を不整合に覆う粘土に黄褐色風化軽石 (T-14) がパッチ状に挟在する。T-14は粒径1~4mmの軽石と岩片から構成され、径1~2mmの普通角閃石と黒雲母の結晶が散在する。粘土の上位には黄褐色火山灰土とクロボク土が累重し、火山灰土の最下部に黄色風化軽石 (T-15) が、上部に黄色細粒火山灰 (T-16) が、それぞれ挟在する。T-15はT-14より細粒で、粒径1~3mmの軽石と岩片から構成され、径1mm程度の普通角閃石と黒雲母の結晶が散在する。

### 現地調査の結果

#### 現地露頭写真



- 加藤他(2001)によるとDNPには、粒径1~4mmの軽石と岩片から構成され、径1~2mmの普通角閃石と黒雲母の結晶が散在すると示されるが、現地調査を実施した結果、5mm以下の軽石と2mm以下の岩片、角閃石が散在していることを確認した。

現地調査の結果(前回までの報告書も含む)と既往文献に記載される内容に不整合は見られない。



## 3.2 現地状況(写真)

### 【調査結果】

- ・調査地点は瀨川山の標高900-1,000mにおいて北東-南西に延びる山頂小起伏面に位置しており、その露頭法面では湿地堆積物や黄土質な堆積物に挟まれた3層の火山灰層を確認した。
- ・加藤他(2001)は岩相や岩石記載的特徴に基づき、3層の火山灰層を上位から順に、始良Tnテフラ(AT)、大山関金軽石(DSP)、大山生竹軽石(DNP)としており、確認した3層の火山灰層は加藤他(2001)のものと同じものであると推察される。
- ・この3層の一部である加藤他(2001)でDNPとされている層は層厚10~15cmの褐色を呈する軽石質粗粒火山灰層で、径1mm以下の角閃石を多く含み、径1~5mmの軽石が見られた。層は連続しており、大屋地点に比べて層厚の変化が小さいことを確認した。

## 3.3 考察

### 1. 地質学, 地形学的見地からの特徴

- ・加藤他(2001)によると鉢伏山周辺地域には、後期鮮新世～中期更新世に噴火した溶岩流台地が残存し、第四紀のテフラが保存されやすい平坦面や窪地があると示されている。
- ・現地調査の結果、瀨川山地点は瀨川山山頂部の平坦な台地に位置しており、ほぼ水平に層を成している湿地堆積物層が分布していることを確認した。

### 2. 火山灰層の観察結果

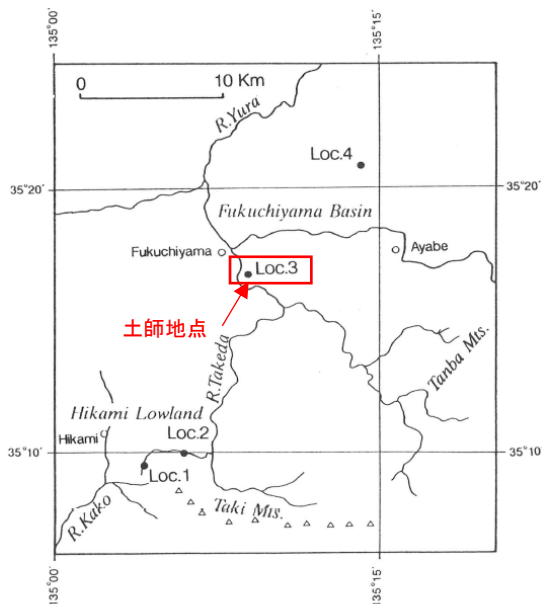
- ・調査地点は瀨川山の標高900-1,000mにおいて北東－南西に延びる山頂小起伏面に位置しており、その露頭法面では湿地堆積物や黄土質な堆積物に挟まれた3層の火山灰層を確認した。
- ・本調査で確認した3層の火山灰層は加藤他(2001)のものと同一のものであると推察される。
- ・この3層のうちDNPと思われる層は層厚10～15cmの褐色を呈する軽石質粗粒火山灰層で、径1mm以下の角閃石を多く含み、径1～5mmの軽石が見られた。
- ・このDNPの層は連続しており、大屋地点に比べて層厚の変化が小さいことを確認した。

対象となる火山灰層に再堆積であるような特徴は確認できず、降灰層厚として評価できると考えられる。



# 京都府福知山市 土師地点

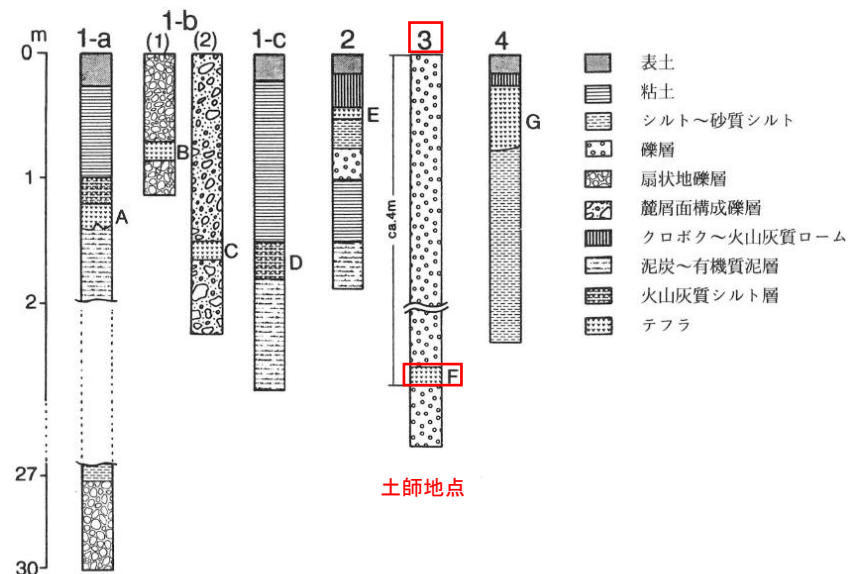
## 山元(2017)で引用している文献の記載内容



第1図 露頭位置図

(3) 福知山市土師：道路新設により出現し、井上(1984)が最初に報告した露頭 (Loc. 3)。露頭は長田野面の段丘崖下に位置する。ここにはコブル礫を主とする段丘礫層があり、礫層中の標高36～38m<sup>2)</sup>に、最大層厚50cmで、レンズ状に挟まれた、灰黄赤色の軽石(テフラF)がある。このテフラは10°傾いて堆積し、横方向へは、局所的に欠如する。テフラ中には最大径3mmの軽石を含むほか、細礫を含んでいる。この軽石の上位・下位の堆積物は泥質のマトリックスにとむ、チャート礫を主とした亜円～円礫よりなる礫層である。

野村(1994):氷上低地・福知山盆地に分布するテフラと地形学上の問題 より抜粋



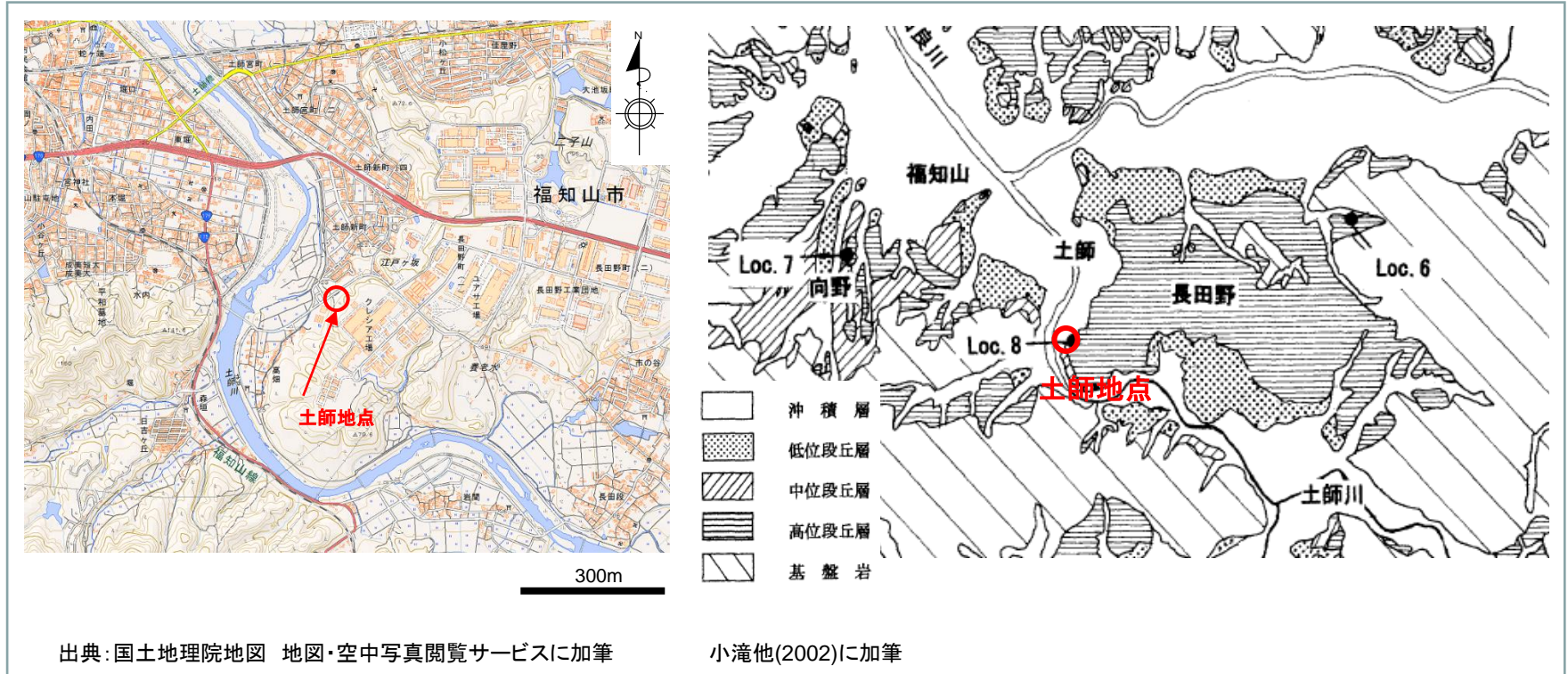
第3図 柱状図

野村(1994)に加筆

- ・野村(1994)によるとLoc.3(土師)では、段丘礫層中に最大層厚50cmのDNPがレンズ状に挟まれていると示されている。
- ・土師地点の地質はコブル礫を主とする段丘礫層であり、露頭法面の堆積物は泥質のマトリックスに富み、チャート礫を主とした亜円～円礫よりなる礫層である。



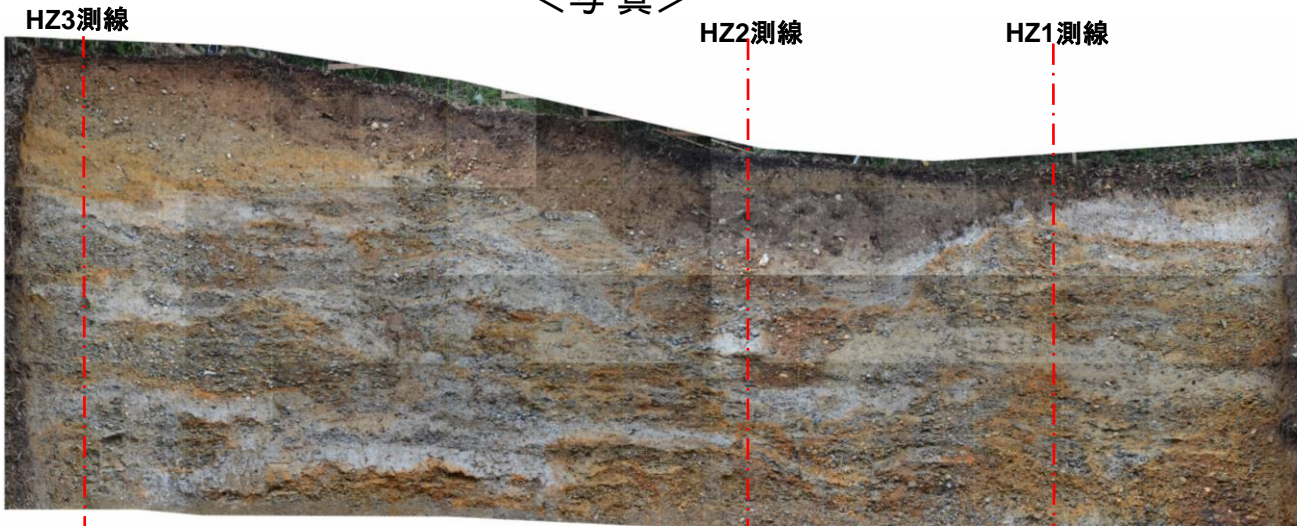
## 4.1 地形, 地質的な特徴



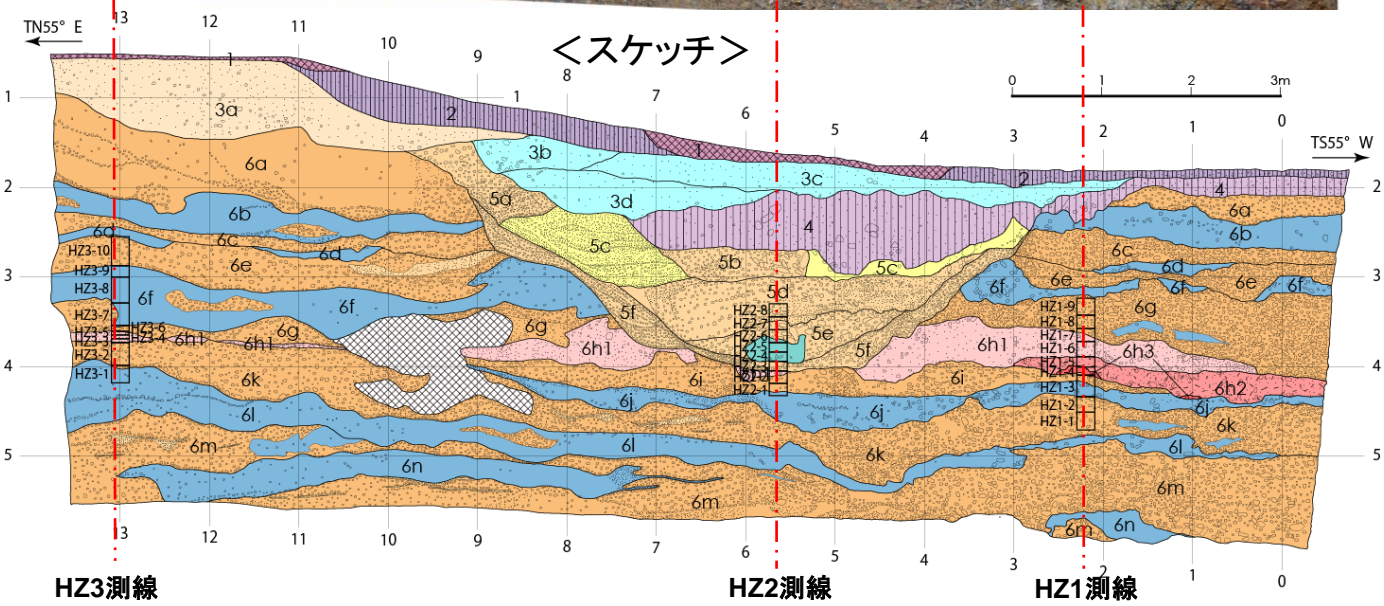
- ・土師地点は小滝他(2002)のLoc.8としても示されている地点であり, 小滝他(2002)によると露頭付近は土師の長田野面構成層にアバットして, 中位段丘層と考えられる砂礫層が局所的に分布すると示されている。

## 4.2 現地剥ぎ取り状況(写真, スケッチ)

<写真>



<スケッチ>



地質層序

記号	地層名	層相
1	人工改変土	礫混じり砂
2	表土, 産錐堆積物	砂質シルト, 礫混じり砂質シルト, 礫シルト質砂
3a	産錐堆積物	礫・シルト質砂
3b	産錐堆積物	砂質シルト, 礫混じり砂質シルト
3c	産錐堆積物	礫混じり砂質シルト
3d	産錐堆積物	砂混じり礫質シルト
4	産錐堆積物	礫混じり砂質シルト
5a	河川堆積物	砂・シルト質礫
5b	河川堆積物	砂質礫
5c	河川堆積物	砂・礫・シルト互層
5d	河川堆積物	砂質礫
5e	河川堆積物	砂混じり礫
5f	河川堆積物	砂・シルト質礫

地質層序

記号	地層名	層相
6a	河川堆積物	シルト混じり礫, 礫混じり砂質シルト
6b	河川堆積物	シルト, 礫混じりシルト
6c	河川堆積物	砂・シルト混じり礫, 砂質礫
6d	河川堆積物	礫混じり砂質シルト, 砂混じりシルト
6e	河川堆積物	砂質礫, 砂混じり礫
6f	河川堆積物	砂混じり礫質シルト, 礫・砂混じりシルト
6g	河川堆積物	砂質礫
6h1	河川堆積物	礫・砂混じりシルト (火山灰起源の粒子を含む)
6h2	河川堆積物	礫・火山灰混じりシルト
6h3	河川堆積物	火山灰質シルト
6i	河川堆積物	砂質礫
6j	河川堆積物	礫・砂混じりシルト
6k	河川堆積物	砂質礫, 砂混じり礫
6l	河川堆積物	礫・砂混じりシルト, シルト質砂
6m	河川堆積物	礫
6n	河川堆積物	礫・砂混じりシルト

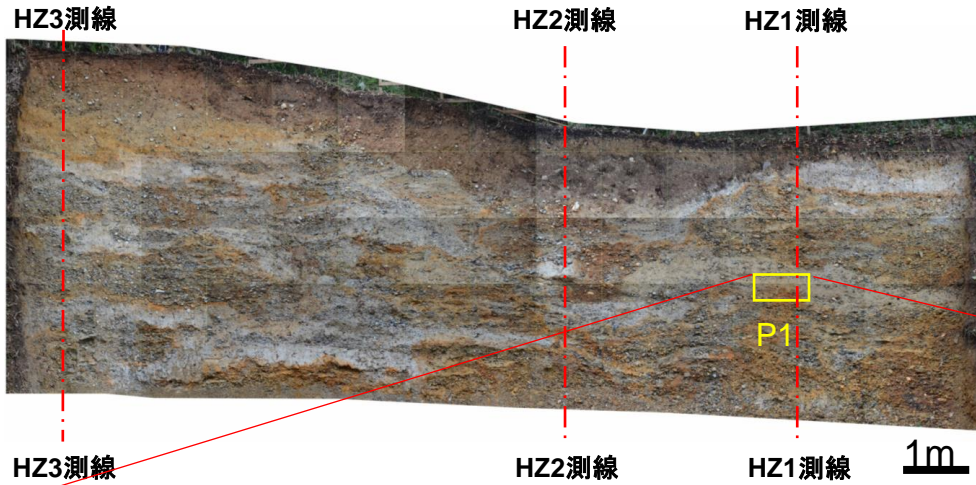
地質記号等凡例

	人工改変
	シルト
	有機質土
	有機質シルト
	火山灰混じりシルト
	火山灰質シルト
	砂
	礫
	地層境界
	6a : 層序区分
	HZ1-1 □ 火山灰分析試料採取位置



## 4.2 現地剥ぎ取り状況(写真, スケッチ)

<詳細写真>



## 4.2 現地剥ぎ取り状況(写真, スケッチ)

### <写真, スケッチからの考察>

・主に礫からなる河川堆積物や崖錐堆積物が複数の層を構成している。それらの層の中に火山灰を含む3つの層を確認した。

6h層: 礫及びシルトの互層からなる火山灰を含む河川堆積物。その性状によりさらに三層に細分。

6h1層: 礫・砂混じりシルト(火山灰起源の粒子を含む)

6h2層: 灰褐色を呈する礫・火山灰混じりシルト

6h3層: 明褐色を呈する粗粒な火山灰質シルト(層厚5-10cm)。

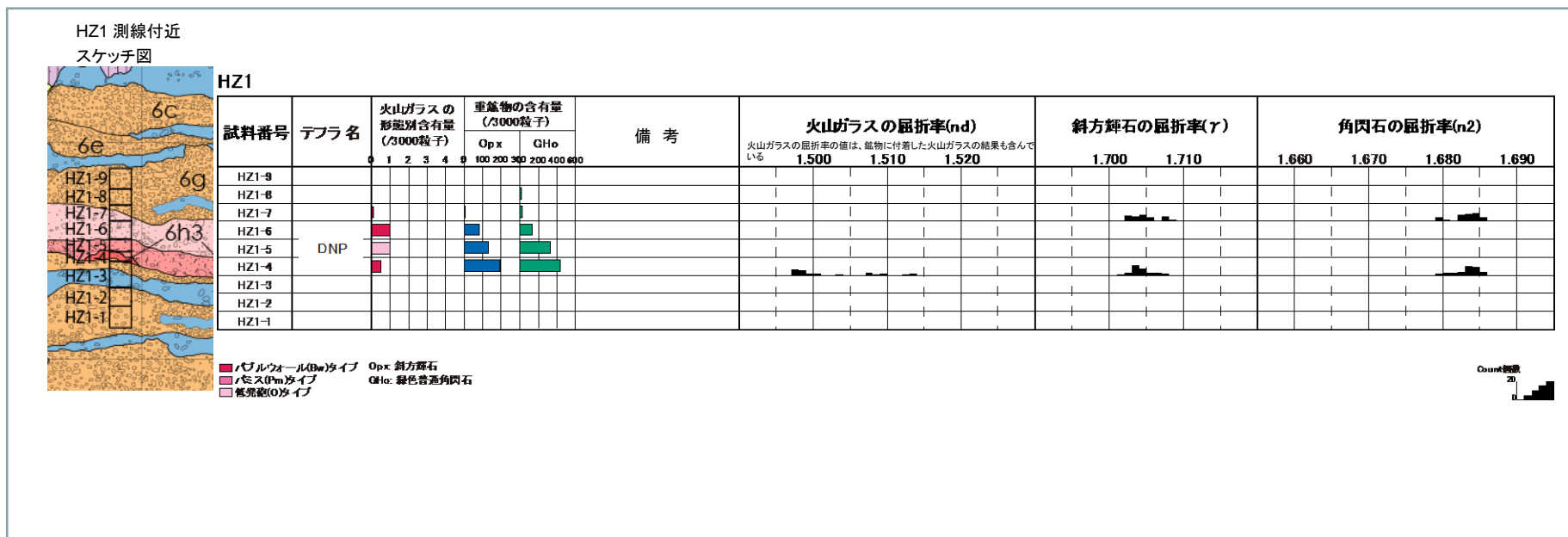
その分布は断続的であり連続性に乏しい。また火山灰質シルトには碎屑物起源の細礫や砂粒子が含まれる。

・野村(1994)に記載されている火山灰層の特徴(河川由来の礫や砂を多く含んでいるなど)から、野村(1994)、小滝(2002)で示されている火山灰層は6h1層～6h3層であることが考えられる。

・6h1層～6h3層を比較的多く含んでいる測線(HZ1)、旧河床面の中心にあり6h1層～6h3層の一部を含んでいる測線(HZ2)、6h1層～6h3層の一部を含んでいる測線(HZ3)の計3つの測線から試料を採取し、鉱物組成及び屈折率測定を行った。



## 4.3 鉱物組成及び屈折率測定の結果



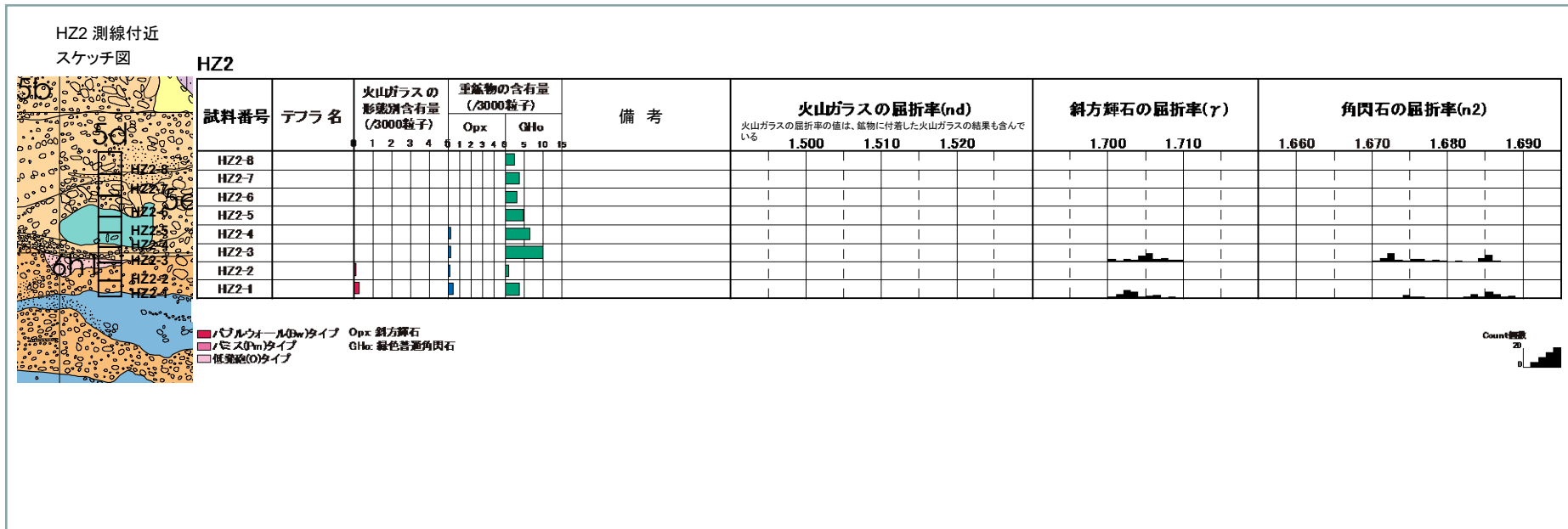
### 【HZ1 測線】

- 火山灰を含んでいる6h1～6h3から採取したHZ1-4, HZ1-5, HZ1-6の3試料に、多くの火山灰起源の斜方輝石や普通角閃石を含んでいることを確認した。
- 斜方輝石の屈折率は1.701-1.709を示し、普通角閃石の屈折率は1.679-1.686を示した。これらの屈折率は、古澤・梅田(2002)<sup>※1</sup>による大山池露頭のDNPの屈折率とほぼ一致している。

上記の結果よりHZ1測線上に分布する火山灰を含む河川堆積物層(6h1層～6h3層)中には、DNPが含まれていると推察される。

※1: 古澤・梅田(2002) 新期大山テフラDNP, DSP, DKPの岩石記載の特徴の再検討, 第四紀研究, vol.41, No.2, p.123-129, 日本第四紀学会.

## 4.3 鉱物組成及び屈折率測定の結果



### 【HZ2 測線】

- 全体的に少量の普通角閃石を、一部の試料にごくわずかな斜方輝石を含んでいることを確認した。
- 斜方輝石の屈折率は1.700-1.710を示し、角閃石の屈折率は1.671-1.689を示した。  
斜方輝石の屈折率は、古澤・梅田(2002)<sup>※1</sup>による大山池露頭のDNPの屈折率とほぼ一致しているが、角閃石の屈折率は差異が出ている。

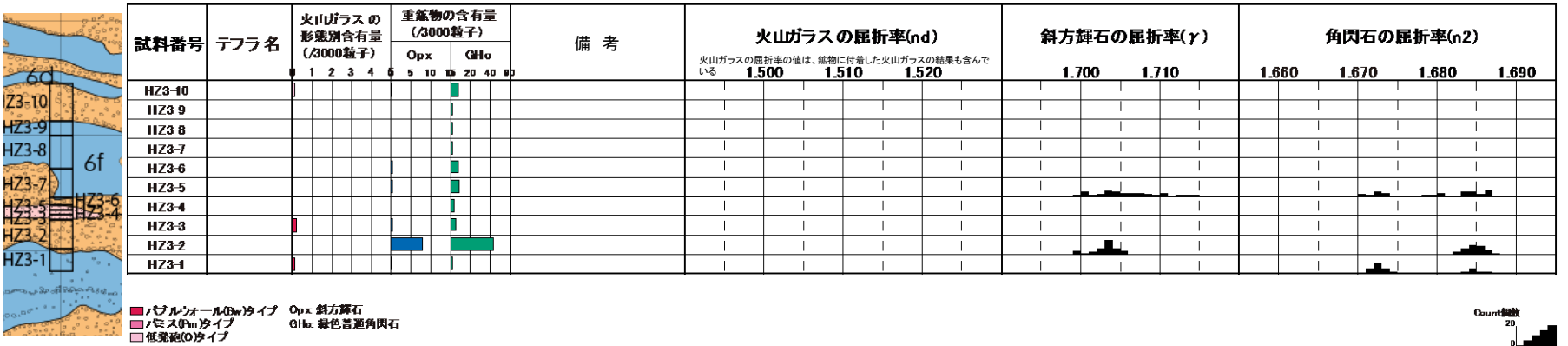
上記の結果よりHZ2測線上に分布する火山灰を含む河川堆積物層(6h1層)中には、DNPと他の火山灰、若しくは他の火山灰が含まれている可能性が考えられる。

※1: 古澤・梅田(2002) 新期大山テフラDNP, DSP, DKPの岩石記載的特徴の再検討, 第四紀研究, vol.41, No.2, p.123-129, 日本第四紀学会.



## 4.3 鉱物組成及び屈折率測定の結果

HZ3 測線付近  
スケッチ図



### 【HZ3 測線】

- HZ3-2に少量の斜方輝石と普通角閃石を含んでおり、その他の試料にはごくわずかな斜方輝石と普通角閃石を含んでいることを確認した。
- 斜方輝石の屈折率は1.699-1.715を示し、角閃石の屈折率は1.670-1.687を示した。斜方輝石の屈折率は、古澤・梅田(2002)<sup>※1</sup>による大山池露頭のDNPの屈折率とほぼ一致しているが、角閃石の屈折率は差異が出ている。

上記の結果よりHZ3測線上に分布する火山灰を含む河川堆積物層(6h1層)中には、DNPと他の火山灰、若しくは他の火山灰が含まれている可能性が考えられる。

※1: 古澤・梅田(2002) 新期大山テフラDNP, DSP, DKPの岩石記載的特徴の再検討, 第四紀研究, vol.41, No.2, p.123-129, 日本第四紀学会.

## 4.4 考察

### 1. 地質学, 地形学的見地からの特徴

- ・土師地点は土師の長田野面構成層にアバットして、中位段丘層と考えられる砂礫層が局所的に分布するところである。

### 2. 火山灰を含む層の観察, 分析結果

- ・露頭では主に礫からなる河川堆積物や崖錐堆積物が複数の層を構成している。それらの層の中に火山灰を含む3つの層6h1, 6h2, 6h3を確認した。
- ・斜方輝石と普通角閃石の屈折率よりHZ1測線上に分布する火山灰を含む河川堆積物層(6h1層~6h3層)中には, DNPが含まれていると推察される。
- ・斜方輝石と普通角閃石の屈折率よりHZ2測線上に分布する火山灰を含む河川堆積物層(6h1層)中には, DNPと他の火山灰, 若しくは他の火山灰が含まれている可能性が考えられる。
- ・斜方輝石と普通角閃石の屈折率よりHZ3測線上に分布する火山灰を含む河川堆積物層(6h1層)中には, DNPと他の火山灰, 若しくは他の火山灰が含まれている可能性が考えられる。

対象となる層は円礫を多く含む河川堆積物に火山灰が含まれているものであり、降灰層厚として評価できない。